

丸亀市内遺跡発掘調査報告書

第 4 集

平成20年度国庫補助事業報告書

土器町西二丁目地区

飯山町東坂元字楠見地区

津森町字高丸地区

綾歌町岡田西字新田地区

綾歌町栗熊西字大妻田地区

綾歌町栗熊東字下河西地区

飯山町東小川字前谷地区

金倉町字道下地区

田村町字橋の坪地区

飯野東二字中代地区

藏ノ内遺跡

行末西遺跡

藏ノ内遺跡

2009. 3

丸亀市教育委員会

例　　言

1. 本書は、丸亀市が平成20年度国庫補助事業として実施した丸亀市内遺跡発掘調査概要報告書である。
2. 今回の遺跡発掘調査は、土器町西二丁目地区、飯山町東坂元字楠見地区、津森町字高丸地区、綾歌町岡山西字新田地区、綾歌町栗熊西字大妻田地区、綾歌町栗熊東字下河西地区、飯山町東小川字前谷地区、金倉町字道下地区、田村町字橋の坪地区、飯野町東二字中代地区、綾歌町富熊字藏ノ内地区、綾歌町富熊字沖地区、綾歌町富熊字藏ノ内地区を対象とした。
3. 調査主体は、丸亀市教育委員会である。
4. 土器町西二丁目地区、飯山町東坂元字楠見地区、津森町字高丸地区、綾歌町岡山西字新田地区、綾歌町栗熊西字大妻田地区、綾歌町栗熊東字下河西地区、飯山町東小川字前谷地区、金倉町字道下地区、田村町字橋の坪地区、飯野町東二字中代地区、綾歌町富熊字藏ノ内地区、綾歌町富熊字沖地区、綾歌町富熊字藏ノ内地区の試掘調査は、丸亀市教育委員会教育部文化課近藤武司が担当して行った。
5. 本書に用いた遺構表示の略号は次のとおりである。
S H . . . 挿立壁柱建物、S B . . . 壁穴住居、S P . . . ピット（柱穴）、
S K . . . 土坑、S D . . . 溝
6. 出土遺物及び実測図等の資料整理は、谷口梢、北山多佳子及び鎌谷周子が行った。
7. 本書の執筆は、近藤、谷口、北山及び鎌谷が分担して行い、編集は、近藤が行った。
8. 本書の測量図の縮尺は、スケールで表示した。また、方位は世界測地系による方位（T. N.）及び磁北（M. N.）で表示した。
9. 本書の断面図に記載してある「土色」は、農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所色票 監修『新版標準土色帖2004年版』による。
10. 調査地の位置を示した挿図については、国土地理院地形図「丸亀」(50, 000分の1)、丸亀市が作成した都市計画図(10, 000分の1:平成18年承認番号第25号)、旧綾歌町が作成した綾歌町全図(10, 000分の1:平成13年8月)及び旧飯山町が作成した飯山都市計画図(10, 000分の1:平成8年)を使用した。
11. 綾歌町富熊字沖地区試掘調査の実施にあたっては乗松真也氏に、また、本書の作成にあたっては片桐孝浩、北山健一郎、山元敏裕諸氏にご協力を得た。ここに記して感謝の意を表す。

目次

本文目次

第Ⅰ章	平成20年度丸亀市内遺跡発掘調査事業概要	1
第Ⅱ章	上器町西二丁目地区試掘調査	4
1.	立地と環境	4
2.	調査に至る経緯と調査の経過	4
3.	調査の概要	4
4.	まとめ	6
第Ⅲ章	飯山町東坂元字楠見地区試掘調査	8
1.	立地と環境	8
2.	調査に至る経緯と調査の経過	8
3.	調査の概要	8
4.	まとめ	16
第Ⅳ章	津森町字高丸地区試掘調査	22
1.	立地と環境	22
2.	調査に至る経緯と調査の経過	22
3.	調査の概要	22
4.	まとめ	27
5.	出土木製品分析結果	28
第Ⅴ章	綾歌町岡田西字新田地区試掘調査	32
1.	立地と環境	32
2.	調査に至る経緯と調査の経過	32
3.	調査の概要	32
4.	まとめ	35
第Ⅵ章	綾歌町栗熊西字大妻田地区試掘調査	37
1.	立地と環境	37
2.	調査に至る経緯と調査の経過	37
3.	調査の概要	37
4.	まとめ	41
5.	出土木製品分析結果	42
第Ⅶ章	綾歌町栗熊東字下河西地区試掘調査	46
1.	立地と環境	46
2.	調査に至る経緯と調査の経過	46
3.	調査の概要	46
4.	まとめ	48
第Ⅷ章	飯山町東小川字前谷地区試掘調査	53
1.	立地と環境	53
2.	調査に至る経緯と調査の経過	53
3.	調査の概要	53
4.	まとめ	56
第Ⅸ章	金倉町字道下地区試掘調査	59
1.	立地と環境	59
2.	調査に至る経緯と調査の経過	59

3.	調査の概要	5 9
4.	まとめ	6 2
第X章	田村町字橋の坪地区試掘調査	6 4
1.	立地と環境	6 4
2.	調査に至る経緯と調査の経過	6 4
3.	調査の概要	6 4
4.	まとめ	7 0
第XI章	飯野町東二字中代地区試掘調査	7 4
1.	立地と環境	7 4
2.	調査に至る経緯と調査の経過	7 4
3.	調査の概要	7 4
4.	まとめ	7 9
第XII章	綾歌町富熊字藏ノ内地区試掘調査【藏ノ内遺跡】	8 2
1.	立地と環境	8 2
2.	調査に至る経緯と調査の経過	8 2
3.	調査の概要	8 2
4.	まとめ	8 9
第XIII章	綾歌町富熊字沖地区試掘調査【行末西遺跡】	9 4
1.	立地と環境	9 4
2.	調査に至る経緯と調査の経過	9 4
3.	調査の概要	9 4
4.	まとめ	1 0 0
第XIV章	綾歌町富熊字藏ノ内地区試掘調査【藏ノ内遺跡】	1 0 5
1.	立地と環境	1 0 5
2.	調査に至る経緯と調査の経過	1 0 5
3.	調査の概要	1 0 5
4.	まとめ	1 1 0
第XV章	まとめ	1 1 5

挿図目次

第1図	平成20年度丸龜市内遺跡発掘調査対象地	3
土器町西二丁目地区		
第2図	調査地位置図	4
第3図	トレンチ配置図	5
第4図	1~3トレンチ断面図	5
飯山町東坂元字楠見地区		
第5図	調査地位置図	8
第6図	1区5トレンチ出土遺物実測図	8
第7図	トレンチ配置図	9
第8図	1区1~6トレンチ平面・断面図	10
第9図	2区1~3トレンチ断面図	11
第10図	3区出土遺物実測図	11
第11図	3区1~3トレンチ断面図	12
第12図	4区1~3トレンチ断面図	13
第13図	5区1トレンチ断面図	13
第14図	6区1~3トレンチ平面・断面図	14
第15図	6区出土遺物実測図	14
第16図	7区1トレンチ断面図	15
第17図	7区出土遺物実測図	15
津森町字高丸地区		
第18図	調査地位置図	22
第19図	トレンチ配置図	23
第20図	1・2トレンチ断面図	24
第21図	3トレンチ断面図	25
第22図	出土遺物実測図	25
第23図	4~6トレンチ断面図	26
綾歌町岡田西字新田地区		
第24図	調査地位置図	32
第25図	出土遺物実測図	32
第26図	トレンチ配置図	33
第27図	1・2トレンチ平面・断面図	34
第28図	3・4トレンチ平面・断面図	35
綾歌町栗熊西字大妻田地区		
第29図	調査地位置図	37
第30図	トレンチ配置図	38
第31図	1~3トレンチ断面図	39
第32図	出土遺物実測図	40
綾歌町栗熊東字下河西地区		
第33図	調査地位置図	46
第34図	出土遺物実測図	46
第35図	トレンチ配置図	47
第36図	1~3トレンチ断面図	49
第37図	4・5トレンチ断面図	50

飯山町東小川字前谷地区	
第38図 調査地位置図	53
第39図 出土遺物実測図	54
第40図 トレンチ配置図	54
第41図 1~5トレンチ断面図	55
金倉町字道下地区	
第42図 調査地位置図	59
第43図 トレンチ配置図	60
第44図 1トレンチ断面図	61
第45図 2トレンチ断面図	62
田村町字橋の坪地区	
第46図 調査地位置図	64
第47図 トレンチ配置図	65
第48図 1~3トレンチ出土遺物実測図	66
第49図 1~3トレンチ断面図	67
第50図 4~5トレンチ断面図	68
第51図 6トレンチ断面図	68
第52図 7トレンチ断面図	69
第53図 6~7トレンチ出土遺物実測図	70
飯野町東二字中代地区	
第54図 調査地位置図	74
第55図 トレンチ配置図	75
第56図 1トレンチ断面図	76
第57図 出土遺物実測図	76
第58図 2~3トレンチ断面図	77
第59図 4~6トレンチ断面図	78
綾歌町富熊字藏ノ内地区【藏ノ内遺跡】	
第60図 調査地位置図	82
第61図 トレンチ配置図	83
第62図 1~3トレンチ断面図	84
第63図 4~6トレンチ断面図	85
第64図 7~9トレンチ断面図	86
第65図 出土遺物実測図	88
第66図 10トレンチ断面図	89
綾歌町富熊字沖地区【行末西遺跡】	
第67図 調査地位置図	94
第68図 トレンチ配置図	95
第69図 1トレンチ断面図	96
第70図 1トレンチ出土遺物実測図	96
第71図 2トレンチSK01~03断面図	97
第72図 3~4トレンチ断面図	98
第73図 2~4トレンチ出土遺物実測図	99
綾歌町富熊字藏ノ内地区【藏ノ内遺跡】	
第74図 調査地位置図	105
第75図 トレンチ配置図	106
第76図 1~2トレンチ断面図	107

第77図	1～3トレンチ出土遺物実測図	108
第78図	3トレンチ断面図	109
第79図	4トレンチ断面図	109
第80図	4トレンチ出土遺物実測図	110

表目次

第1表	土器町西二丁目地区試掘調査 トレンチ概要	6
第2表	飯山町東坂元字楠見地区試掘調査 トレンチ概要	15
第3表	津森町字高丸地区試掘調査 トレンチ概要	27
第4表	綾歌町岡田西字新田地区試掘調査 トレンチ概要	35
第5表	綾歌町栗熊西字大妻田地区試掘調査 トレンチ概要	40
第6表	綾歌町栗熊東字下河西試掘調査 トレンチ概要	48
第7表	飯山町東小川字前谷地区試掘調査 トレンチ概要	56
第8表	金倉町字道下地区試掘調査 トレンチ概要	62
第9表	田村町字橋の坪地区試掘調査 トレンチ概要	70
第10表	飯野町東二字中代地区試掘調査 トレンチ概要	79
第11表	綾歌町富熊字蔵ノ内地区試掘調査 トレンチ概要	87
第12表	綾歌町富熊字沖地区試掘調査 トレンチ概要	100
第13表	綾歌町富熊字蔵ノ内地区試掘調査 トレンチ概要	109
第14表	調査に関する処理事務総括表	118

写真図版目次

図版 1	上器町西二丁目地区試掘調査	7
図版 2	飯山町東坂元字楠見地区試掘調査（1）	17
図版 3	飯山町東坂元字楠見地区試掘調査（2）	18
図版 4	飯山町東坂元字楠見地区試掘調査（3）	19
図版 5	飯山町東坂元字楠見地区試掘調査（4）	20
図版 6	飯山町東坂元字楠見地区試掘調査（5）	21
図版 7	津森町字高丸地区試掘調査（1）	30
図版 8	津森町字高丸地区試掘調査（2）	31
図版 9	綾歌町岡田西字新田試掘調査	36
図版 10	綾歌町栗熊西字大妻田地区試掘調査（1）	44
図版 11	綾歌町栗熊西字大妻田地区試掘調査（2）	45
図版 12	綾歌町栗熊東字下河西地区試掘調査（1）	51
図版 13	綾歌町栗熊東字下河西地区試掘調査（2）	52
図版 14	飯山町東小川字前谷地区試掘調査（1）	57
図版 15	飯山町東小川字前谷地区試掘調査（2）	58
図版 16	金倉町字道下地区試掘調査	63
図版 17	田村町字橋の坪地区試掘調査（1）	71
図版 18	田村町字橋の坪地区試掘調査（2）	72
図版 19	田村町字橋の坪地区試掘調査（3）	73
図版 20	飯野町東二字中代地区試掘調査（1）	80
図版 21	飯野町東二字中代地区試掘調査（2）	81
図版 22	綾歌町富熊字藏ノ内地区試掘調査（1）	90
図版 23	綾歌町富熊字藏ノ内地区試掘調査（2）	91
図版 24	綾歌町富熊字藏ノ内地区試掘調査（3）	92
図版 25	綾歌町富熊字藏ノ内地区試掘調査（4）	93
図版 26	綾歌町富熊字沖地区試掘調査（1）	101
図版 27	綾歌町富熊字沖地区試掘調査（2）	102
図版 28	綾歌町富熊字沖地区試掘調査（3）	103
図版 29	綾歌町富熊字沖地区試掘調査（4）	104
図版 30	綾歌町富熊字藏ノ内地区試掘調査（1）	111
図版 31	綾歌町富熊字藏ノ内地区試掘調査（2）	112
図版 32	綾歌町富熊字藏ノ内地区試掘調査（3）	113
図版 33	綾歌町富熊字藏ノ内地区試掘調査（4）	114

第Ⅰ章 平成20年度丸亀市内遺跡発掘調査事業概要

丸亀市は、香川県の中央からやや西寄りの海岸に面した位置に所在する。市域のほとんどは平野部で、丸亀平野の大半を占めている。東は綾歌郡宇多津町・坂出市、南は仲多度郡まんのう町・同郡琴平町、西は善通寺市・仲多度郡多度津町、北には瀬戸内海が面し、岡山県倉敷市が対面している。

丸亀市の所在する丸亀平野は、県下最高峰の竜王山（1059.9m）と第二の高峰大川山（1042.9m）の山間に源を発する土器川を主に、東から大東川、土器川、金倉川、弘田川によって形成された緩扁状地・氾濫原と冲積平野からなる県下最大規模の平野である。

昭和57年度より開始された四国横断自動車道の建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査は、多くの遺跡を発見するに至り、丸亀市内での歴史的環境が明らかにされてきた。

近年でも、国道バイパス建設工事などの開発事業に先立つ丸亀平野各地の発掘調査が積極的に行われ、徐々にではあるが、遺跡の保護、遺跡の内容把握、普及啓発を進めていくことができている。

このような背景の中、丸亀市内の各地で大小規模の開発は活発で、その対象地が周知の埋蔵文化財包蔵地内やそれに隣接する場所である場合が多く、埋蔵文化財の保護措置を図るための試掘調査及び確認調査を実施し、遺跡の所在の有無及びその内容について確認するため、国庫及び県費補助金をあてて調査を実施している。今年度についても、国庫補助金をあて同事業を継続して実施することとした。

補助事業については、平成20年4月7日付け20教文第16号で国庫補助金申請を提出し、平成20年6月2日付け20教文生第5392号で交付決定を受けた。

今年度については、例年よりも事業数が多く、土器町西二丁目地区、飯山町東坂元字楠見地区、津森町字高丸地区、綾歌町岡田西字新田地区、綾歌町栗熊西字大妻田地区、綾歌町栗熊東字下河西地区、飯山町東小川字前谷地区、金倉町字道下地区、田村町字橋の坪地区、飯野町東二字中代地区、綾歌町富熊字藏ノ内地区、綾歌町富熊字沖地区及び綾歌町富熊字藏ノ内地区的計13ヶ所で遺跡の所在の有無を確認するための試掘調査を実施した。

土器町西二丁目地区試掘調査は、携帯電話無線基地局建設に伴うもので、近隣での埋蔵文化財調査事例が無く、包蔵地の状況が不明であったことから、事前調査をすることが適当であると判断し、試掘調査を実施することとなった。

飯山町東坂元字楠見地区試掘調査は、公共施設建設に伴うもので、この近隣での埋蔵文化財調査事業事例が無く、包蔵地の状況が不明であったことから、事前調査をすることが適当であると判断し、試掘調査を実施することとなった。

津森町字高丸地区試掘調査は、店舗併用住宅建設事業に伴うもので、当該地西側には『中の池遺跡（弥生前：集落跡）』『道下遺跡（弥生～近世：包含地）』『新田橋本遺跡（弥生・古墳：集落跡）』『今津中原遺跡（古代～中世：集落跡）』の集落遺跡が広い範囲で分布しており、東方にも『津森位遺跡（古代～中世：集落跡）』が近接しており、周辺の遺跡と関連する可能性を考えられたため、試掘調査を実施することとなった。

綾歌町岡田西字新田地区試掘調査は、個人住宅建設に伴うもので、東側の大塩池内に『大塩池遺跡（旧石器：包含地）』が所在し、その下流域には『東原遺跡（弥生～中世：集落跡）』が所在する。西側には、『上川井遺跡（古墳～中世：集落跡）』、南西一帯では『岡田万塚（古墳：古墳）』が知られており、様々な時代の遺跡が集中している。関連遺構の展開している可能性があることから、試掘調査を実施することとなった。

綾歌町栗熊西字大妻田地区試掘調査は、個人住宅建設用地開発に伴うもので、当該地は東大東川の右岸域に広がる緩やかな微高地に位置し、西側に隣接して『佐古川遺跡（縄文～中世：集落跡）』が存在し、東側には『石塚山古墳群（弥生末～古墳：墳墓）』が所在していることから、これらの遺跡に関連する遺跡が展開している可能性が考えられたため、試掘調査を実施することとなった。

綾歌町栗熊東字下河西地区試掘調査は、店舗建設用地開発に伴うものである。計画地は南部の猫山から派生する尾根先端付近の微高地先端部付近に位置し、西側の微高地には『行末西遺跡（弥生・古墳：集落跡）』が所在することがわかっている。関連する遺跡の分布が予想されることから、試掘調査を実施した。

飯山町東小川字前谷地区試掘調査は、個人住宅建設用地開発に伴うもので、付近は、古墳時代中期の『岡

田万塚（古墳：古墳）』として古墳の分布する区域である。資料によると、当該地の北東隅及び南西隅付近にも古墳の所在が記されていることから、試掘調査を実施することとなった。

金倉町字道下地区試掘調査は、宅地分譲住宅建設用地開発に伴うもので、当該地は金倉川の右岸域に位置し、北部一帯に隣接して『道下遺跡（弥生～近世：集落跡）』、南部一帯には『中の池遺跡（弥生前：集落跡）』が所在している。また東側では、『新田橋本遺跡（弥生・古墳：集落跡）』『今津中原遺跡（古代～中世：集落跡）』が近年の調査によって、明らかになってきている。これらの遺跡に関連する遺跡が展開される可能性が考えられることから、試掘調査を実施することとなった。

田村町字橋の坪地区試掘調査は、宅地分譲住宅建設用地開発に伴うもので、調査対象地の直近では調査事例が無く、埋蔵文化財の包蔵地状況は不明であった。しかし、西方の先代池・平池周辺には『中の池遺跡（弥生前：集落跡）』『道下遺跡（弥生～近世：包含地）』『平池西遺跡（縄文・弥生：包含地）』『平池南遺跡（縄文・弥生：包含地）』『平池東遺跡（弥生：包含地）』など広い範囲で遺跡の分布が確認されている。更に、北方には『田村廢寺（奈良：寺院）』『田村遺跡（古代：寺院）』などが所在しており、各時代の遺跡が集中している地域であることや地理的状況から考えると遺跡の包含が推測されることから、試掘調査を実施した。

飯野町東二字中代地区試掘調査は、店舗建設用地開発の事業計画に伴うもので、当該地は飯山西裾部に位置し、南300m地点では『西坂元内板遺跡（弥生・古墳・中世：集落跡）』が所在し、北北東500m付近には飯野山の麓に『飯野山西麓散布地（弥生～古代：散布地）』が広範囲にわたり広がっている。調査対象地は、周辺の土地よりも一段高くなってしまっており、以前から微高地であったことが伺え、周辺の遺跡分布や地理的状況から考えると、遺跡の分布が推測されることから試掘調査を実施することとなった。

綾歌町富熊字藏ノ内地区試掘調査は、分譲住宅建設に伴うもので、当該地周辺の丘陵部には『横山経塚古墳群（古墳：古墳）』『地神山古墳群（古墳：古墳）』『宮前八幡神社古墳（古墳：古墳）』が所在する。平野部では、北側100m地点に『庄遺跡（弥生～中世：集落跡）』、南150m地点に『塔寺遺跡（不明：包含地）』が所在している。このように、弥生時代から古墳時代にかけて活発な地域であったことが伺え、塔寺遺跡のある付近から緩やかに延びる微高地の先端部付近にあたり、北側の谷部を挟んだ北対岸部に庄遺跡が所在することからも同様の遺跡が所在する可能性が極めて高いことから、試掘調査を実施することとした。

綾歌町富熊字沖地区試掘調査は、宅地分譲建設用地の開発に伴うもので、対象地は、東の羽床盆地から続く平野の絞り込まれた地域で、南東には『行末西遺跡（弥生・古墳：集落跡）』『行末遺跡（弥生：集落跡）』が所在しており、この付近も遺跡の分布状況が高いものと推測でき、試掘調査を実施することとなった。

綾歌町富熊字藏ノ内地区試掘調査は、歯科医院建設に伴うもので、当該地周辺の丘陵部には『横山経塚古墳群（古墳：古墳）』『地神山古墳群（古墳：古墳）』『宮前八幡神社古墳（古墳：古墳）』が所在している。平野部では、北側350m地点に『庄遺跡（弥生～中世：集落跡）』、南隣接地点に『塔寺遺跡（不明：包含地）』が所在している。このように、弥生時代から古墳時代にかけて活発な地域であったことが伺え、塔寺遺跡のある付近から緩やかに延びる微高地上にあたり、立地は安定している。周辺の遺跡分布状況からも遺跡が所在する可能性が極めて高いことから、試掘調査を実施することとなった。

これら13件の調査を実施した結果、綾歌町富熊字藏ノ内地区的2ヶ所を藏ノ内遺跡として新たに発見することができた。そして、綾歌町富熊字沖地区では行末西遺跡として1遺跡を追加登録することとなった。

その他の調査では、飯山町東坂元字橋見地区、津森町字高丸地区、綾歌町岡田西字新田地区、綾歌町栗熊西字大妻田地区、飯山町東小川字前谷地区、金倉町字道下地区、田村町字橋の坪地区、飯野町東二字中代地区の8地区において埋蔵文化財包蔵地を確認したが保護措置は不要と判断した。

その他の地区では、埋蔵文化財の所在が確認できなかったことや、検出内容が極めて希薄であったこと等から遺跡としての取り扱いは不要であるとの結論に至った。

これらの調査によって得られた資料に基づき、それぞれの開発事業者と埋蔵文化財の保存について協議し、適切な保護を図ることができた。

また、今後計画される開発などにもこれらの成果を反映し文化財の保護に役立てたい。

以上、平成20年度の丸亀市内遺跡発掘調査事業は、丸亀市内で計画された13件の事業に伴う試掘調査を実施し、平成20年6月2日から開始し平成21年3月31日に終了した。



- 1. 土器町西二丁目地区
- 2. 鶴山町東坂元字椿見地区
- 3. 津森町字高丸地区
- 4. 綾歌町阿田西字新田地区
- 5. 綾歌町栗原西字大妻田地区
- 6. 綾歌町栗原東字下河西地区
- 7. 鶴山町東小川字前谷地区
- 8. 金倉町字道下地区
- 9. 田村町字権の坪地区
- 10. 鶴野町東二字中代地区
- 11. 綾歌町富熊字道ノ内地区（戦ノ内遺跡）
- 12. 綾歌町富熊字津地区（行末西遺跡）
- 13. 綾歌町富熊字道ノ内地区（戦ノ内遺跡）

第1図 平成20年度丸亀市内遺跡発掘調査対象地

土器町西二丁目地区

第Ⅱ章 土器町西二丁目地区試掘調査

調査対象地 丸亀市土器町西二丁目 162
 調査期間 平成20年6月19日
 調査面積 約16.8m² (調査対象地面積181.07m²)

1. 立地と環境

当該地は、上器町西二丁目に位置する畠地である。以前は宮の浦と称されていた。宮池の北側に所在する十二社宮の元社叢地である。更に北側の川古集落は『和名類聚抄』にも登場することからも古くから開けた地域であることが読み取れる。

宮池では石包丁などの石器が採取されている。また、南に目を向けると双子山周辺には古墳時代の包蔵地が知られている。

2. 調査に至る経緯と調査の経過

KDDI 無線基地局の設置の計画に伴い、平成20年6月3日埋蔵文化財の所在及びその取り扱いについての照会文書が提出された。

近隣での埋蔵文化財調査事例が無く、包蔵地の状況は不明であったことから、事前調査をすることが適当であるとの判断の元、試掘調査を実施した。調査の結果、遺構は確認できなかったことから、8月20日保護措置は不要である旨の回答を事業者に行った。

3. 調査の概要

調査は、計画地内に3箇所でのトレンチ調査とした。以下、トレンチ毎に概要を記述する。

【1 トレンチ】

計画地南面に沿って東西軸で設定した。耕作土直下には、灰黄色系の粘質土が堆積し、その下層には更に褐色がかった層を確認した。いずれもベース層と考えられる。遺物、遺構共に認められなかった。

【2 トレンチ】

計画地北面に沿って東西軸で設定した。耕作土直下に床土が敷かれている。その下面是整っておらず、水平堆積は見られない。トレンチ東端では、地形の傾斜により影響を受けていると推測される疊層が認められる。その疊層の西側に土坑状の落ちを1箇所検出したが、遺構として取り扱いの可否は難しい。

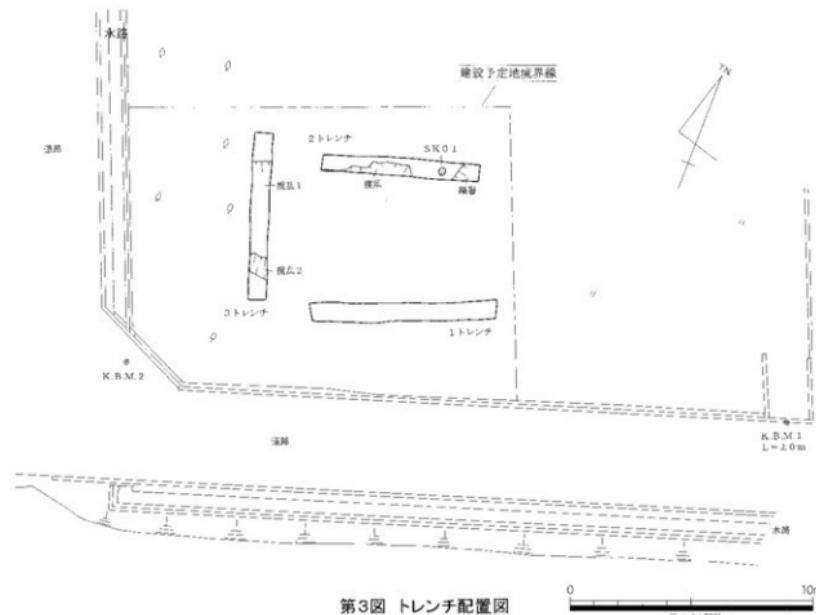
その他の遺構、遺物は共に認められない。トレンチ南半部は搅乱を受けており旧状は留めていない。

【3 トレンチ】

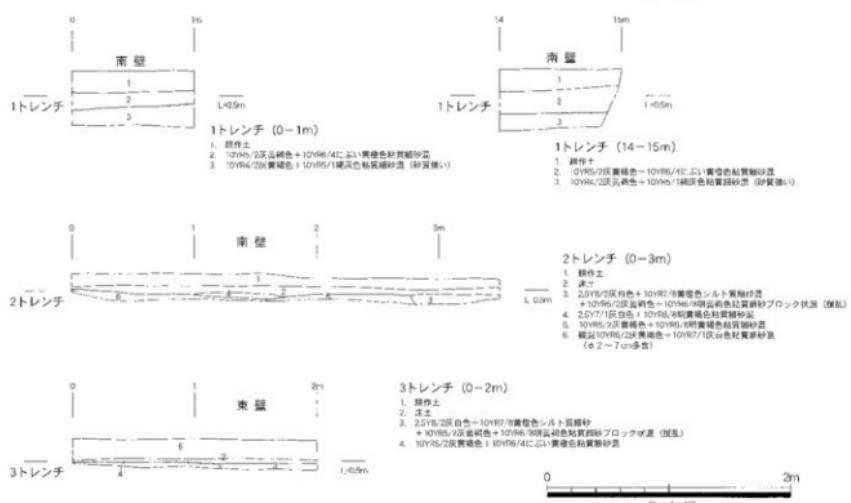
計画地西面には樹木が植栽されており、立ち入れないところから、極力西に寄せた位置で、南北軸に設定した。トレンチの大半がコンクリート塊やワイヤーが埋まっている搅乱を受けしており、旧状の確認は不可能であった。遺物、遺構共に認められなかった。



第2図 調査地位置図



第3図 トレンチ配置図



第4図 1~3トレンチ断面図

トレンチ名	延長	主な時代	主な遺構	出土遺物等
1 トレンチ	0.8m×7.6m	不明	無し	無し
2 トレンチ	0.8m×6.5m	不明	土坑状落ち	無し
3 トレンチ	0.8m×6.9m	不明	無し	無し

第1表 土器町西二丁目地区試掘調査 トレンチ概要

4.まとめ

以上、計画地内に3箇所のトレンチを設定し、調査を行った。2トレンチで土坑状の落ちを1箇所検出するが、遺構としての広がりは確認できない。2、3トレンチの状況から考えると、計画地内は大半が搅乱を受けており元の状況を留めていないことが強く予想される。

今回の調査によって、当該地は大きく搅乱を受けていることが判明した。搅乱土坑の認められない1トレンチの状況から見ても、この範囲には遺跡の所在が無いものと考えられる。仮に、遺跡が存在していたと仮定しても、削平等の影響を受けており、現在においては残存していないと考えられる。これらのことから、当該地において保護措置は不要と考えられる。

調査後、トレンチは埋め戻し原状に復した。



調査地全景:南東から



調査風景



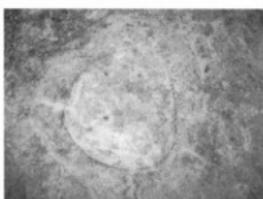
1トレンチ全景:東から



1トレンチ土層



2トレンチ全景:北東から



2トレンチ土坑状落ち検出状況



3トレンチ全景:北西から



十二社宮



十二社宮社叢遠景:南から

図版1 土器町西二丁目地区試掘調査

飯山町東坂元字楠見地区

第三章 飯山町東坂元字楠見地区試掘調査

調査対象地 飯山町東坂元字楠見 2062-1、2065-1、2066-1
 調査期間 平成20年6月25日～7月2日
 調査面積 約320.3m² (調査対象地面積4873m²)

1. 立地と環境

地名の楠見は昔楠の大樹があり、その樹の上から見渡せる付近一帯を統称したと云われている。

北に目を向ければ飯野山が見える。東側には大東川が流れる。周辺には弥生土器の出土が見られ、また、三ノ池古墳群、秋常古墳群、久保大塚と古墳時代の遺跡が点在することが古くから知られている。

近年の発掘により『東坂元三ノ池遺跡（古代～中世：集落跡）』、『東坂元北岡遺跡（弥生：集落跡）』、『東坂元秋常遺跡（弥生：集落跡）』の詳細が明らかにされた。

当該地は、現在の飯山町学校給食センターの南面及び東面に隣接する圃地である。周辺の遺跡は希薄で、歴史的環境はよくわかっていない。



第5図 調査位置図

2. 調査に至る経緯と調査の経過

丸亀市給食センター建設に伴い、埋蔵文化財の有無に関する調査の施行決定が行われた。平成20年6月2日立ち入り申請がなされ、6月25日から7月2日にかけて重機によるトレーナー調査が行われた。当初は、現給食センター西側の下川原楠見線の西側で駐車場舗装されている圃地も対象としていたが、新たな土木工事の計画が成されないことから今回の調査区域からは対象外とした。調査の結果遺構は幾つか検出されたが希薄なため今後の保護措置は不要である旨の回答を7月29日におこなった。

3. 調査の概要

調査は、現給食センターの南面及び東面に隣接する圃地を対象にして実施した。

登記簿上は、3筆であるが、内2筆がコンクリート畦畔によって細分されていることから、見た目での筆単位で調査区分けをし、調査区毎にトレーナー番号を設定した。以下、特徴的なトレーナーについて報告する。

【1区1トレーナー】

1区の圃地西端中央部で東西軸で長さ11.4mのトレーナーを設定した。耕作土の下層には、整地土層が重なっており、比較的新しい開墾によるものと考えられる。更に下層には、灰色系の遺物包含層が10cm前後の厚みで堆積する。遺物の包含量はかなり少ない。中央部で南北軸の小溝が2条並ぶが、遺物を包含しておらず詳細は不明である。その他の遺構は認められない。

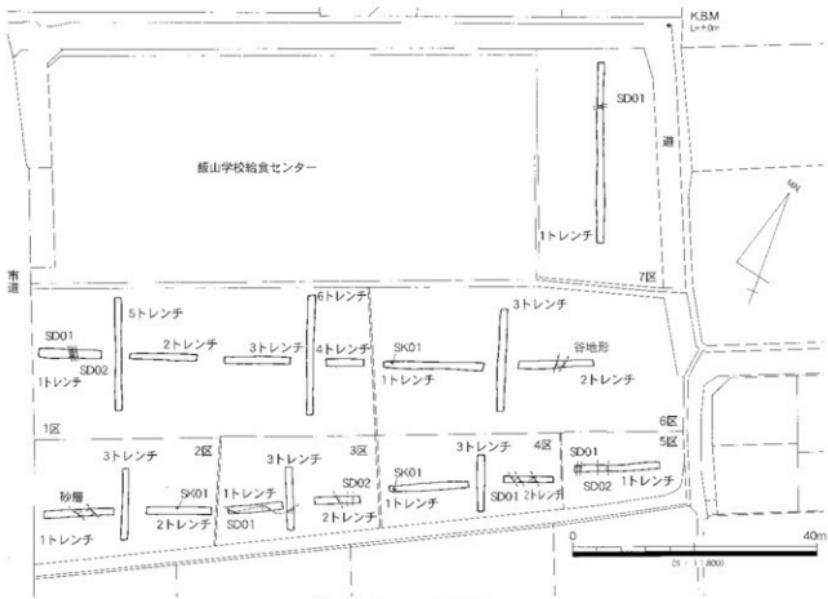
【1区5トレーナー】

1・2トレーナー間に南北軸で設定した。土層序は1トレーナーと同じであった。5層からやや小型の須恵器の坏底部が出土した。ヘラ切りによる底部調整が見られる。他に小片で実測には耐えられなかつたが、土師質土器の甕口縁片、小皿底部片、羽釜片も出土している。羽釜片は短く、口縁端部は短く直立する。



第6図 1区5トレーナー出土遺物実測図

1区の1～6トレンチの土層序は、ほぼ同様である。全体的に耕作土直下で20cm前後の厚みを持つ整地層が見られ、その下層に6～16cmの遺物包含層が堆積する。



第7図 トレンチ配置図

【12区 1トレンチ】

1区の南側に面する圃地で、西端中央部に東西軸で長さ11.4mのトレンチを設定した。土層序は1区同様である。トレンチ中央部で砂層が認められるが、平野形成時の堆積か旧河道氾濫による窪地への堆積と思われる。遺物、遺構共に認められない。

【12区 2トレンチ】

1トレンチの東側に東西軸で長さ10.5mのトレンチを設定した。土層序は1トレンチと同様であるが砂層は認められない。トレンチ中央で土坑状の落ちを1箇所確認するが、連続性が見られず詳細は不明である。

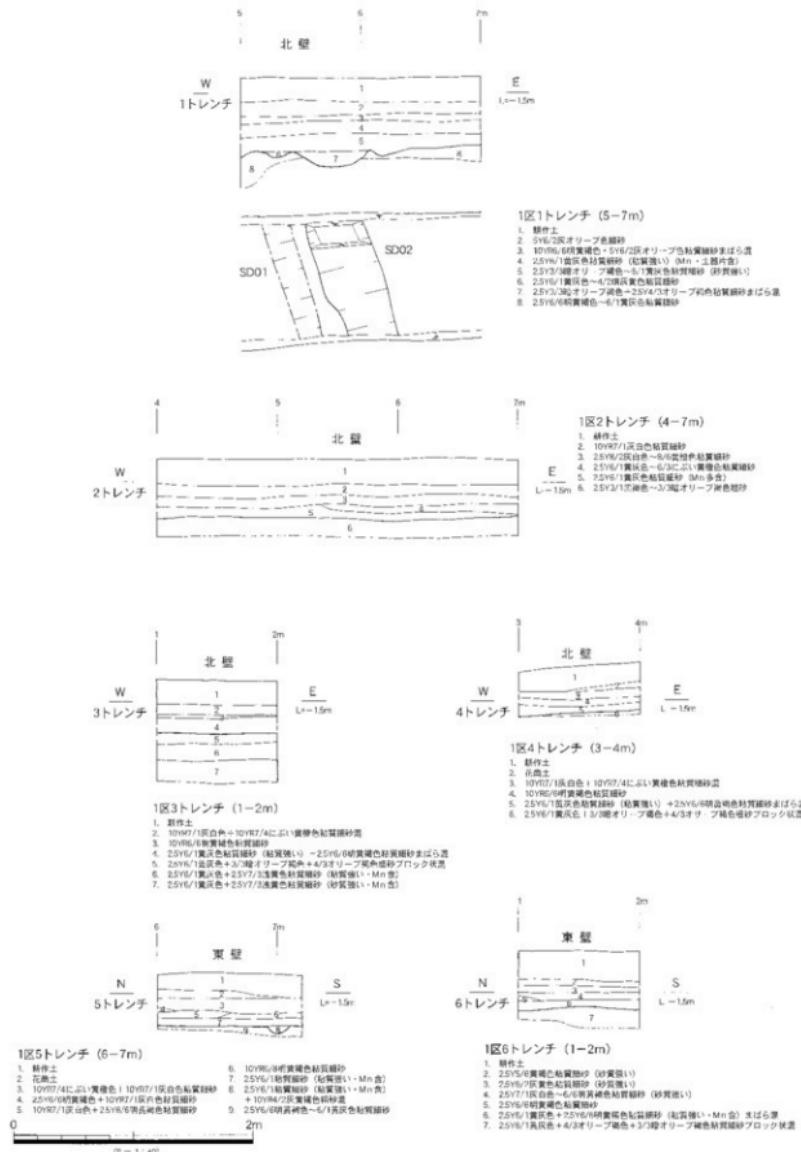
【13区 1トレンチ】

2区の東側の圃地で、西端中央部に東西軸で長さ8.9mのトレンチを設定した。

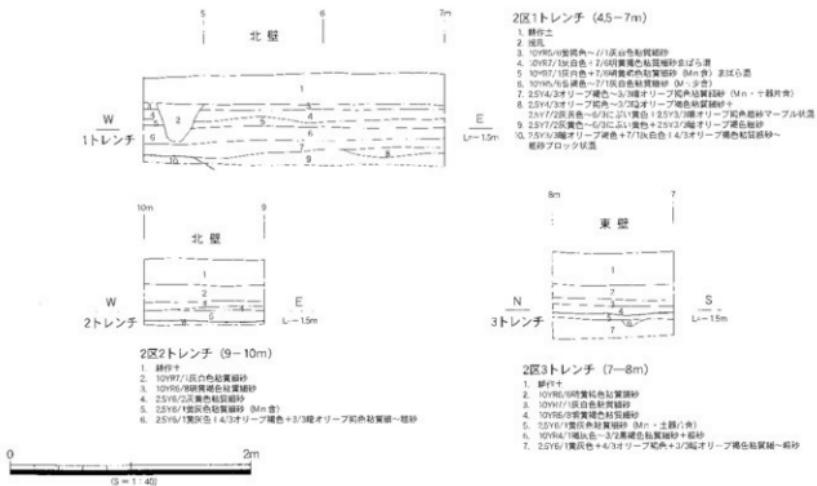
耕作土直下には1・2区と同様の整地層がある。更に下層には少量の遺物を包含する灰色系粘質細砂が堆積する。トレンチ南半部に黒色系粘質細砂の堆積が見られる。これは、東西軸の溝と思われる。肩口ラインは、やや曲線状である。溝の最上層よりサヌカイト石器2、3が出土した。2は自然面をもち両面調整が見られるが折損のため種別は不明である。3はスクレイバーである。側面に自然面を持ち背部には磨痕加工が、刃部には両面調整が見られる。

【13区 2トレンチ】

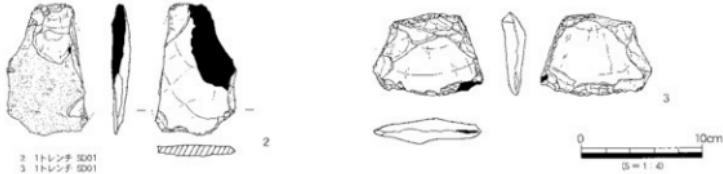
1トレンチの東側に東西軸で長さ7.4mのトレンチを設定した。土層序は1トレンチと同様である。トレンチ東半部で1トレンチの溝状遺構と同様な埋土を持つ溝状の落ちが認められる。但し、東の肩口は未検出である。軸方向が1トレンチのものとは合致しない。別溝である可能性もあるが、形状が北方に広がっているようであり終焉しているものと思われる。



第8図 1区1~6トレンチ平面・断面図



第9図 2区1~3トレンチ断面図



第10図 3区出土遺物実測図

【3区3トレンチ】

1・2トレンチの間に南北軸で長さ10.4mのトレンチを設定した。土層序は、1・2トレンチと同様である。

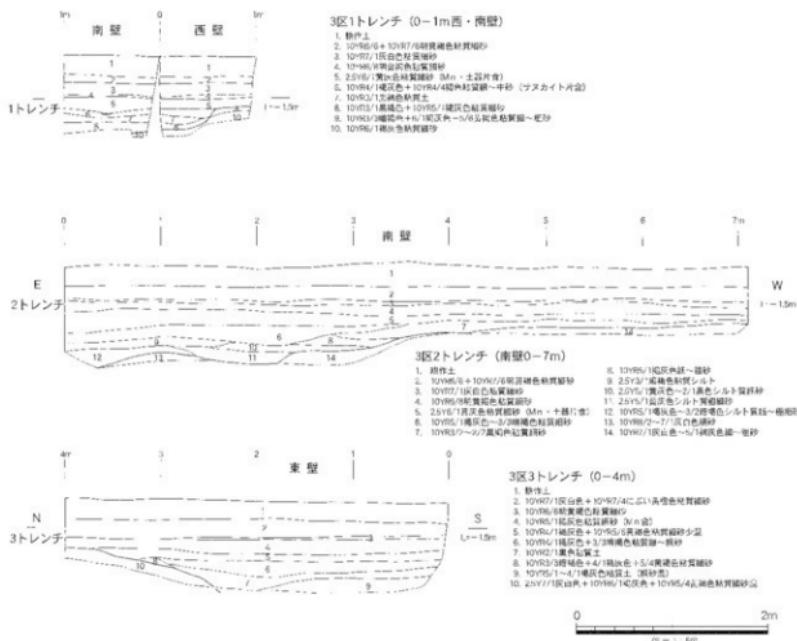
トレンチ南端部で1トレンチの溝状遺構に連続すると思われる落ちを検出した。南の肩口が検出できないことから規模は不明である。

【4区1トレンチ】

3区の東側の崖地で、西端中央部に東西軸で長さ12.9mのトレンチを設定した。土層序は、1・2・3区と同様である。トレンチ西端で土坑状の落ちを1箇所検出した。その他の遺構は無く詳細は不明である。

【4区2トレンチ】

1トレンチの東側に東西軸で長さ12.2mのトレンチを設定した。土層序は、1トレンチと同様である。トレンチ西半部で斜行する溝状の落ちを検出するが、遺物の包含も無く詳細については不明である。東に



第11図 3区1~3トレンチ断面図

地形の落ちと思われる傾斜変換が見られることから、その一部であることも考えられる。

【5区1トレンチ】

調査区東端に位置する圃地の中央部に東西軸で長さ14.0mのトレンチを設定した。土層序は、1~4区と同様である。トレンチ西半部で溝状の落ちを2箇所検出した。いずれも遺物は包含しない。2条共に南北軸で並行するが検出面に差異が見られるものと考えられる。

【6区1トレンチ】

1区東側に隣接する圃地で、西端中央部に東西軸で長さ11.2mのトレンチを設定した。土層序は1~5区と同様である。トレンチ西端部で土坑状の落ちを1箇所検出した。これまでの他の土坑とは埋土が明らかに違っており、確実な遺構であると思われるが、トレンチ内では連続する遺構も見られず詳細は不明である。遺物4、5は4層出土である。4は中世の土釜口縁部、5はサヌカイトの石包丁である。折損により全体像は不明であるが抉り状の調整が見られる。

【6区2トレンチ】

1トレンチの東側に東西軸で長さ12.2mのトレンチを設定した。土層序は1トレンチと同様であるが、トレンチ中央部付近で数箇所擾乱を受けている。擾乱箇所の下層でベース層が谷状に落ちているが、遺構ではなく地形によるものと思われる。

遺物6~9は地山層直上の5層より出土した。6は須恵器壺口縁片である。7はつまみの直径2.7cmを測る焼きの甘い坏蓋である。8は壺の底部であるが摩滅が著しく調整は不明である。これらは8~9C代のものであろうと思われる。9は最大長9.1cm、幅4.4cmを測るサヌカイトの石包丁である。抉りが見られるが片側が欠損しており一方は不明である。

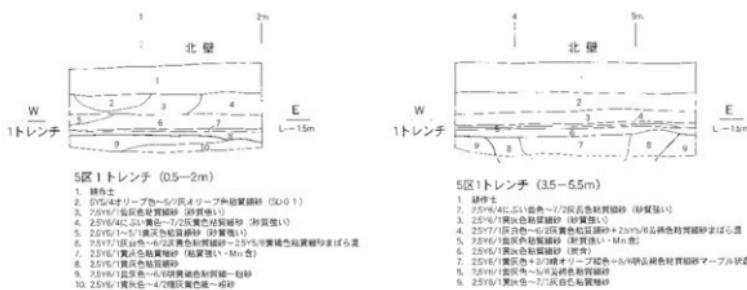


The figure is a geological cross-section diagram titled '北・豊' (Kita-Fuji). It shows a series of numbered layers from 1 to 21, representing different geological units. The vertical axis on the left indicates thickness in meters (m), ranging from 0 to 21m. The horizontal axis at the bottom indicates distance in meters (m), ranging from 0 to 20m. The layers are labeled as follows:

- W: 21m
- 1: 16m
- 2: 17m
- 3: 18m
- 4: 19m
- 5: 20m
- 6: 21m
- 7: 21m
- 8: 16m
- 9: 17m
- 10: 18m
- 11: 19m
- 12: 20m
- 13: 21m
- 14: 22m
- 15: 23m
- 16: 24m
- 17: 25m
- 18: 26m
- 19: 27m
- 20: 28m
- 21: 29m

Key features labeled include 'W' (West) and 'E' (East) at the top, and '0' and '20m' at the bottom. A scale bar indicates 1.5m.

第12図 4区1~3トレンチ断面図

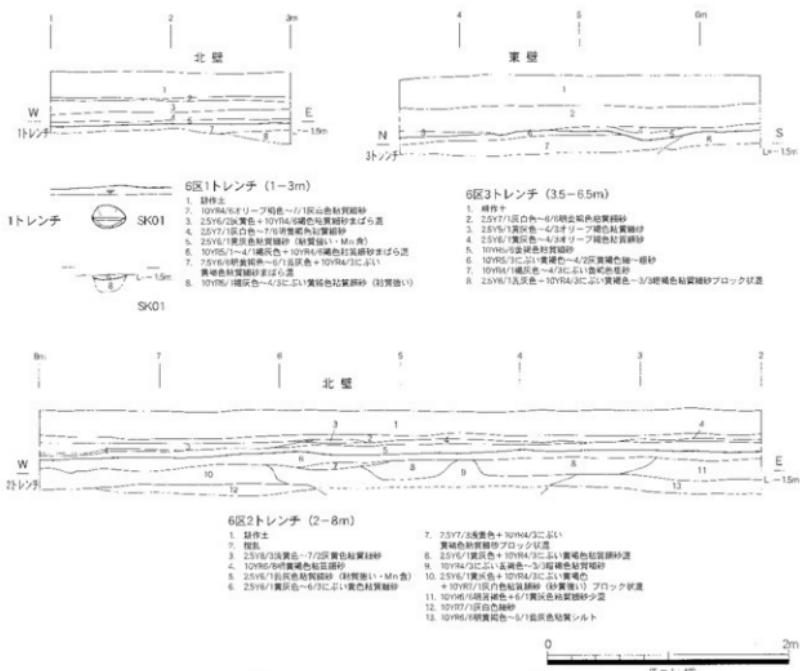


第13図 5区1トレント断面図

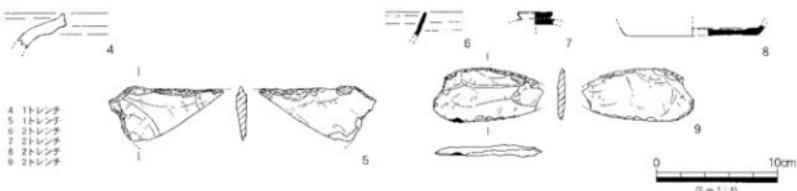
【7区1トレンチ】

調査区北端に位置する圃地の中央部に南北軸で長さ30.1mのトレンチを設定した。トレンチ北部で東西軸の溝状の落ちを1箇所検出。埋土から土師質の土器片が1点のみ出土したが、遺構の検出面が浅く、現代の掘削によるものである可能性が高い。その他の遺構は認められない。

遺物は、ほとんどが7層より出土した（遺物10～12）。南に下がると包含層は褐色が強くなり極細砂を



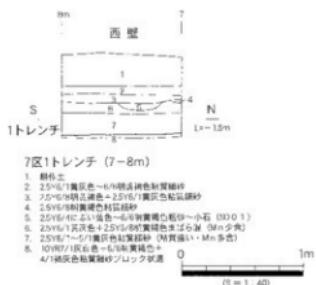
第14図 6区1～3トレンチ平面・断面図



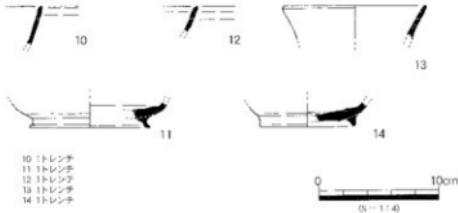
第15図 6区出土遺物実測図

含む層が下層に堆積し、少量の遺物を包含する（遺物13、14）。

遺物10、12は須恵器の片である。11は貼付け高台の底部である。外側に屈曲し踏ん張る端部を持つ。8C後半～末と考えられる。13は壺の口縁で、外側に直にのびる。14は直径約8.0cmを測る貼付け高台である。この層からは直径1.9cmの退化した宝珠つまみも出土している。



第16図 7区1トレンチ断面図



第17図 7区出土遺物実測図

区	トレンチ名	延長	主な時代	主な遺構	出土遺物等
1区	1トレンチ	1.4m×10.2m	不明	溝2条	土師質土器片
1区	2トレンチ	1.1m×10.8m	不明	無し	土師質土器片・土師器片・須恵器片
1区	3トレンチ	1.2m×10.7m	不明	無し	土師器片
1区	4トレンチ	1.2m×6.2m	不明	無し	無し
1区	5トレンチ	1.2m×18.7m	不明	無し	土師質土器片・須恵器片
1区	6トレンチ	1.2m×19.7m	不明	無し	土師器片
2区	1トレンチ	1.2m×11.4m	不明	無し	無し
2区	2トレンチ	1.2m×10.5m	不明	土坑1基	土師質土器片
2区	3トレンチ	1.0m×11.8m	不明	無し	土師質土器片・須恵器片
3区	1トレンチ	1.3m×8.9m	不明	溝1条	土師質土器片・須恵器片 磁器片・サヌカイト片、スクレイバー
3区	2トレンチ	1.3m×7.4m	不明	溝1条	土師質土器片・須恵器片・サヌカイト片
3区	3トレンチ	1.1m×10.4m	不明	溝1条	土師質土器片
4区	1トレンチ	1.2m×12.9m	不明	土坑1基	須恵器片
4区	2トレンチ	1.3m×12.2m	不明	溝1条	無し
4区	3トレンチ	1.3m×16.8m	不明	無し	土師質土器片
5区	1トレンチ	1.1m×14.0m	不明	溝2条	土師質土器片
6区	1トレンチ	1.3m×11.2m	不明	土坑1基	弥生土器片・土師質土器片・サヌカイト片、石包丁
6区	2トレンチ	1.3m×12.2m	不明	無し	土師質土器片・須恵器片・サヌカイト片、石包丁
6区	3トレンチ	1.3m×16.9m	不明	無し	弥生土器片・土師質土器片・須恵器片・鉄製品片
7区	1トレンチ	1.2m×30.1m	不明	溝1条	土師質土器片・須恵器片

第2表 飯山町東坂元字楠見地区試掘調査 トレンチ概要

4. まとめ

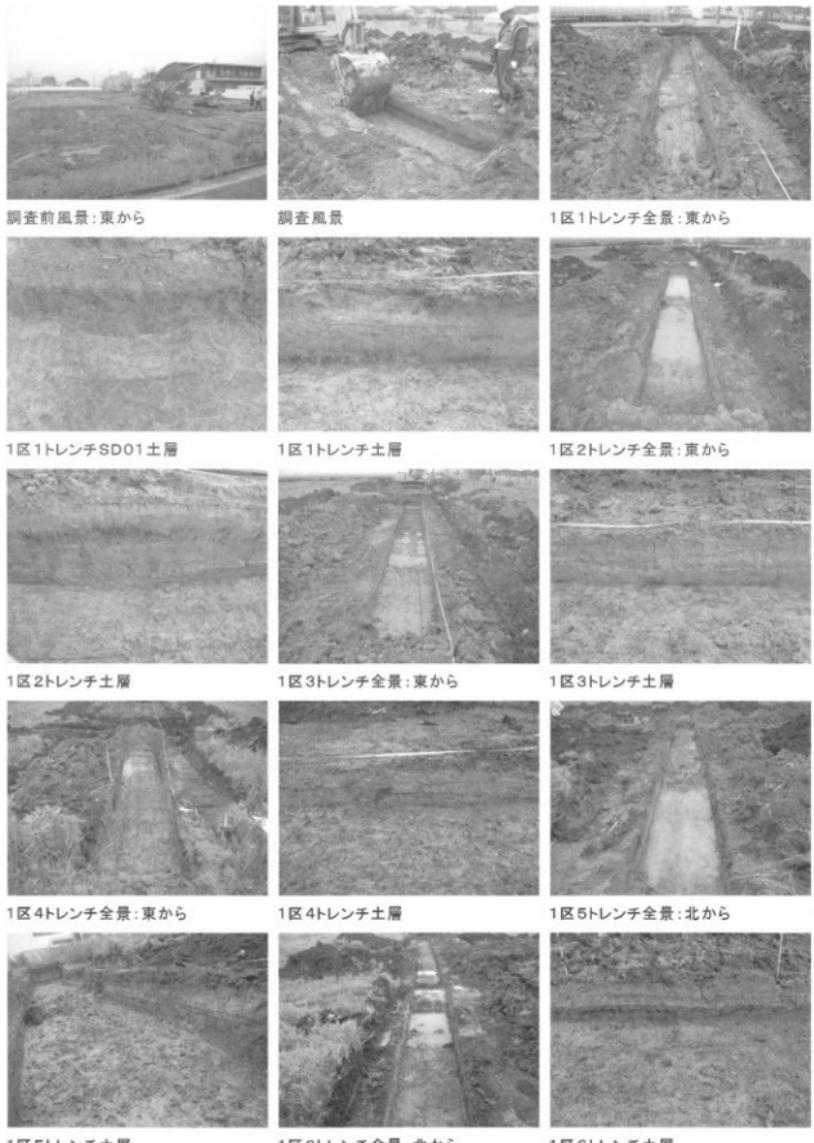
今回の調査で、計画地内で遺構状の落ちを数箇所検出した。また、ベース上には少量ではあるが遺物を包含する層が全域で見られる。包含層内の遺物は様々な時代のものが混在しており、対応する遺構も見られないことから古代～中世以降の土地改変を受け、ほとんどの遺構が既に消失していることも十分考えられる。

唯一、計画地南端部で黒色の埋土を持つ落ちを検出した。溝であることが予想されるが、全体像が掴めない事から地形の大きな窪地である可能性も否定できない。

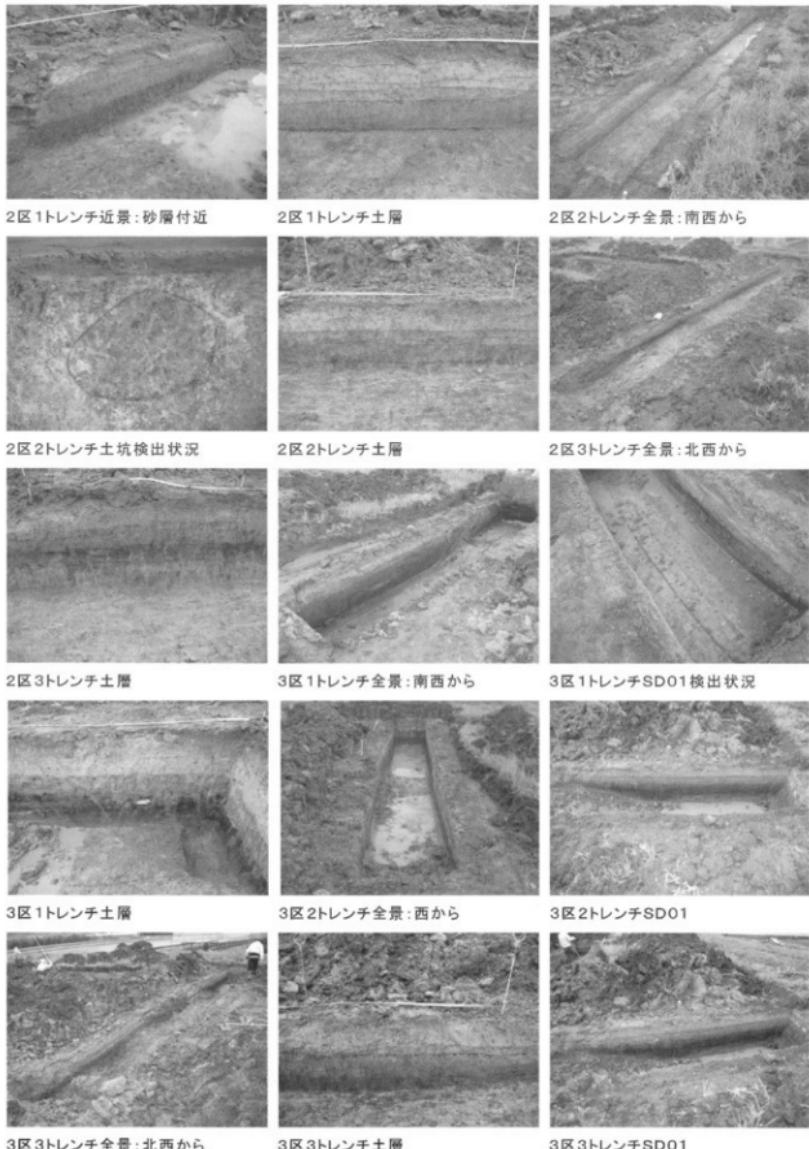
今回の調査で、計画地内に比較的密に試掘トレーニングを設定し調査を実施したが、確実な遺構を検出するには至らなかった。計画地の面積を考えても、包含層が存在する割には対応する遺構の展開が見られないことから、当該地を遺跡として扱うことは難しいと思われる。

計画地から東方には、微高地が南北に延びており、かなり安定していることから、遺跡は微高地上に展開しており、今回の計画地付近の低地には流れ込みによる遺物が堆積していると考えた方がいいかも知れない。

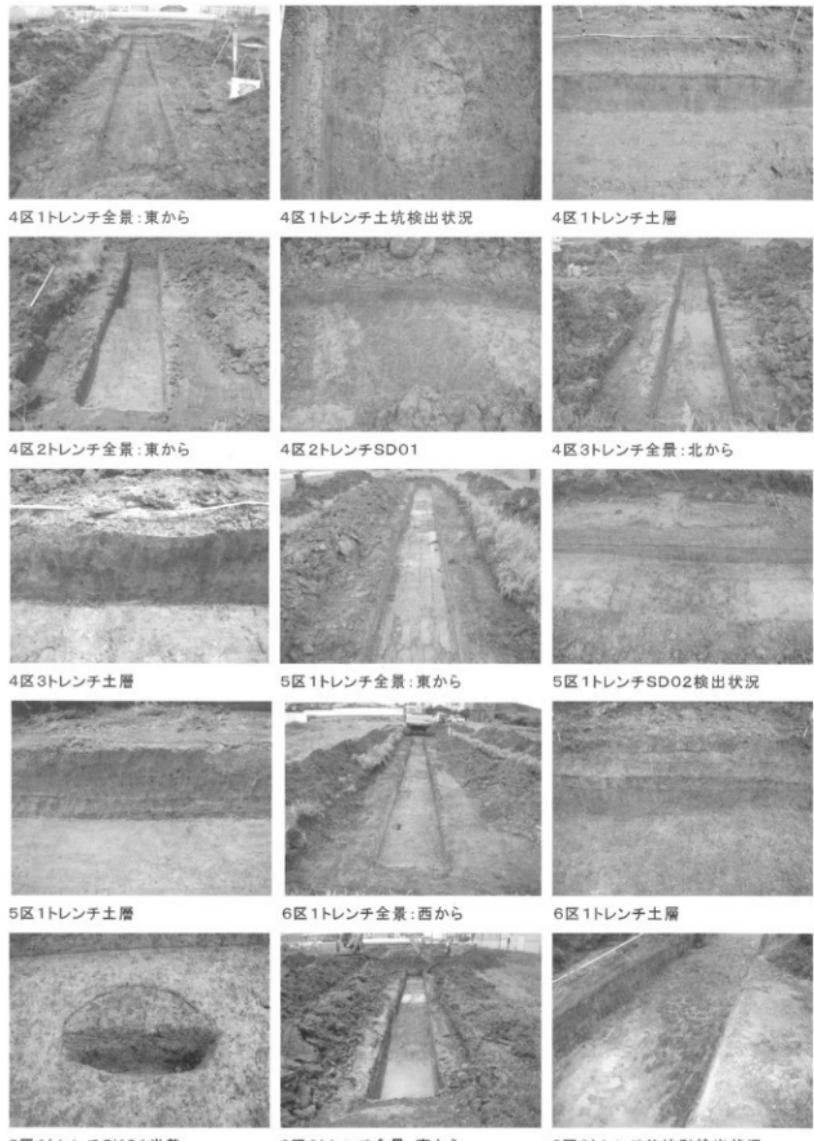
いざれにしても、当該地においては全体的に遺物を包含する層は見られるものの、明確な遺構も認められないことから今後の保護措置は不要であると考えられる。



図版2 飯山町東坂元字楠見地区試掘調査(1)



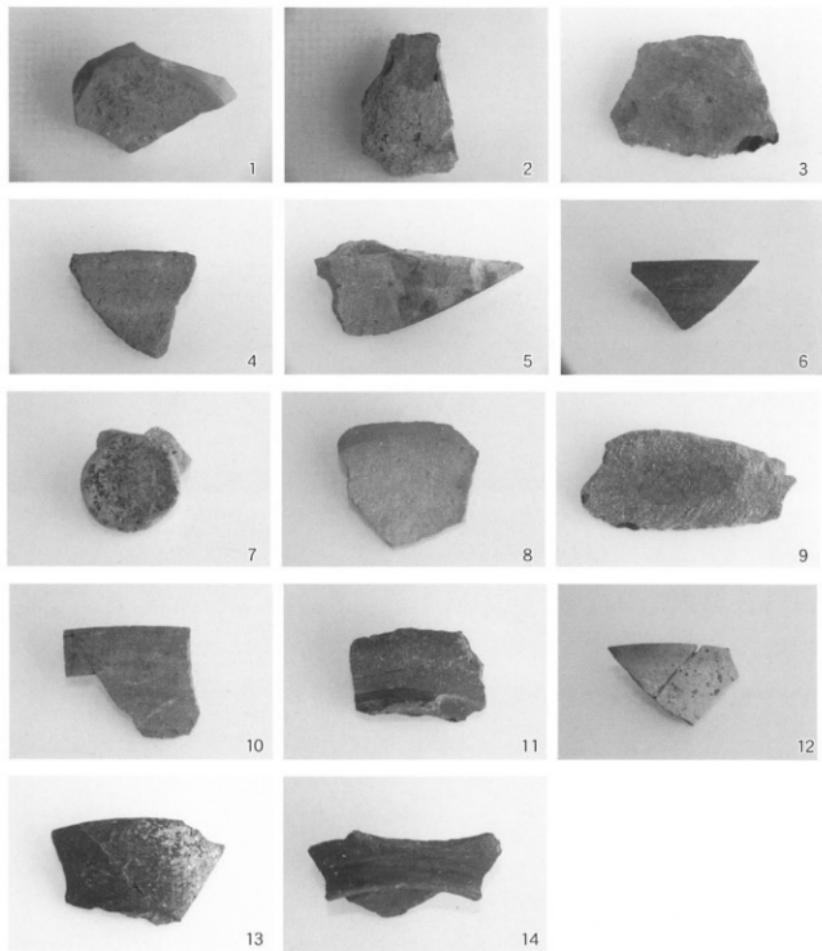
図版3 飯山町東坂元字楠見地区試掘調査(2)



図版4 飯山町東坂元字楠見地区試掘調査(3)



図版5 飯山町東坂元字楠見地区試掘調査(4)



図版6 飯山町東坂元字楠見地区試掘調査(5)

津森町字高丸地区

第IV章 津森町字高丸地区試掘調査

調査対象地 丸亀市津森町字高丸 1 1 3 4 - 1
 調査期間 平成 20 年 7 月 1 5 日 ~ 7 月 1 6 日
 調査面積 約 7 7 m² (調査対象面積 7 4 7 m²)

1. 立地と環境

計画地は、県道多度津・丸亀幹線沿いに位置する。計画地と金倉川に挟まれた地域には、『中の池遺跡（弥生：集落跡）』『道下遺跡（弥生～近世：包含地）』『新田橋本遺跡（弥生・古墳：集落跡）』『今津中原遺跡（古代～中世：集落跡）』などの集落遺跡が広い範囲に分布している。また、東方においても『津森位遺跡（弥生・古代：集落跡）』が接近している。

当該地は『今津中原遺跡』II区の南に隣接している。弥生時代後期の灌漑水路や条里方向に合致する中世後半～近世前半頃まで機能していたと考えられる溝が報告されおり、それに続く遺構があるものと考えられる。

2. 調査に至る経緯と調査の経過

事業者より平成 20 年 6 月 1 7 日、店舗併用住宅の建設計画に伴い『埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて』の照会文書が提出された。周辺地は県道建設の調査に伴い弥生時代から中世にかけて、比較的安定した集落として土地利用がなされてきた地域であることが知られている。

当該地においても関連する遺跡の分布が予想されることから、試掘調査を実施することとした。7 月 8 日付で立ち入り申請及び事前踏査を行い、7 月 1 5 日から調査を実施した。9 月 1 8 日に調査結果を県と協議し、10 月 2 0 日保護措置は不要である旨の回答を行った。

3. 調査の概要

計画地は形状が南北に長く不定形である。検討した結果、6 本の試掘トレーンチを設定して調査を行うこととした。以下、トレーンチ毎に概要を報告する。

【1 トレーンチ】

対象地北端に東西軸で設定した。トレーンチ中央やや東寄りで浅い溝状落ちを検出した。主軸方向 N - 2 0 ° - E、幅 1 m 深さ 1 8 cm を測る。トレーンチの東、西端は搅乱を受けている。そこから遺物 1 ～ 7 が出土している。1 は須恵器窓の頭部である。叩きが残る。2 は短い立ち上がりを持つ土釜である。3 は 1 7 C 後半の陶器碗である。蛇の日釉剥ぎが見られる。4 ～ 7 は 1 8 C 代の磁器と思われる。4 は見込みに二重丸を持つ梅花文が施されている。5 は広東碗である。6 は高台端部に砂が付着し、重ね焼きの跡が内面に残る。8 は 3 層から出土した陶器の碗である。

【2 トレーンチ】

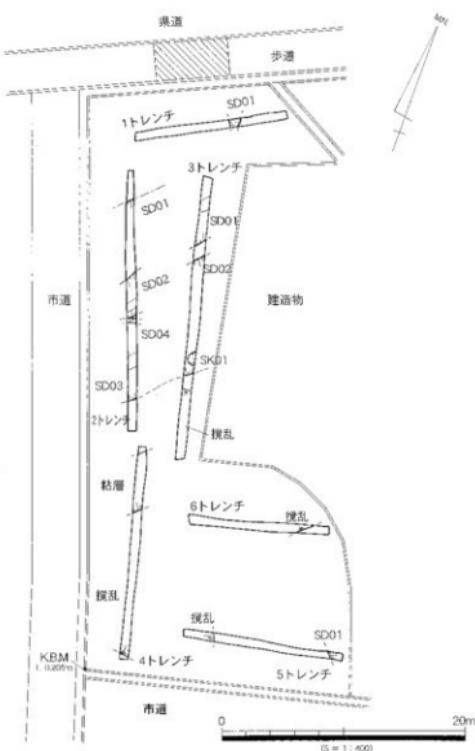
トレーンチ南西から北東軸の大きい溝状落ちを 2 条、東西軸の小溝を 1 条検出した。これらの溝は微量に遺物を包含するが、状況から旧河道か谷部分への堆積によるものと考えられる。

S D O 1 の南半分の下層部からは遺物 9 ～ 1 3 が出土した。9 は土釜である。口縁内部にハケ目、鋤下部を指すサエで調整する。口縁は外に開き立ち上がって終わる。1 0 は土鍋の口縁部である。内外にハケ目調



第18図 調査地位置図

整されススが付着する。1 1は土師質土器の坏か碗である。摩滅が著しく詳細は不明である。1 2は土師質土器の坏の底部。底部径約6.2cmのヘラ切りである。1 3はヘラ切りの後、貼付け高台を持つ。端部は短く内傾して終わる。SD 0 3の底には灰色の粘土層が堆積し1 1層からは木片と須恵器、土師質土器片が出土した。その他明確な遺構は認められない。出土木片は、分析の結果、7C末~8C頃のヤナギ科ヤナギ属であることが報告された。(28ページ参照)



第19図 トレンチ配置図

【3 トレンチ】

2トレンチの東側に南北軸で設定。2トレンチで検出した溝状落ちの方向を確認するためのトレンチであるので上面検出で止める。延長線上に溝状落ちが認められた。

また、土坑状落ちが1基検出されるが、詳細は不明である。その他の遺構は認められなかった。また、トレンチ南端部付近は搅乱を受けしており、旧状を留めていない。

【4 トレンチ】

全体が掘削による搅乱を受けている。トレンチ北端部付近で搅乱層の下で粘土層が見られた。

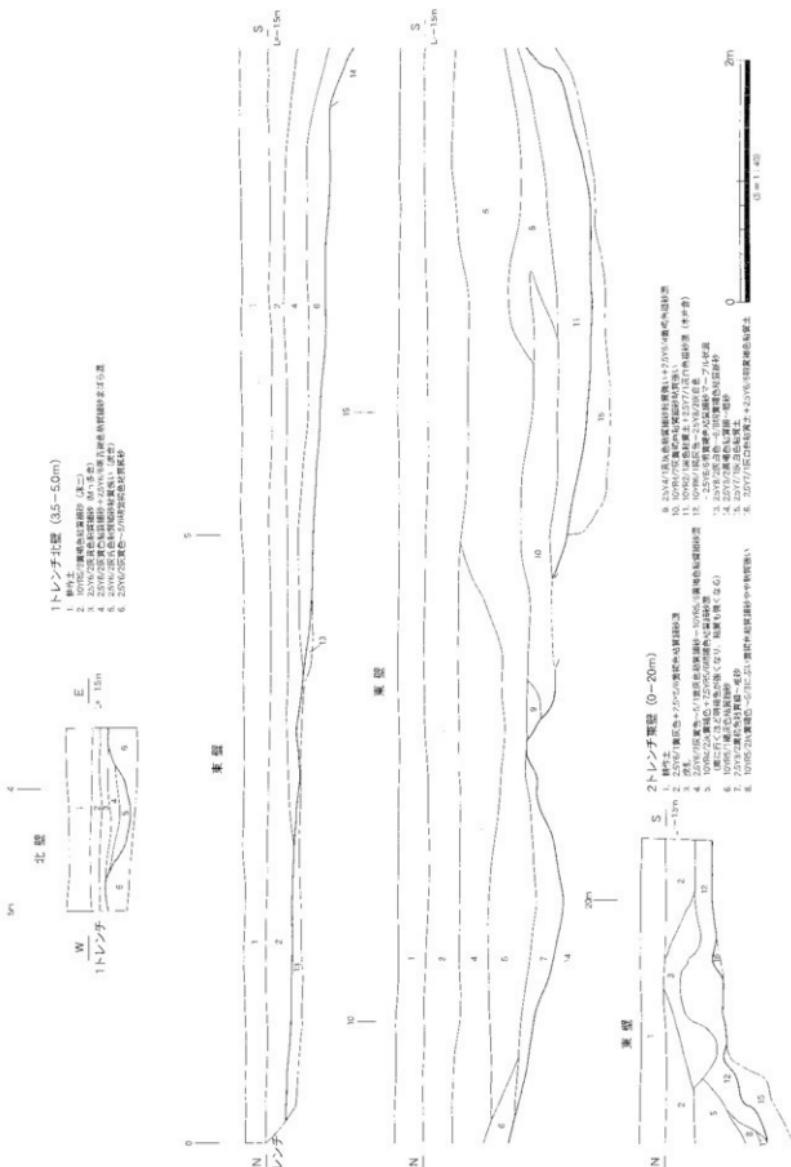
【5 トレンチ】

西端部付近で搅乱層が認められた。東端部では東に落ちる地形を検出した。溝と思われるが、東肩部分が用地内で検出されないことから詳細は不明である。

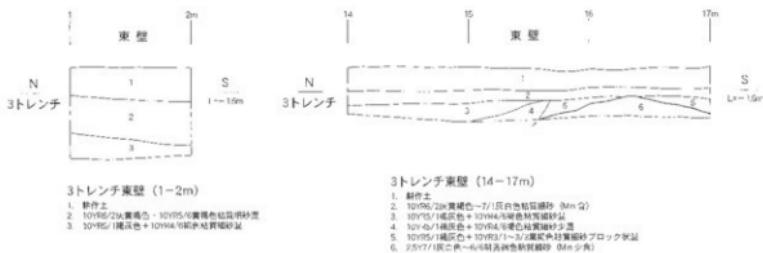
【6 トレンチ】

トレンチの大半が搅乱を受けており、遺構を確認することはできなかった。

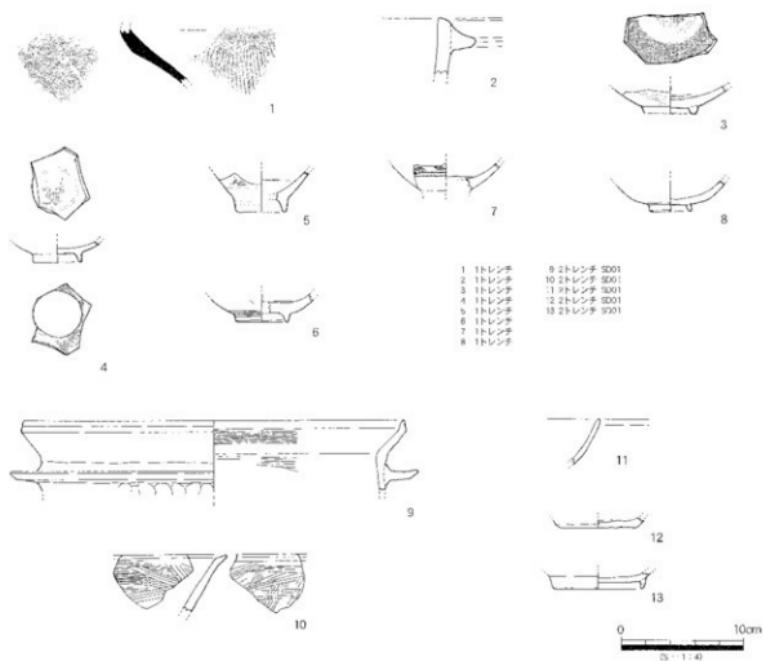
対象地のほぼ中央に南北軸の谷地形が走っていることが確認できた。溝である可能性もあるが、観察した状況によると縁辺に住居等のあった可能性は低い。周辺の状況と併せて考えてみると、以前粘土の採掘が行われていた可能性が高い。



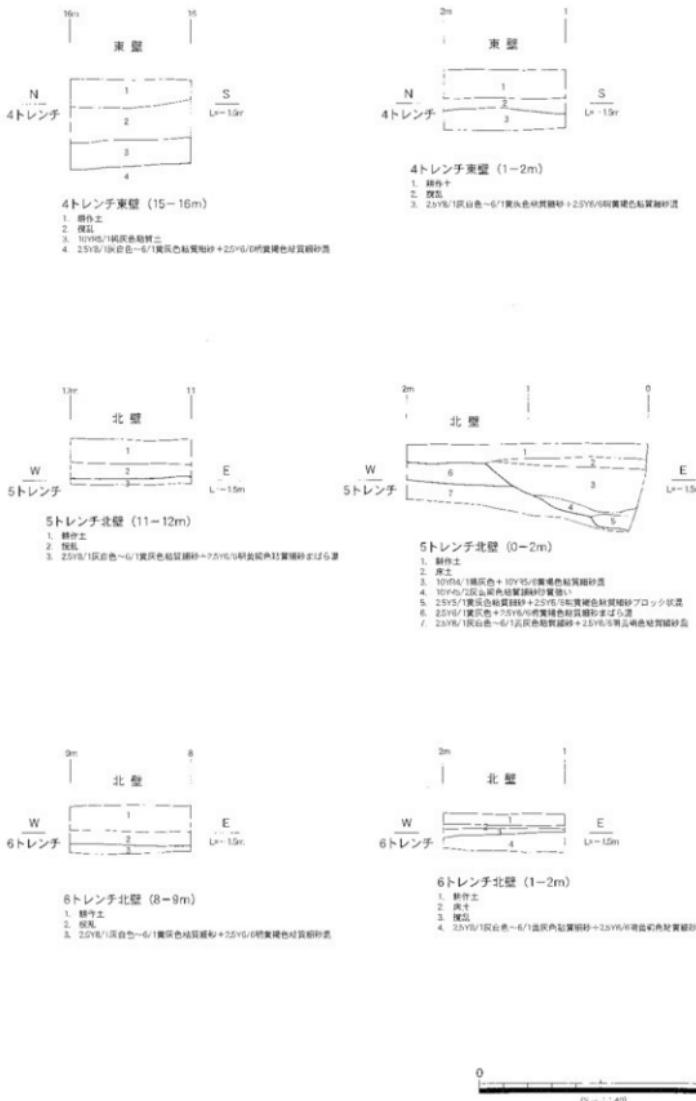
第20図 1・2トレンチ断面図



第21図 3トレンチ断面図



第22図 出土遺物実測図



第23図 4~6トレンチ断面図

4.まとめ

今回の調査で、対象地内で溝状落ちの集合部分を検出した。しかし、埋土や遺物の状況などから旧河道か谷地形への流入水によるものと考えられる。遺物の密度も非常に薄いことから、この落ち地形の縁辺には遺跡の展開が考え難い。

対象地の南半部のほとんどが掘削による搅乱をうけていることや、これまでに粘土採掘等による改変が行われてきたことが予想されることから、本来、遺跡の展開していたことを完全に否定できるものではないが、現状においては遺跡として認められる状況は確認できない。よって、今後の保護措置は不要であると考えられる。

調査後、トレンチは埋め戻し原状に復した。

トレンチ名	延長	主な時代	主な遺構	出土遺物等
1トレンチ	0.7m×12.6m	不明	溝1条	無し
2トレンチ	0.8m×21.5m	不明	溝3条	土師質土器片 須恵器片 木片
3トレンチ	0.9m×23.5m	不明	溝2条 士坑1基	無し
4トレンチ	0.7m×17.8m	不明	無し	無し
5トレンチ	0.7m×13.2m	不明	溝1条	無し
6トレンチ	0.7m×11.5m	不明	無し	無し

第3表 津森町字高丸地区試掘調査 トレンチ概要

5. 出土木製品分析結果

株吉田生物研究所

放射性炭素年代測定

◎ はじめに

丸亀市津森町字高丸地区より検出された用途不明品 1 点について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

◎ 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表 1 のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（コンパクト AMS : NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

表 1 測定試料及び処理

No.	試料データ	前処理
1	試料の種類：木材 試料の性状：不明 状態：wet 備考：用途不明品(大)	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:0.5N, 塩酸:1.2N) サルフィックス

◎ 結果

表 2 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、 ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲を示す。暦年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2% であることを示すものである。

なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

暦年較正

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.0 (較正曲線データ : INTCAL04) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

表2 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

No.	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正年代 (yrBP±1σ)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	1 σ 暦年代範囲		2 σ 暦年代範囲
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲	
1	-28.67±0.28	1238±22	1240±20	693AD(41.2%)748AD 765AD(14.3%)782AD 790AD(12.7%)810AD	688AD(44.8%)754A D 760AD(50.6%)870A D	688AD(44.8%)754A D 760AD(50.6%)870A D

◎ 考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それより確かな年代値の範囲が示された。

樹種調査 結果

○ 試料

試料は丸亀市市内遺跡津森町字高丸地区から出土した用途不明品1点である。

○ 観察方法

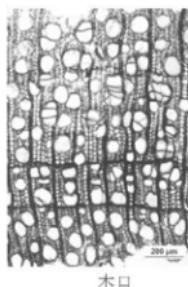
削刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

○ 結果

樹種同定結果（広葉樹1種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) ヤナギ科ヤナギ属 (*Salix* sp.) (遺物 No.1) (写真 No.1)

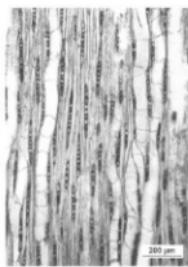
散孔材である。木口では中庸ないしやや小さい道管（～110 μm ）が単独または2～4個放射方向ないし斜線方向に複合して分布する。軸方向柔組織は年輪界で顯著。柾目では道管は單穿孔と交互壁孔を有する。放射組織は直立と平伏細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔はやや大きく、節状になっている。板目では放射組織はすべて単列、高さ～450 μm であった。ヤナギ属はバッコヤナギ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。



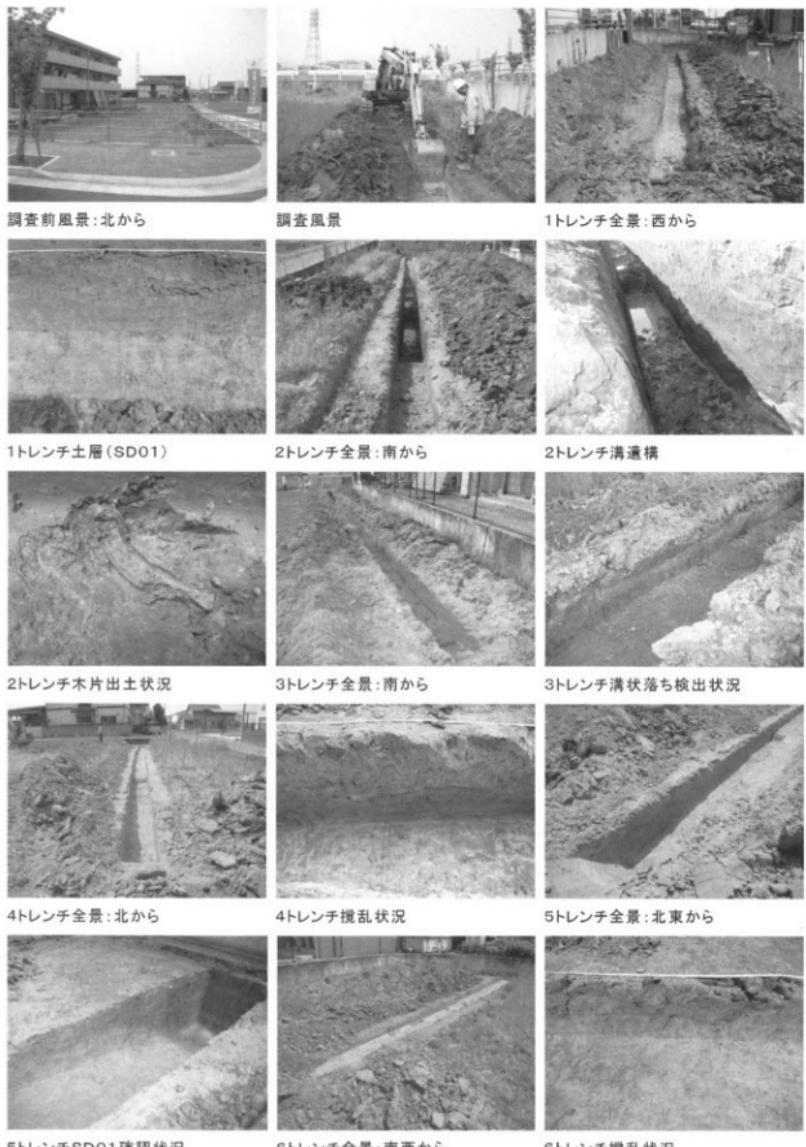
木口



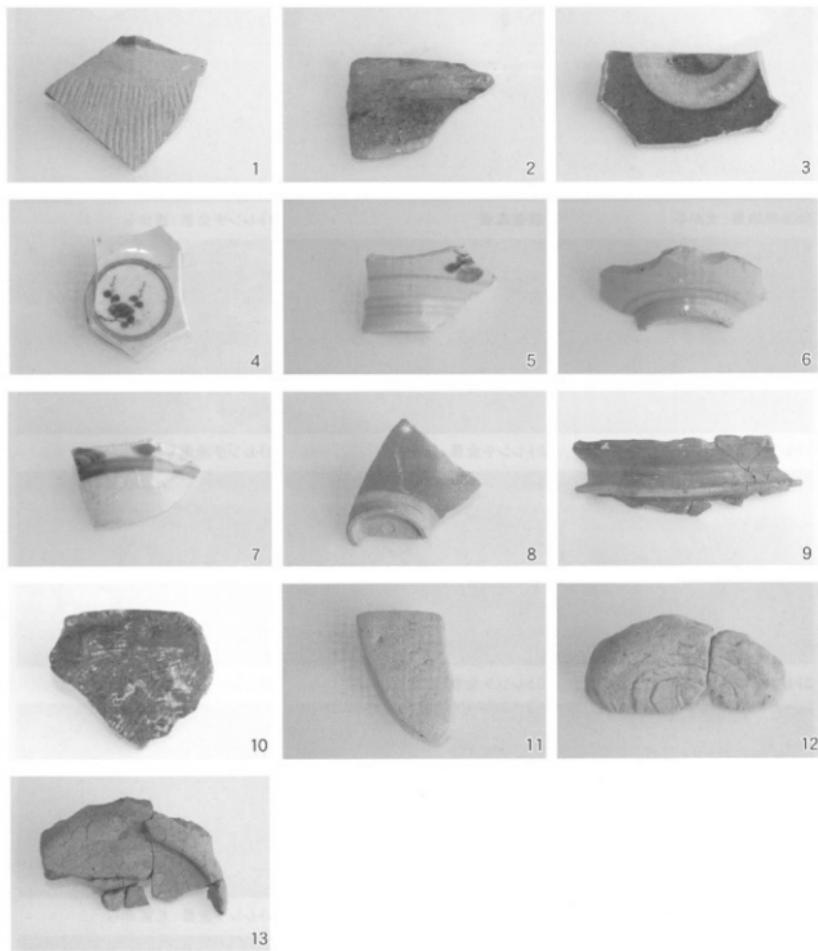
柾目



板目



図版7 津森町字高丸地区試掘調査(1)



図版8 津森町字高丸地区試掘調査(2)

綾歌町岡田西字新田地区

第V章 綾歌町岡田西字新田地区試掘調査

調査対象地 綾歌町岡田西字新田 1 1 - 1
 調査期間 平成 20 年 8 月 6 日～ 8 月 7 日
 調査面積 約 6.3 m² (調査対象面積 9.5 9 m²)

1. 立地と環境

計画地は、丸亀平野の南部にある岡田台地の北端付近に位置する。計画地の東側の大窪池内には『大窪池遺跡(旧石器: 包含地)』が所在し、その下流域には『東原遺跡(弥生～中世: 集落跡)』が所在する。また、計画地の西側には、『上川井遺跡(古墳～中世: 集落跡)』が所在している。更に、計画地から南西部一帯にかけて『岡田万塚(古墳: 古墳)』が知られており、現在においても数基の古墳が所在している。

2. 調査に至る経緯と調査の経過

個人住宅建設に伴い、平成 20 年 7 月 18 日に埋蔵文化財の所在の有無に関する照会文書が提出された。該当地周辺は様々な時代の遺跡が集中している地域であり、計画地においても何らかの関連する遺構の展開が考えられることから事前の分布確認調査を実施することとした。

8 月 6 日より重機掘削によるトレンチ調査を行った。

10 月 23 日、県と試掘調査の詳細報告及び今後の取り扱いの協議を行い、遺構は確認できるがほとんど破壊されていることが確認できることにより今後の保護措置は不要であることを事業者に回答した。

3. 調査の概要

調査対象地は、大窪池と溜池にはさまれた不定形の田畠である。ほぼ中央に十字トレンチを設定後、遺構確認のために 3・4 トレンチを設定した。以下、トレンチ毎に概要を報告する。

【1 トレンチ】

耕作土の下層には、近年の整地による盛土が成されており、その厚さは 50 cm を測る。更に、その下層には薄く整地層が見られる。トレンチ東端付近で土坑状の落ちを 2 虢所検出した。SK 01 からは、土師質土器片が出土、SK 02 からは遺物 1、須恵器坏蓋などが出土した。口径約 13.6 cm、高さ 3.8 cm を測る。6 C 中～後期と考えられる。



第24図 調査地位置図



第25図 出土遺物実測図

【2トレンチ】

南北軸で設定した。土層序は、1トレンチ同様であるが遺構、遺物共に認められない。

【3トレンチ】

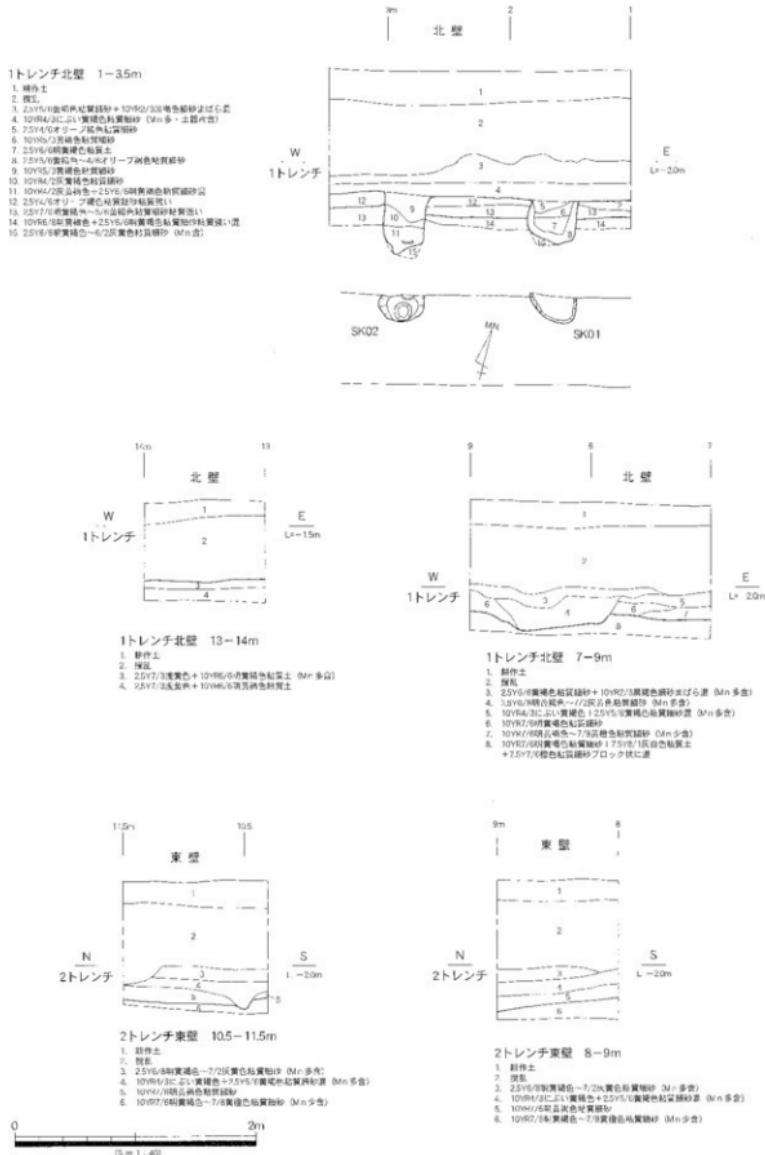
1トレンチで検出した土坑付近の確認するために、1トレンチの南側に東西軸で設定した。ほとんどが搅乱を受けており、遺構の確認はできない。搅乱土中で須恵器片を数点採取した。

【4トレンチ】

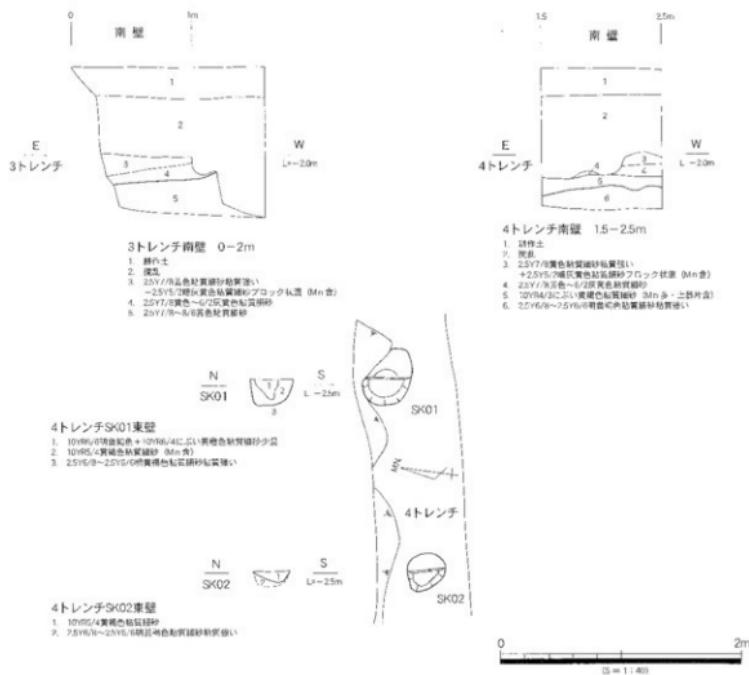
同じく確認のために、1トレンチの北側に東西軸で設定した。1トレンチの土坑と対応するかのように2基の土坑状の落ちを検出した。埋土には土師質土器片が含まれる。トレンチ北端から北側には搅乱が見られる。



第26図 トレンチ配置図



第27図 1・2トレーニチ平面・断面図



第28図 3・4トレンチ平面・断面図

トレンチ名	延長	主な時代	主な遺構	出土遺物等
1トレンチ	1.4m×15.9m	不明	土坑2基	土師質土器片、須恵器片
2トレンチ	1.5m×18.7m	不明	無し	無し
3トレンチ	1.3m×4.7m	不明	無し	須恵器片
4トレンチ	1.3m×4.9m	不明	土坑2基	土師質土器片

第4表 綾歌町岡田西字新田地区試掘調査 トレンチ概要

4.まとめ

今回の調査で、計画地内には土器片を包含する土坑状の落ちは数箇所で見られるが連続性が見られず、詳細を掴むことはできなかった。後世の改変を相当受けていることも明らかであり、現状から以前の状況を掴み取れるだけの資料は残存していないものと考えられる。これらのことから検討すると、遺構の分布は見られるものの非常に希薄であることから今回の調査記録をすることで今後の保護措置は不要であるとの結論に至った。



調査区全景: 西から



調査風景



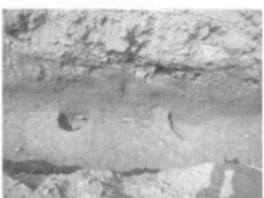
1トレンチ全景: 東から



1トレンチSK01完掘状況



1トレンチSK02完掘状況



1トレンチ土層



2トレンチ全景: 南から



2トレンチ土層



3トレンチ全景: 東から



3トレンチ土層



4トレンチ全景: 東から



4トレンチ土層



1

図版9 綾歌町岡田西字新田地区試掘調査

綾歌町栗熊西字大妻田地区

第VI章 綾歌町栗熊西字大妻田地区試掘調査

調査対象地 綾歌町栗熊西字大妻田 1686-3
 調査期間 平成20年9月16日
 調査面積 約24m² (調査対象面積320m²)

1. 立地と環境

計画地は、丸亀市の南東部に位置し、西側には東大東川が流れる。北には『佐古川遺跡(縄文～中世：集落跡)』が存在し、東には『石塚山古墳群(弥生～古墳：墳墓)』が所在するなど弥生時代から古墳時代にかけて特に栄えていた地域であることが分かっている。

また、横山系の南に延びた丘陵の先端部には、古くから存在を知られている『快天山古墳(古墳：古墳)』が築かれており、付近に強大な勢力が存在していたことを示している。

これらのことからも、当該地付近は弥生時代から古墳時代にかけての拠点地域として栄えていたことが考えられる。

2. 調査に至る経緯と調査の経過

個人住宅建設に伴い、事業者より7月23日付けで埋蔵文化財の有無に関する照会が提出された。当該地は『行末遺跡』『行末西遺跡』に関連する遺跡の分布が予想されることから、確認調査を実施することとした。

8月4日に事前踏査を行い、調査は9月16日を行った。調査後、トレンチは埋め戻し原状に復した。結果遺構の分布は見られるものの非常に希薄であることから今回の調査記録をすることで今後の保護措置は不要であると考えられる旨を、11月21日に事業者に回答を行った。

3. 調査の概要

対象地内に3箇所のトレンチを設定して調査を行った。以下、トレンチ毎に概要を報告する。

【1トレンチ】

トレンチと並行する2条の溝を検出する。規模は、幅25cm、深さ5cmで鉢溝であると思われる。時代については遺物を含んでおらず、不明であるが、付近の遺跡のデータから中世以降である可能性が高い。

土層序は、上層が黄褐色系の粘質細砂で弥生土器片や須恵器片を包含することから古墳時代以降の整地土であると考えられる。その下層には灰褐色系の粘質細砂～粗砂の堆積が見られる。この層でも弥生土器の包含が見られる。微量であるが須恵器片も含まれることから古墳時代以降の堆積であると考えられる。

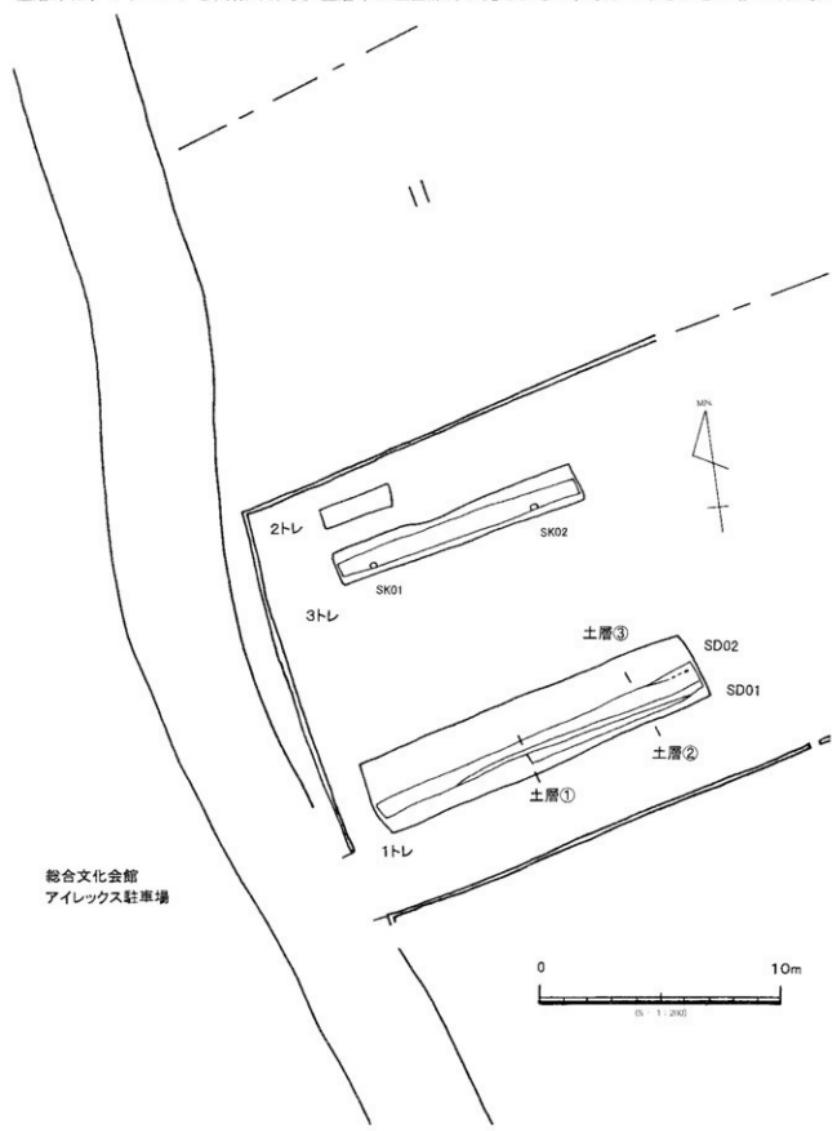
遺物1は弥生土器の鉢の口縁である。2は須恵器壺の口縁と思われるが不明である。波状文の調整が施され、内外に自然釉が付着する。3、4は弥生土器の壺である。3は弥生中期の複合口縁片で刺突文による鋸歯文が施されている。5～7は弥生土器の鉢である。8～9は弥生土器の壺である。8は壺の頸部は短く立ち上がる。10は高杯の脚部で厚みは薄く外に広がり後期の所産と考えられる。11～12は甕である。12は底部に叩き後ハケ目調整が見られる。13、14は底部である。13はやや丸底を呈するが14は平底である。



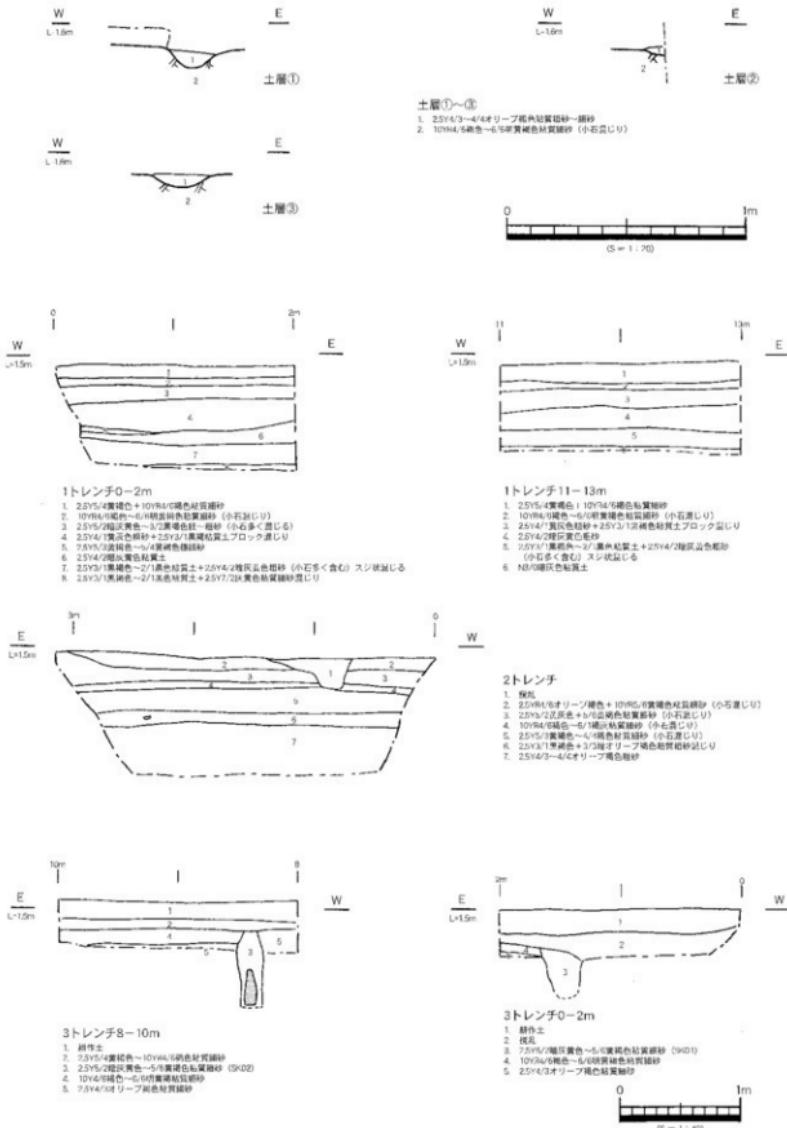
第29図 調査地位位置図

【2トレンチ】

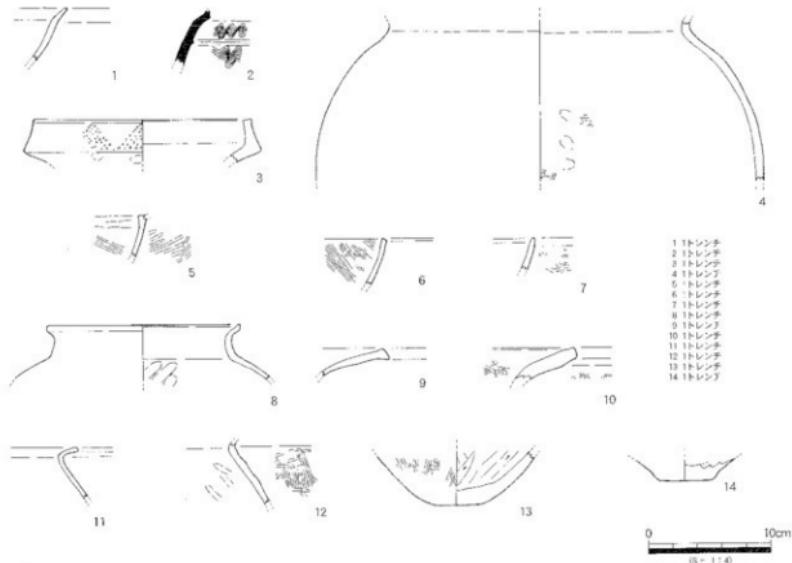
土層序は、1トレンチと同様である。土層中に土器細片が見られるが、取り上げるほどのものではない。



第30図 トレンチ配置図



第31図 1~3トレンチ断面図



第32図 出土遺物実測図

【3トレンチ】

深く掘り下げるとはせず、1トレンチで検出した溝と関連するものの有無を確認する。東西両端付近で土坑状の落ち（SK01・SK02）を検出した。埋土は1トレンチの溝よりはやや暗く、時期差のあることが考えられる。また、SK02からは柱根と考えられる木材が出土した。長さ33cm、直径1.2・3cmを測り、下面の先端部を加工していることから自然木ではないことが分かる。分析を行った結果、マツ科マツ属の木材であり、19C代の年代が報告された。（42ページ参照）

トレンチ名	延長	主な時代	主な遺構	出土遺物等
1トレンチ	0.7~1.2m×14.2m	不明	溝2条	弥生土器片、須恵器片
2トレンチ	0.8m×2.9m	不明	無し	無し
3トレンチ	0.7m×10.3m	不明	土坑2基	土師質土器片、柱根

第5表 綾歌町栗熊西字大妻田地区試掘調査 トレンチ概要

調査の結果、対象地には弥生土器片や須恵器片を包含する土層が所在するが、複数時期の土器片が同一層から出土することや対応する遺構の検出がないこと、堆積土層の状況から旧河道等への堆積中のものと思われる。

耕作土の下層付近で2基の土坑を検出したが、詳細は摺めておらず1基からは柱根と考えられる木材が出土した。

4. まとめ

今回の調査で、計画地内には土器片を包含する層の堆積があること及び僅かながら遺構の分布が認められた。遺物を包含する層は、旧河道の氾濫による堆積土及び整地土であることが推測できる。その下層から遺構は検出されていない。上層から溝及び土坑が検出されるが資料不足により詳細までは掴めていない。

これらのことから検討すると、遺構の分布は見られるものの非常に希薄であることから今回の調査記録をすることで今後の保護措置は不要であると考えられる。

5. 出土木製品分析結果

株吉田生物研究所

放射性炭素年代測定

◎はじめに

丸亀市綾歌町栗熊東字大妻田地区より検出された建築部材 1 点について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

◎ 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表 1 のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、曆年年代を算出した。

表 1 測定試料及び処理

No.	試料データ	前処理
I	試料の種類：木材	超音波洗浄
	試料の性状：不明	酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1N, 塩
	状態：wet	酸：1.2N)
	備考：柱根	サルフィックス

◎ 結果

表 2 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ ^{13}C ）、同位体分別効果の補正を行って曆年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、 ^{14}C 年代を曆年年代に較正した年代範囲を示す。曆年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後曆年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて曆年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2% であることを示すものである。

なお、曆年較正の詳細は以下の通りである。

曆年較正

曆年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の曆年較正には 0xCa14.0 (較正曲線データ : INTCAL04) を使用した。なお、 1σ 曆年年代範囲は、0xCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の曆年年代範囲であり、同様に 2σ 曆年年代範囲は 95.4% 信頼限界の曆年年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に曆年年代が入る確率を意味する。それぞれの曆年年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

表2 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

No.	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年 代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	1 σ 年代範囲に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年範囲	2 σ 暦年範囲
1	-28.70 \pm 0.14	131 \pm 19	130 \pm 20	1683AD(11.1%)1698AD 1723AD(7.9%)1736AD 1805AD(7.1%)1816AD <u>1834AD(30.1%)1879AD</u> 1916AD(12.1%)1934AD	1680AD(33.2%)1764AD <u>1800AD(46.5%)1892AD</u> 1908AD(15.7%)1940AD

◎ 考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。得られた暦年範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

樹種調査結果

○ 試料

試料は丸亀市内遺跡緑歌町栗熊東字大妻田地区から出土した建築部材1点である。

○ 観察方法

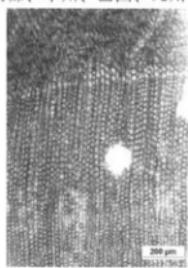
剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

○ 結果

樹種同定結果（針葉樹1種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) マツ科マツ属[二葉松類] (*Pinus* sp.) (遺物 No. 1) (写真No. 1)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は急であった。大型の垂直樹脂道が 細胞間隙としてみられる。柾目では放射組織の放射柔細胞の分野壁孔は窓型である。上下両端の放射仮道管内は内腔に向かって鋸歯状に著しくかつ不規則に突出している。板目では放射組織は単列で1~15細胞高のものと、水平樹脂道を含んだ紡錘形のものがある。マツ属[二葉松類]はクロマツ、アカマツがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。



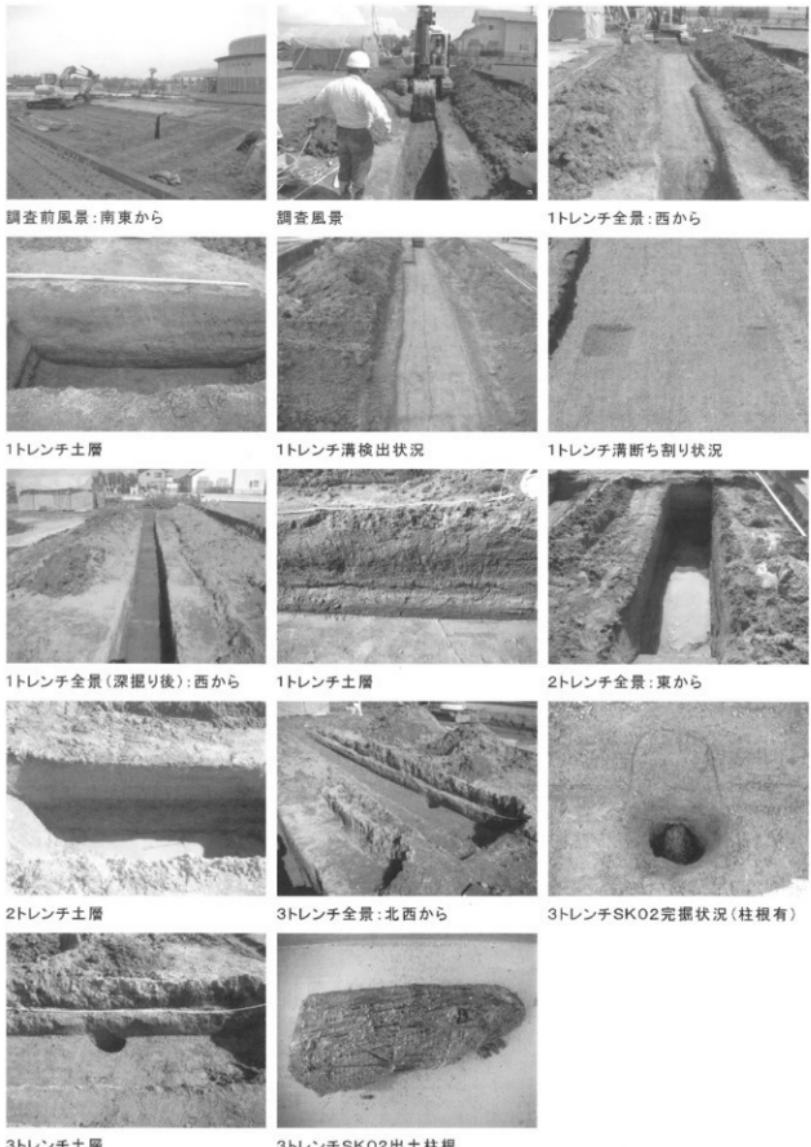
木口



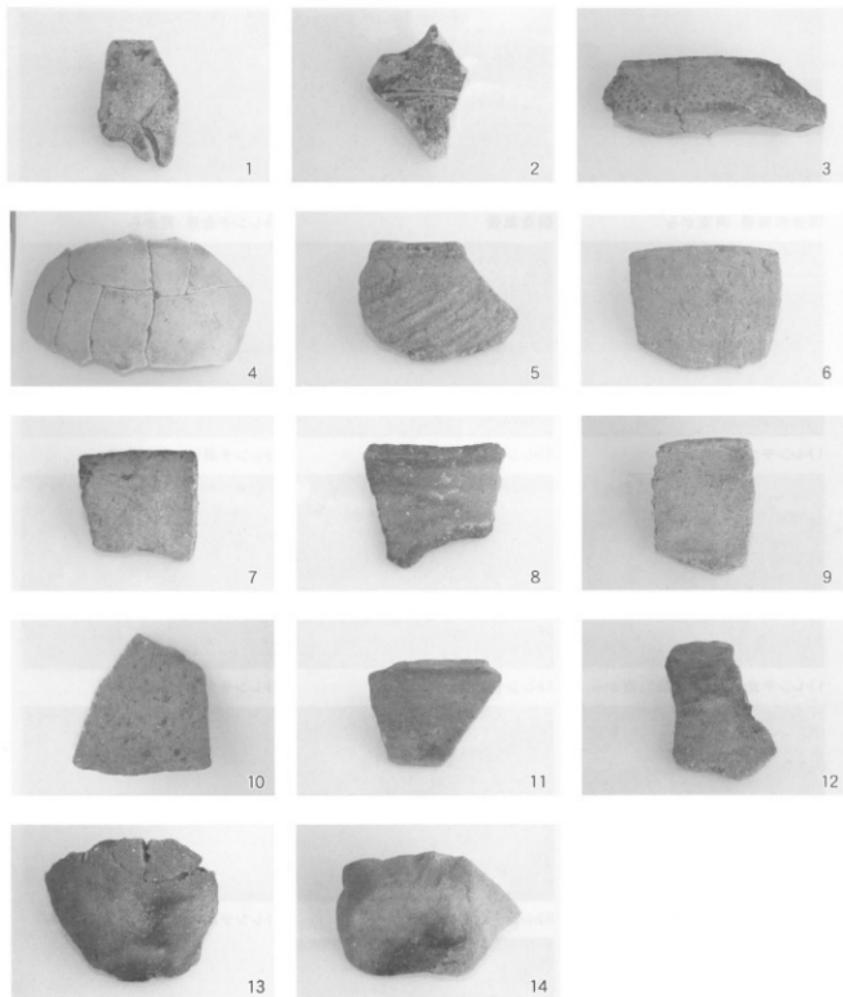
柾目



板目



図版10 綾歌町栗熊西字大妻田地区試掘調査(1)



図版11 綾歌町栗熊西字大妻田地区試掘調査(2)

綾歌町栗熊東字下河西地区

第VII章 綾歌町栗熊東字下河西地区試掘調査

調査対象地 綾歌町栗熊東字下河西 62-1、62-2、63
 調査期間 平成20年9月24日～9月25日
 調査面積 約115m² (調査対象面積 3243m²)

1. 立地と環境

当該地は、丸亀市の南東部にあり、南の猫山から派生する尾根先端付近の微高地東裾に位置する。西の微高地には『行末西遺跡(弥生・古墳：集落跡)』が所在する。また、南の小丘陵上には『行末遺跡(弥生：集落跡)』が所在するなど弥生時代から古墳時代にかけて特に栄えていた地域であることが分かっている。

2. 調査に至る経緯と調査の経過

店舗建設に伴い、事業者より平成20年8月13日付けで埋蔵文化財の有無に関する照会がなされた。周辺には弥生時代を中心とする遺跡の存在が知られており、当該地においても関連する遺跡の分布が予想されることから、試掘調査を実施することとした。9月9日に立ち入り申請がなされ、9月24日～25日にかけて調査を行った。調査終了後トレンチは埋め戻し現状に戻した。

今回の調査で、計画地内には遺構の分布は見られないことが明らかになったため、10月20日に保護措置は不要である旨の回答を行った。

3. 調査の概要

計画地は、現況として2枚の水田であったことから、そのそれぞれを調査区として調査を実施した。それぞれの調査区に3本ずつ試掘トレンチを設定して調査を行った。以下、トレンチごとに概要を報告する。

【1トレンチ】

南の水田中央東半部に東西軸で設定。耕作土の下層には、灰黄色系の粘質細砂が堆積する。その下層に灰褐色系の粘土層及び灰色の砂層が堆積する。各層の堆積状況から旧流域であったことが予想される。堆積の傾斜は僅かであるが東に下っていることから、西の肩口に近いものと考えられる。粘土層及び砂層からは土師質の土器片及び須恵器片が少量ではあるが出土した。遺構の検出は無い。

【2トレンチ】

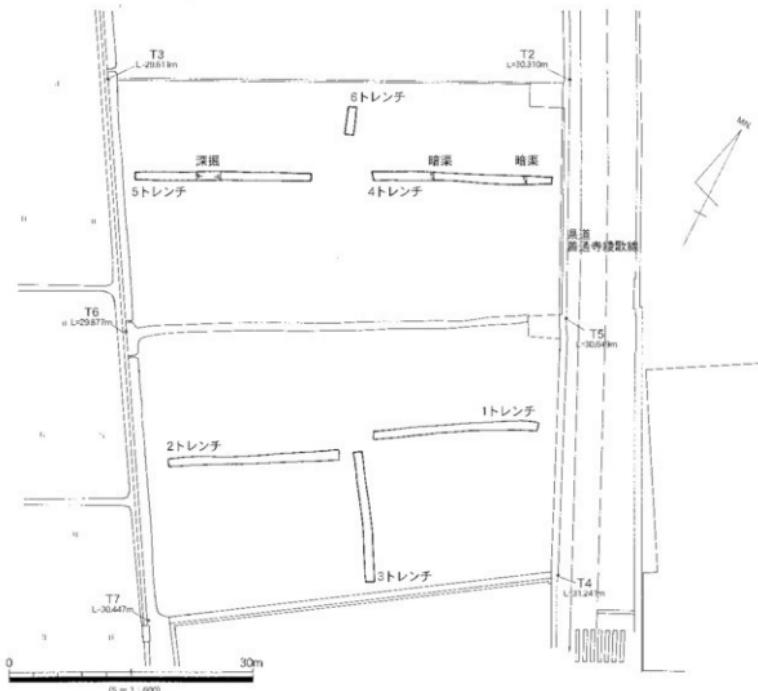
土層序は、1トレンチ同様である。粘土層及び砂層からは土師質の土器片及び須恵器片が少量ではあるが検出される。遺物1は陶器の灯明皿である。



第33図 調査地位置図



第34図 出土遺物実測図



第35図 トレンチ配置図

【3トレンチ】

土層序は、1・2トレンチと同様であり、遺物の包含状況も同様である。遺構の検出は認められない。以上の状況からこの水田は旧流域内であることが予想される。遺物2は5層出土の須恵器坏の底部である。底径約16.0cmを測る。高台部分は短く、やや下方に張り出す。

【4トレンチ】【5トレンチ】

ともに土層序は、1・2・3トレンチと同様であり、遺物の包含状況も同様である。遺構の検出は認められない。

5トレンチの西端付近は、他の調査箇所で見られる遺物を包含する粘土層や砂層が見られず、よく締まった安定地盤が見られることから、流域の肩口付近であることが考えられる。

【6トレンチ】

今回の調査区は、全体が旧流域内で遺構が所在しないことが分かったが、少量ではあるが遺物を包含することから、6トレンチを設定した。確認のための深堀トレンチで、更に下層の状況を確認することとした。

土層序は、他のトレンチと同様であり、下層の状況は、粘土層と砂層の連続であり冲積層であることが分かった。遺物は上層から土師質土器片が1点のみ出土した。遺構の検出は無かった。

トレンチ名	延長	主な時代	主な遺構	出土遺物等
1 トレンチ	1.1m×20.2m	不明	無し	土師質土器片、須恵器片
2 トレンチ	1.1m×20.9m	不明	無し	土師質土器片、須恵器片
3 トレンチ	1.1m×16.2m	不明	無し	土師質土器片、須恵器片
4 トレンチ	1.1m×22.0m	不明	無し	土師質土器片、須恵器片
5 トレンチ	1.1m×21.5m	不明	無し	土師質土器片、須恵器片
6 トレンチ	1.1m×3.4m	不明	無し	土師質土器片

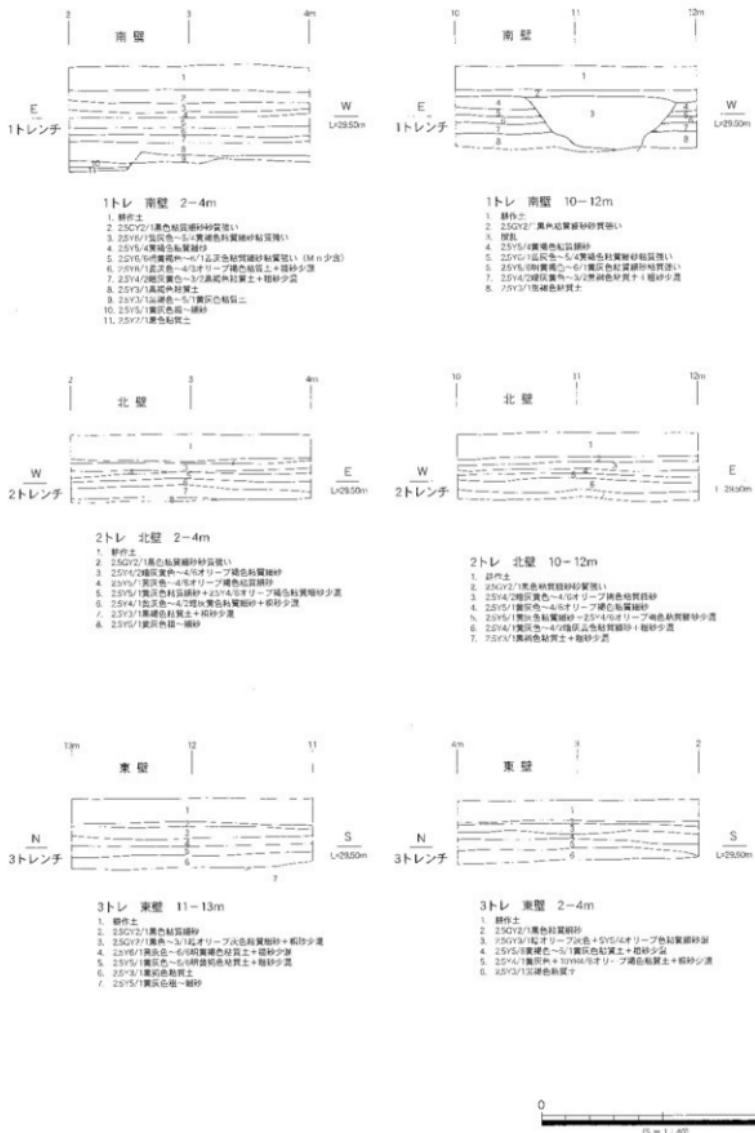
第6表 綾歌町栗熊東字下河西地区試掘調査 トレンチ概要

4.まとめ

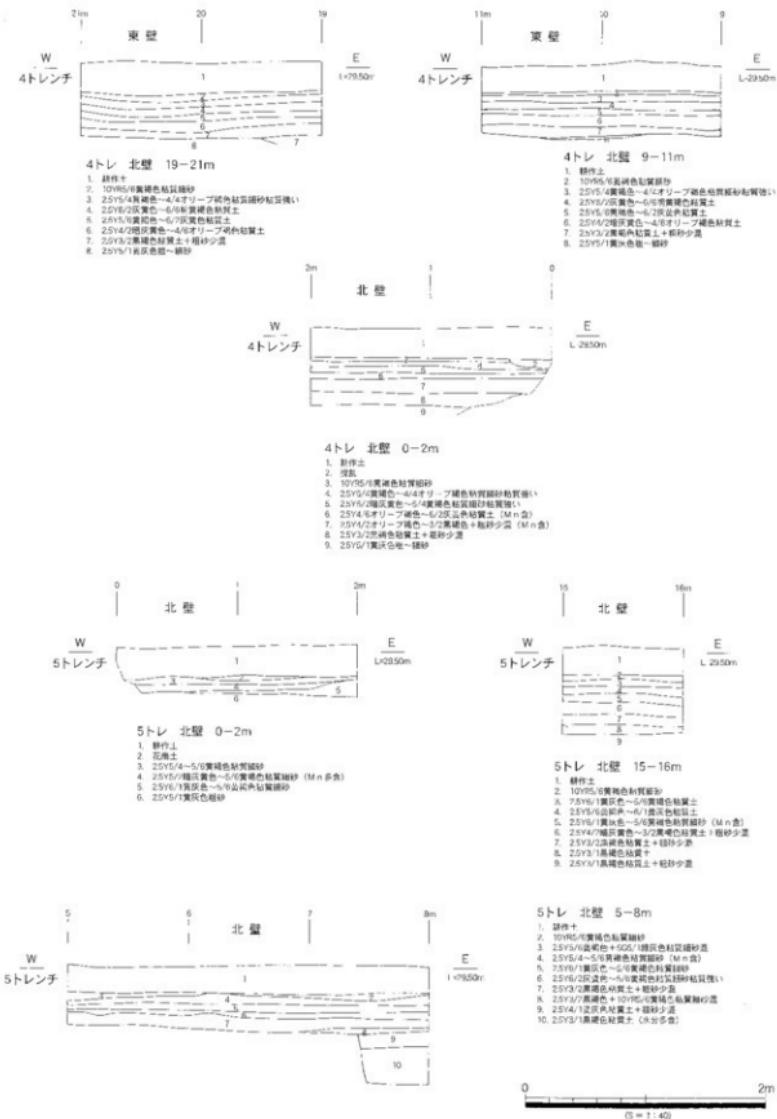
調査の結果、対象地には土器片の包含が見られるが遺構は所在しないことが判明した。出土した遺物もローリングを受けているものが多く上流域からの流れ込みであると考えられる。少量ではあるが土師質土器片や須恵器片が含まれる層がみられることから、古墳時代から中世にかけての遺跡が周辺に所在しているものと思われる。

ことから、周辺に関連する遺構が展開する可能性が考えられる。また、計画地の西側には緩やかな微高地となっていることから『行末遺跡』『行末西遺跡』に関連する遺構が残されている可能性がある。

計画地には、遺物を包含する層は見られるが、流域の堆積による層に含まれており遺構を全く伴わないことから今後の保護措置は不要であると考えられる。



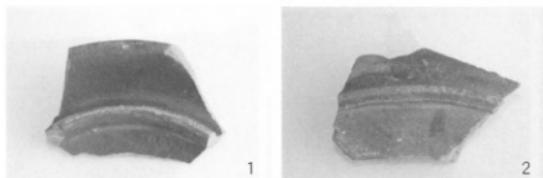
第36図 1~3トレチ断面図



第37図 4・5トレンチ断面図



図版12 綾歌町栗熊東字下河西地区試掘調査(1)



図版13 綾歌町栗熊東字下河西地区試掘調査(2)

飯山町東小川字前谷地区

第Ⅷ章 飯山町東小川字前谷地区試掘調査

調査対象地 飯山町東小川字前谷 313-1
 調査期間 平成20年10月9日～10月10日
 調査面積 約25m² (調査対象地面積 348m²)

1. 立地と環境

計画地は、岡田台地の北端付近に位置する。付近には、古墳時代中期の古墳群である『岡田万塚(古墳:古墳)』の分布が知られている。多くの古墳は、古くからの開墾等により破壊されてしまっているようであるが、数基は残存している。

古墳群の大半は、新池を中心とした周辺に群集していたようであり、資料によると、今回の計画地の北東隅及び南西隅付近にも所在していたことが記されている。

2. 調査に至る経緯と調査の経過

平成20年9月17日に個人住宅建設に伴い、埋蔵文化財の有無に関する照会が提出された。それに伴い現況は水田となっており、マウンド等は見られないが古墳の底部付近の残存があれば、貴重な資料を得ることができるから試掘調査を実施することとした。

調査は平成20年10月9日から2日間かけて実施した。調査の結果、11月21日付けで保護措置の必要な事を回答した。

3. 調査の概要

試掘調査は、重機掘削によるトレンチ調査とした。計画地内に5箇所の試掘トレンチを設定して調査を行った。以下、トレンチ毎に概要を報告する。

【1トレンチ】

耕作土の下層には整地層が重なっており、若干遺物を包含する。耕作土下42cmほどでベース層に達する。遺構は認められなかった。

【2トレンチ】

土層序は、1トレンチと同様であるが、ベース層が西に向けて上がってくる。計画地が丘陵の頂部から東に位置することから地形を現しているものと考えられる。ベース上の整地層から遺物が少量出土する。

【3トレンチ】

トレンチ北端付近で土坑状の落ちを検出する。詳細は不明である。トレンチ中央付近で、トレンチに対して斜行する溝状落ちSD0.1を検出する。

【4トレンチ】

トレンチ東端で、トレンチに対して斜行する溝状落ち(SD0.1)を検出する。埋土は、3トレンチの溝と類似しており、須恵器壺片を包含する。遺物1はSD0.1出土の土鍋である。表面は剥落して不明であるが、内面は板ナデの後横ナデによる調整が見られる。口径約29cmを測り、口縁は短く折れ面を持ち終わる。

【5トレンチ】

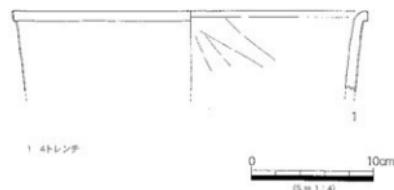
耕作土下に薄く整地土が認められるが、すぐベース層となる。トレンチ中央付近で、トレンチに対して斜



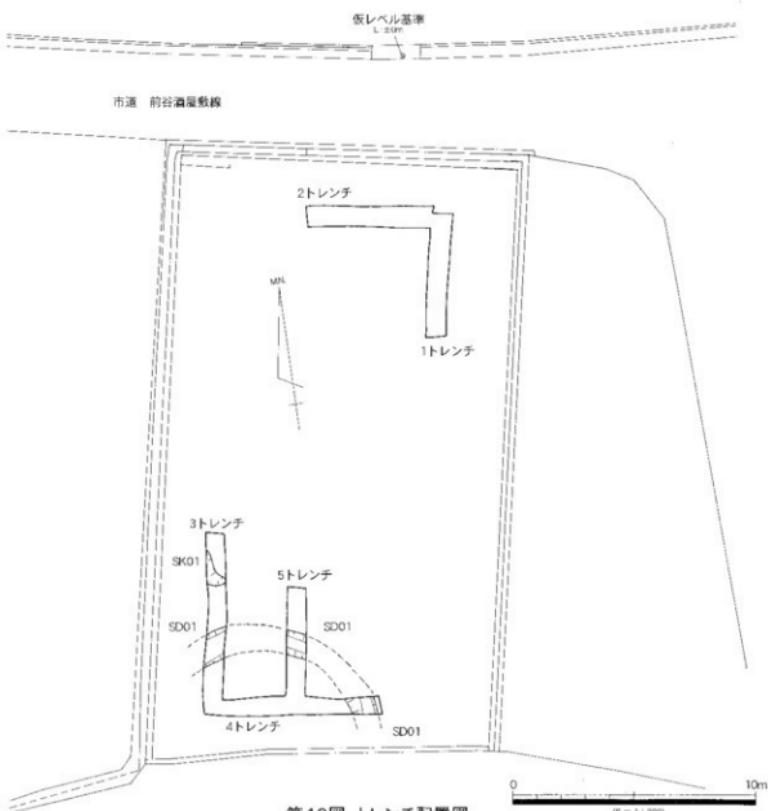
第38図 調査位置図

行する溝状落ちを検出する。

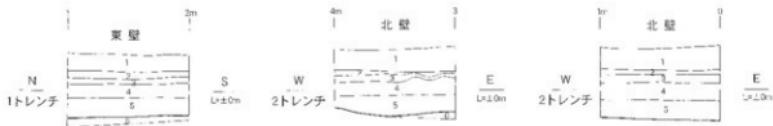
3本のトレンチから溝状の遺構を検出することができた。検出された配置をまとめると、内径8.5m、外径10.5mほどの径を描くことが分かった。3トレンチの溝からは、土師器の壺片が出土したことから古墳の周溝である可能性が高い。



第39図 出土遺物実測図



第40図 トレンチ配置図



1トレンチ (東壁 1~2m)

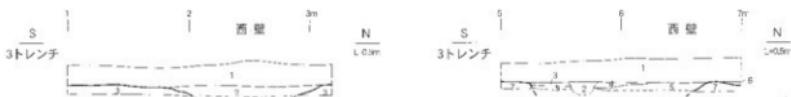
- 耕作土
- 25%の黄褐色粘質砂
- 2.5%の黄褐色粘質砂
- 2.5%の黄褐色粘質砂
- 2.5%の黄褐色粘質砂
- 10%の黄褐色粘质土 + 10%の黄褐色粘质砂多量

2トレンチ (北壁 3~4m)

- 耕作土
- 25%の黄褐色粘质砂
- 2.5%の黄褐色粘质砂
- 2.5%の黄褐色粘质砂
- 2.5%の黄褐色粘质砂
- 10%の黄褐色粘质土 + 10%の黄褐色粘质砂多量

2トレンチ (北壁 0~1m)

- 耕作土
- 25%の黄褐色粘质砂
- 2.5%の黄褐色粘质砂
- 2.5%の黄褐色粘质砂
- 2.5%の黄褐色粘质砂
- 10%の黄褐色粘质土 + 10%の黄褐色粘质砂多量



3トレンチ (西壁 1~3m)

- 耕作土
- 2.5%の黄褐色粘质砂
- 10%の黄褐色粘质土 + 10%の黄褐色粘质砂多量

3トレンチ (西壁 5~7m)

- 耕作土
- 2.5%のオリーブ緑色粘质砂
- 10%の黄褐色粘质砂
- 2.5%の黄褐色粘质砂
- 2.5%の黄褐色粘质砂
- 2.5%の黄褐色粘质土
- 10%の黄褐色粘质土 + 10%の黄褐色粘质砂多量



4トレンチ (南壁 5~6.5m)

- 耕作土
- 2.5%の黄褐色粘质砂
- 2.5%の黄褐色粘质砂
- 2.5%の黄褐色粘质砂
- 2.5%の黄褐色粘质砂
- 2.5%の黄褐色粘质砂
- 10%の黄褐色粘质土 + 10%の黄褐色粘质砂多量

4トレンチ (南壁 0~1m)

- 耕作土
- 10%の黄褐色粘质土 + 10%の黄褐色粘质砂多量



5トレンチ (西壁 1.5~3m)

- 耕作土
- 10%の黄褐色粘质砂
- 2.5%の黄褐色粘质砂
- 2.5%の黄褐色粘质砂
- 10%の黄褐色粘质土 + 10%の黄褐色粘质砂多量



第41図 1~5トレンチ断面図

トレンチ名	延長	主な時代	主な遺構	出土遺物等
1 トレンチ	0.9m × 5.1m	不明	無し	土師器片
2 トレンチ	0.9m × 5.2m	不明	無し	土師器片、須恵器片
3 トレンチ	0.9m × 6.9m	不明	溝1条、土坑1基	無し
4 トレンチ	0.8m × 7.3m	不明	溝1条	土師器片、須恵器片
5 トレンチ	0.8m × 4.5m	不明	溝1条	無し

第7表 飯山町東小川字前谷地区試掘調査 トレンチ概要

結果、計画地は開墾により掘削を受けており耕作土直下でベース層が現れることが分かった。しかし北東部は、本来の地形がやや下っており整地により地上げされていることが判明した。

計画地北東部の調査では、整地土中から若干の遺物が出土するものの、古墳の所在を立証する資料を得ることはできなかったが、南西部の調査では、古墳の周溝と思われる溝を確認することができた。

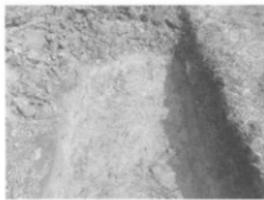
4.まとめ

今回の調査で、計画地内の南西隅付近に古墳の周溝である可能性の高い溝を確認することができた。残存状況が悪く、溝の底部約10cmが残っていただけではあるが、古墳の所在した位置を特定できる貴重な資料を得ることができた。

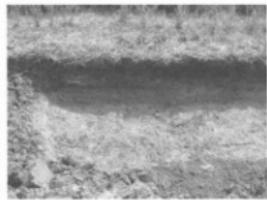
今回の調査で溝の配置は記録することができ、その他の遺構は残存していないことも併せて確認できた。遺構の残存状況が悪いことから、今回の調査で記録保存は十分であると考えられ、今後の保護措置は不要であるとの結論に至った。



図版14 飯山町東小川字前谷地区試掘調査(1)



4トレンチ溝確認状況:西から



4トレンチ南壁土層



5トレンチ全景:北から



5トレンチ溝確認状況:南から



5トレンチ西壁土層



3・4・5トレンチ全景:南西から



図版15 飯山町東小川字前谷地区試掘調査(2)

金倉町字道下地区

第IX章 金倉町字道下地区試掘調査

調査対象地 金倉町字道下 1489、1490
 調査期間 平成20年10月28日
 調査面積 約74.0 m² (調査対象面積2099 m²)

1. 立地と環境

対象地は丸亀平野の北西部に位置し、金倉川の右岸付近にある。

周辺の埋蔵文化財包蔵地状況は、計画地に接するよう北側一帯が『道下遺跡（弥生～近世：包含地）』、南側一帯が『中の池遺跡（弥生：集落跡）』に指定されている。

また、道下遺跡の東には、『新田橋本遺跡（弥生・古墳：集落跡）』や『今津中原遺跡（古代～中世：集落跡）』の所在が近年の調査によって明らかになってきている。

2. 調査に至る経緯と調査の経過

平成20年9月29日付けで宅地分譲計画に伴う埋蔵文化財の有無に関する照会がなされた。このことを基に検討した結果、対象地付近にも遺跡の所在のあることが十分予想されるため、試掘調査を実施することとした。10月23日に事前踏査を行い検討した結果、重機によるトレンド調査を実施することとした。

調査は10月28日に実施した。今回の調査で遺構、遺物ともに希薄であることが確認できたため、計画区域全域での保護措置は不要である旨の回答を平成21年2月5日に行った。

3. 調査の概要

調査対象地は南北に長く2筆で構成されており、そのそれぞれにトレンドを設定し調査を行った。以下、トレンド毎に概要を報告する。

【1トレンド】

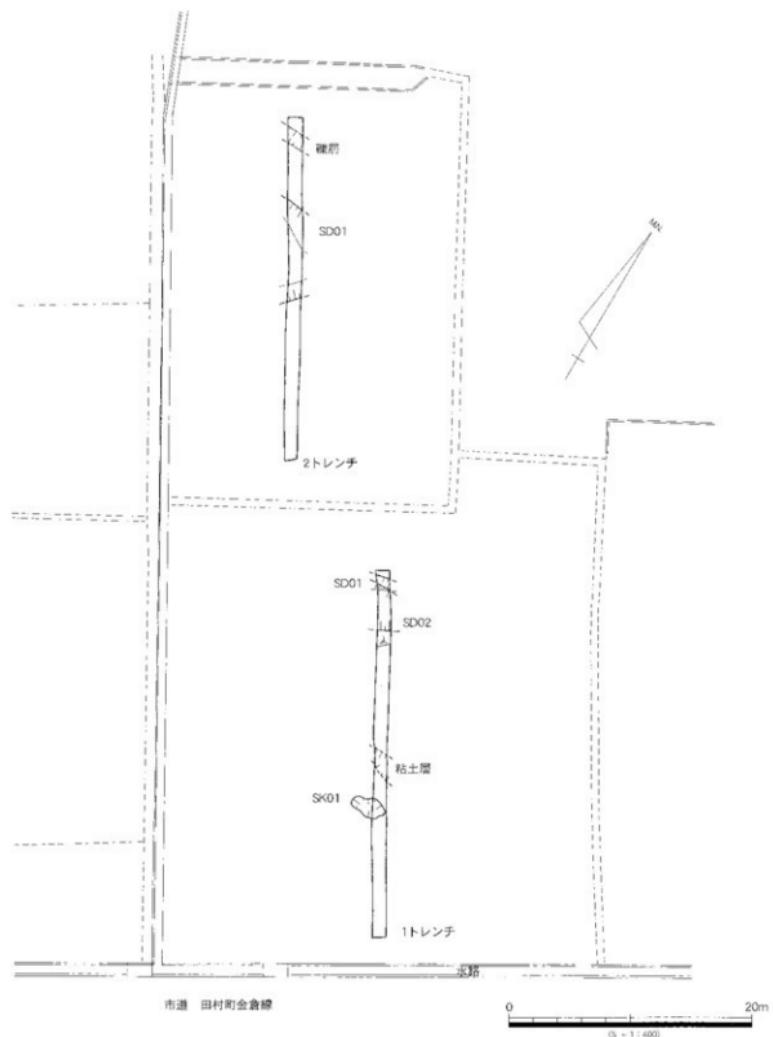
トレンド南端から10m地点付近で土坑を検出。検出面は、耕作土直下である。断面観察しても肩ラインはそれほど明瞭ではなく、遺構でない可能性もある。北端において溝を2条検出した。2条共に検出面は耕作土直下である。SD01は暗灰色系の粘質土で中世期に属すると思われるが遺物は出土していない。SD02は灰黄色系の粘質土の埋土で中央部は黒褐色系の粘質土が堆積する。SD02は、切り合い状況からSD01よりは先行することが分かるが、遺物の包含も見られず詳細については不明である。底部がトレンド以北に向けて下っていくことから、更に規模が大きくなることは確実であり旧河道である可能性が高い。耕作土中から少量の遺物が採取されるが、下層からの遺物は認められない。

【2トレンド】

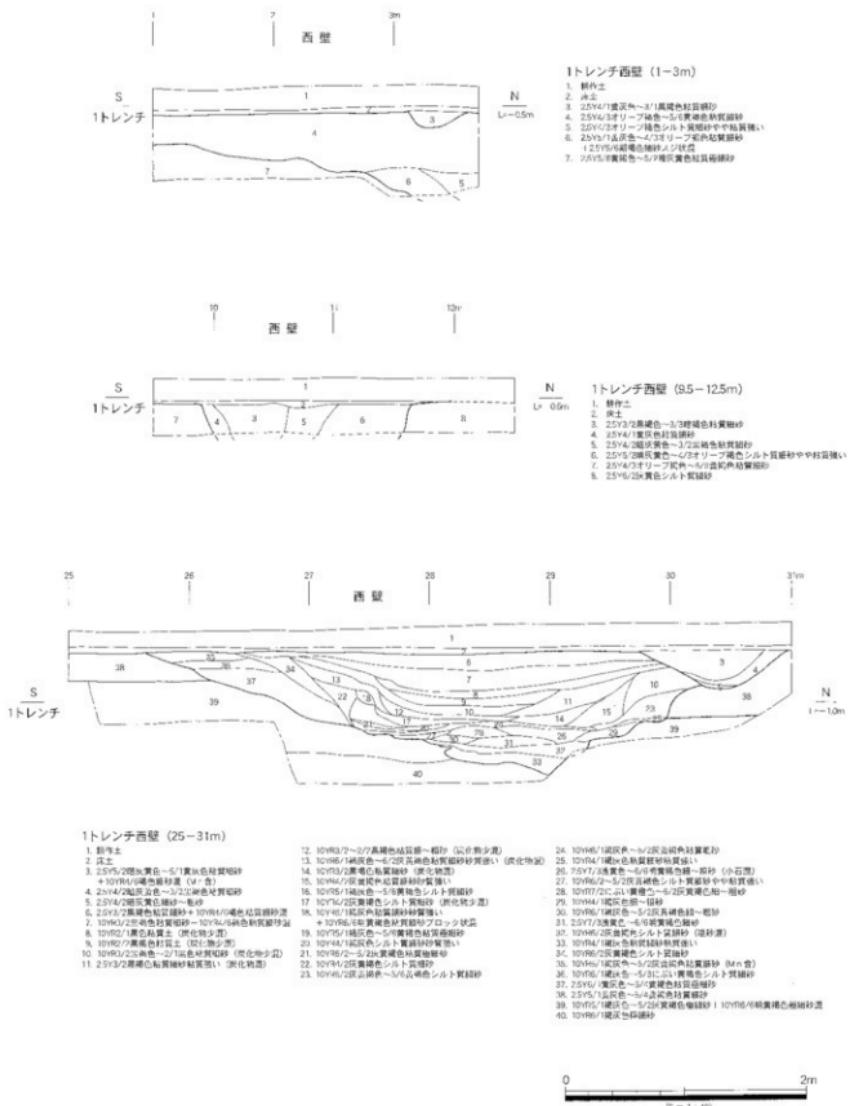
中央で西方に開く溝状の落ちを検出。検出面は、耕作土直下である。埋土状況は、灰黄色系の粘質土で中央部に暗褐色系の粘質土が薄く堆積する。肩のラインが緩く、溝というよりは窪地への堆積のように思える。中央の暗褐色土からは少量のサヌカイト片が出土するが製品は無い。耕作土中から少量の土師器片等が採取されるが、下層から他の遺物は出土していない。



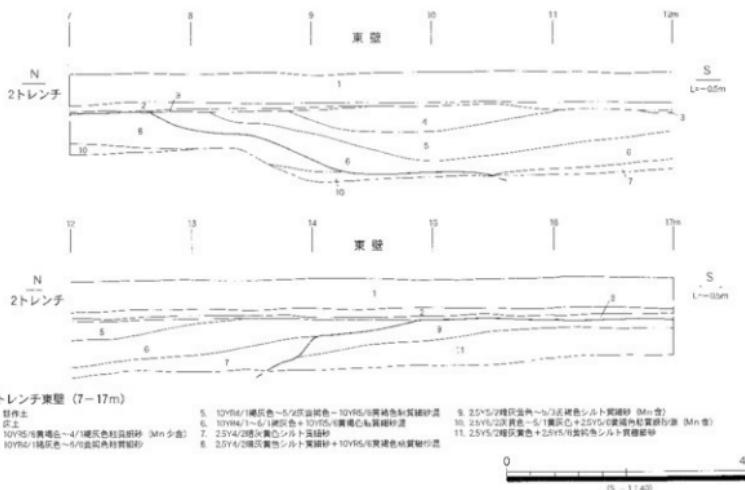
第42図 調査地位置図



第43図 トレンチ配置図



第44図 1トレンチ断面図



第45図 2トレンチ断面図

トレンチ名	延長	主な時代	主な遺構	出土遺物等
1 トレンチ	1.2m × 30.0m	不明	溝2、土坑1	土師器片、陶器片、サヌカイト片
2 トレンチ	1.2m × 28.1m	弥生	溝1	サヌカイト片、土師器片、土師質土器片

第8表 金倉町字道下地区試掘調査 トレンチ概要

調査の結果、最大限解釈して土坑1基、溝3条を検出した。1トレンチのSD01以外は遺構として取り扱うには難しい状況であることは否めない。

また、いずれも検出面が耕作土直下であり、上部に包含層も認められることからも検出面が旧状を留めているとは考えられない。少量ではあるが、サヌカイト片を包藏することから遺構の一部若しくは周辺に遺跡の展開する可能性は残されるが、現況としてそれを証明する資料は残されていないと考えられる。

4.まとめ

今回の調査で、僅かに遺構を検出することができたが、確実な遺構として捉えられるのは1トレンチのSD01だけである。

当該地については、既に削平を受けており、本来の遺構面は残存していないことも確認された。

これらのことから検討すると、計画区域の一部で遺構は検出されたがそれらの詳細をつかめる資料を得られるまでには至らず、遺構密度も非常に薄いことから、計画区域全域について保護措置が不要であるとの結論に至った。



調査前風景:南から



調査風景



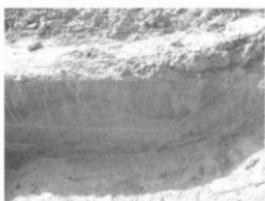
1トレンチ全景:北から



1トレンチSK01検出状況



1トレンチSD01・02



1トレンチSD01



2トレンチ全景:北から



2トレンチSD01

図版16 金倉町字道下地区試掘調査

田村町字橋の坪地区

第X章 田村町字橋の坪地区試掘調査

調査対象地 田村町字橋の坪 1281、1282-1、1283-3、1284-2
 調査期間 平成20年11月4日～11月6日
 調査面積 約242.8m²（調査対象面積1811m²）

1. 立地と環境

計画区域付近では、これまでに調査を実施した経緯が無く埋蔵文化財の包蔵状況は不明となっている。

しかし、西方の先代池や平池の周辺には『中の池遺跡（弥生：集落跡）』『道下遺跡（弥生～近世：包含地）』『平池西遺跡（縄文・弥生：包含地）』『平池南遺跡（縄文・弥生：包含地）』『平池東遺跡（弥生：包含地）』など広い範囲で遺跡の分布が確認されている。

また、南方の田村池には『田村池遺跡（弥生～古代：包含地）』が確認されている。更に、北方には『田村廃寺（奈良：寺院）』や『田村遺跡（古代：寺院）』などが所在しており、時代の遺跡が集中している地域であることが分かる。



第46図 調査位置図

2. 調査に至る経緯と調査の経過

平成20年9月8日付けで宅地分譲建設に伴い、埋蔵文化財に関する有無の照会がなされた。対象地周辺では埋蔵文化財に関する調査を実施した経緯が無く、埋蔵状況は不明なため、調査を実施することとした。調査は、11月4日から6までの期間で実施した。

調査の結果、計画区域内で遺構の分布が確認された。確認された遺構は、ほとんどが溝で遺物も希薄であったことから詳細は不明である。よって保護措置は不要であるとの旨を1月23日、事業者に対して回答した。

3. 調査の概要

【1トレンチ】

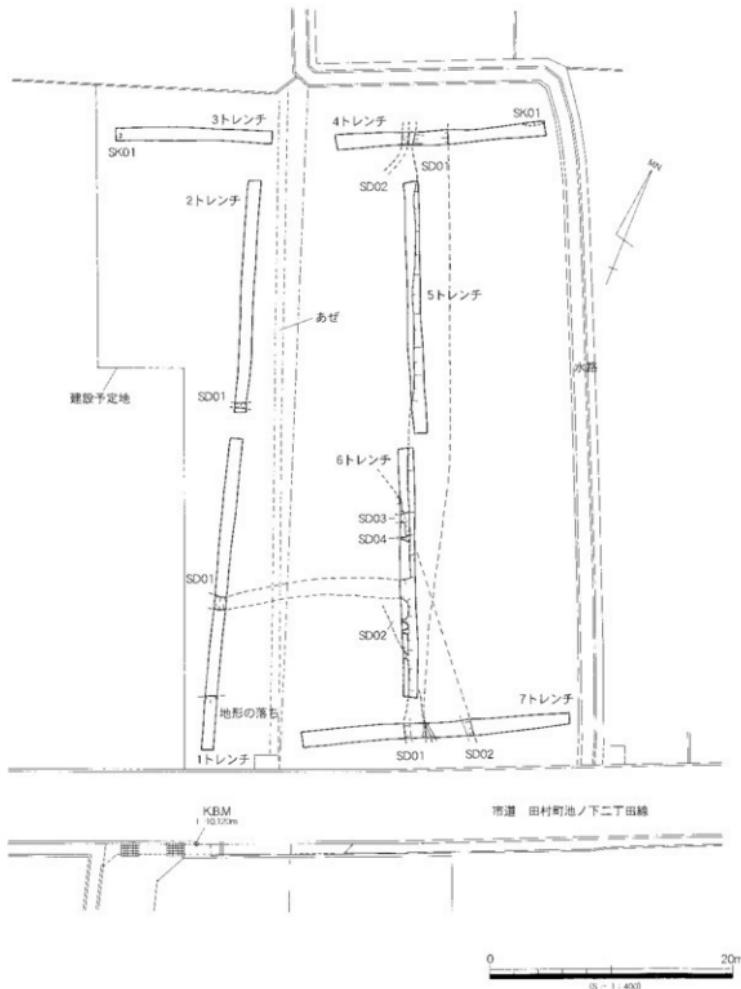
トレンチ南端から5m付近で南に下る落ちを検出する。検出面は耕作土下面より23cmほど下部である。ベース層の上面層がそのまま下っていくことから地形が落ちているものと考えられる。トレンチ中央部で東西軸の溝（SD01）を検出。検出面は南の地形の落ち検出面より1層高い。溝の埋土は黄灰色系の細砂で上師器鉢片が出土した。古代～中世に属すると思われる。遺物1～3は、5層から出土した。地山直上の包含層である。遺物1は、土師質の土釜である。鋤下を指で押さえ張り付ける。2は、丁寧なナデによる貼付け高台である。3は、サヌカイト片である。折損により不明であるが、僅かに調整痕が見られる。

【2トレンチ】

南端で東西軸の溝（SD01）を検出。検出面は、耕作土下面より13cmほど下部である。埋土は暗灰黄色のシルト質細砂で、非常に浅く土師器小皿片が出土した。上位の層から少量の遺物を確認するが、伴う遺構は認められない。遺物4～6は、3層から出土した。中世の土鍬と土釜である。4、5はゆるやかに内傾する口縁を持つ。6は長く延びる胴部持つ土釜である。7は、SD01出土の碗で、口縁が僅かに残る。

【3トレンチ】

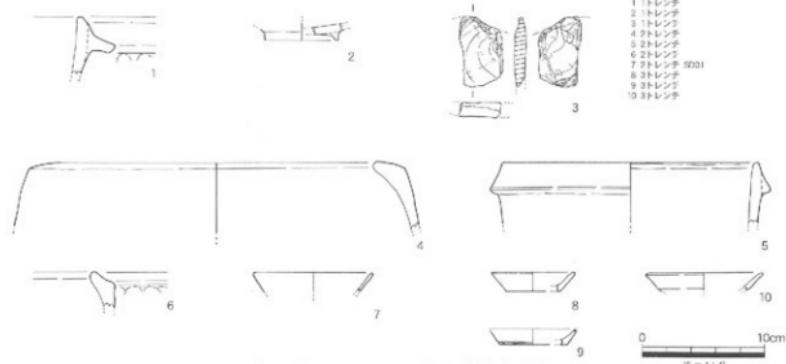
西端で土坑状の落ちを検出した。検出面は、耕作土下面より28cmほど下部である。埋土は黒褐色系の粘



第47図 トレンチ配置図

質土で遺物の包含は認められなかった。上位の層から少量の遺物を確認するが、伴う遺構は認められない。

8、9は3層から出土した小皿片である。10は、4層から出土した土師質の小皿である。外面には墨の付着が見られる。



第48図 1～3トレンチ出土遺物実測図

【4 トレンチ】

東端部で土坑状の落ちを検出した。検出面は、耕作土直下である。埋土は黄灰色系の細砂である。搅乱によるものである可能性が高い。

トレンチ中央部で大小の溝2条を検出した。SD01は幅2.85m、SD02は幅0.55mを測る。検出面は、いずれも同一で耕作土下面より13cmほど下部である。埋土は、灰褐色系の細砂で遺物は出土していない。上位の層から少量の遺物を確認するが、伴う遺構は認められない。

【5 トレンチ】

東半部ではほぼトレンチ軸と並行する溝を検出。検出面は、4トレンチのSD01、SD02検出面と同様である。4トレンチのSD01に対応するものと考えられる。

【6 トレンチ】

東半部でトレンチ軸と並行する溝(SD01)を検出。4トレンチのSD01、5トレンチのSD01に対応するものと考えられる。SD01は、トレンチ中央付近及び以南で西へ分岐する箇所が見られる。トレンチ中央付近の分岐する溝は、1トレンチのSD01に対応するものと考えられる。検出面は耕作土下面より14cmほど下部である。SD01からは土師器碗片が出土している。トレンチ北半部ではSD01より先行する溝(SD04)が検出された。検出面はSD01と同様で遺物の包含は認められなかった。

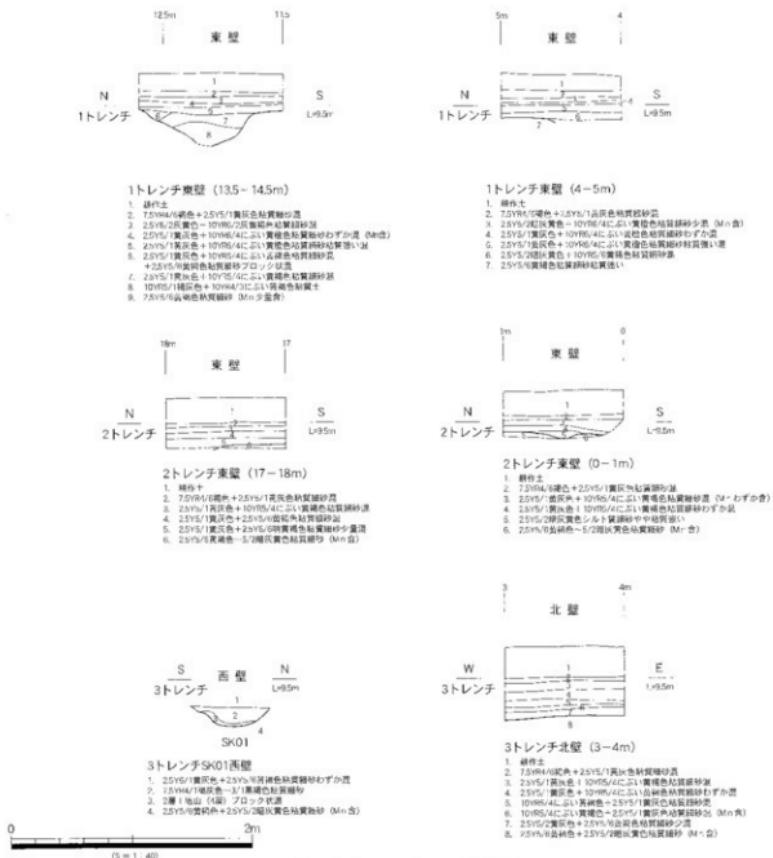
更に、SD04より先行するSD03を検出した。検出面は、SD01と同様である。最底から弥生土器片が出土した。

トレンチ中央付近でトレンチに対して斜行するSD02を検出。SD02は他の溝より先行しており、少量のサヌカイト片や土師器片などが見られるが、土師器片などについては他の溝の遺物等が混入してしまっている可能性が高い。SD02は周辺の地形調査から旧河道の一部である可能性が高いが、他の遺跡で検出されたものと類似しており、弥生時代後期～古墳時代初頭に属する溝である可能性も残される。

遺物1～14は、2層出土の土器である。11は中世の土鍋である。12は小皿である。底部はヘラ切りされ内面にススが付着する。13は瓦質土器の碗片である、外面に黒化処理を行っている。14は6層出土の土鍋である。口縁部下まで指オサエを施し、胴部外面にはハケ目が見られる。15は、SD01出土の底部である。摩滅のため調整は不明である。

【7 トレンチ】

中央部付近で溝2条を検出。SD01は6トレンチのSD01に対応し、SD02は6トレンチのSD02に



第49図 1~3トレンチ断面図

対応するものと思われる。

SD 0 1 からの出土遺物は無かったが、SD 0 2 の最底から弥生土器片が出土した。遺構検出面より上位層からは、遺物 1 6 ~ 1 8 が出土しているが、出土層は後世の整地土であると思われる。1 6 は土釜、1 7 は青磁の壺である。1 8 は色および胎土から中国製の青花窓で1 6 C 後半のものと思われる。

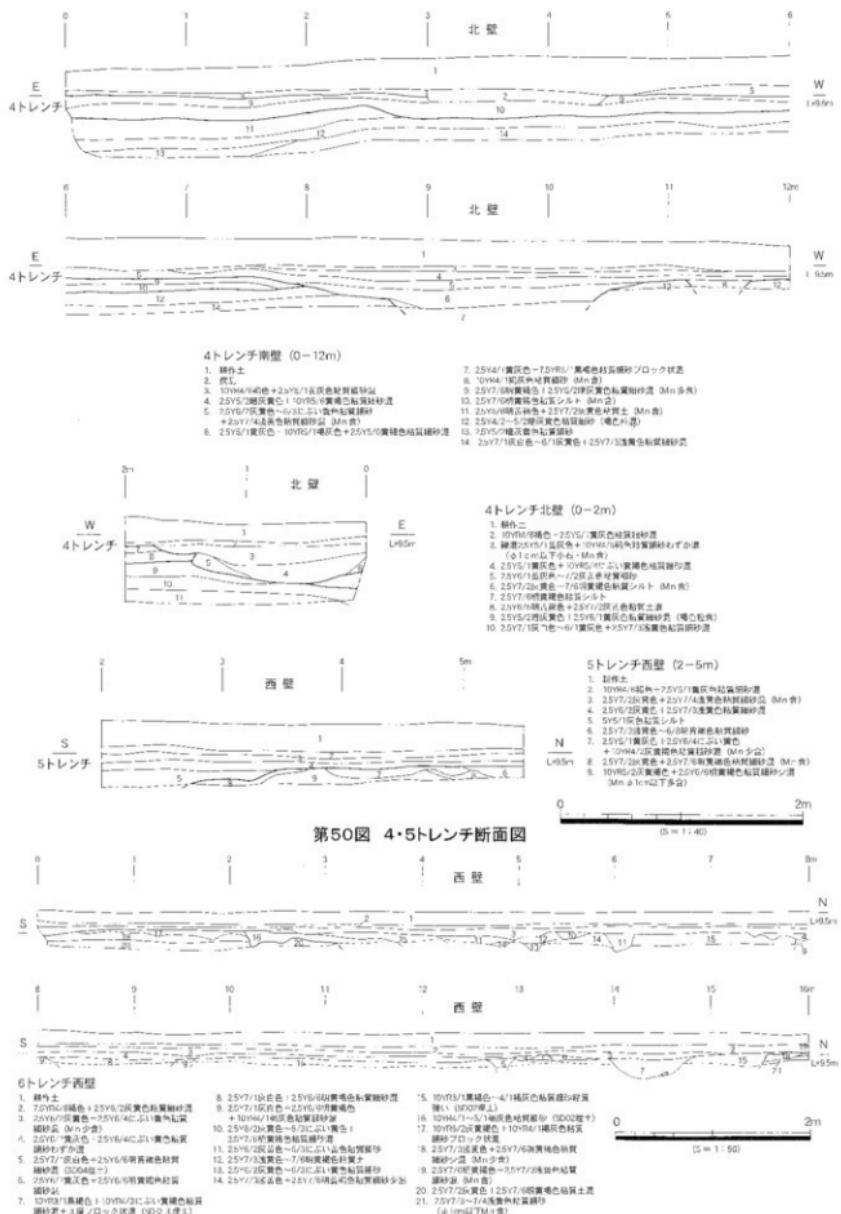
以上、計画区域内に7箇所の試掘トレンチを設定して調査を行った。

結果、計画地の東部で現在の地形に沿った南北軸の溝が延びることが確認された。途中から西方へ直角に分岐する溝も認められる。これは、条里に伴うものである可能性が高い。

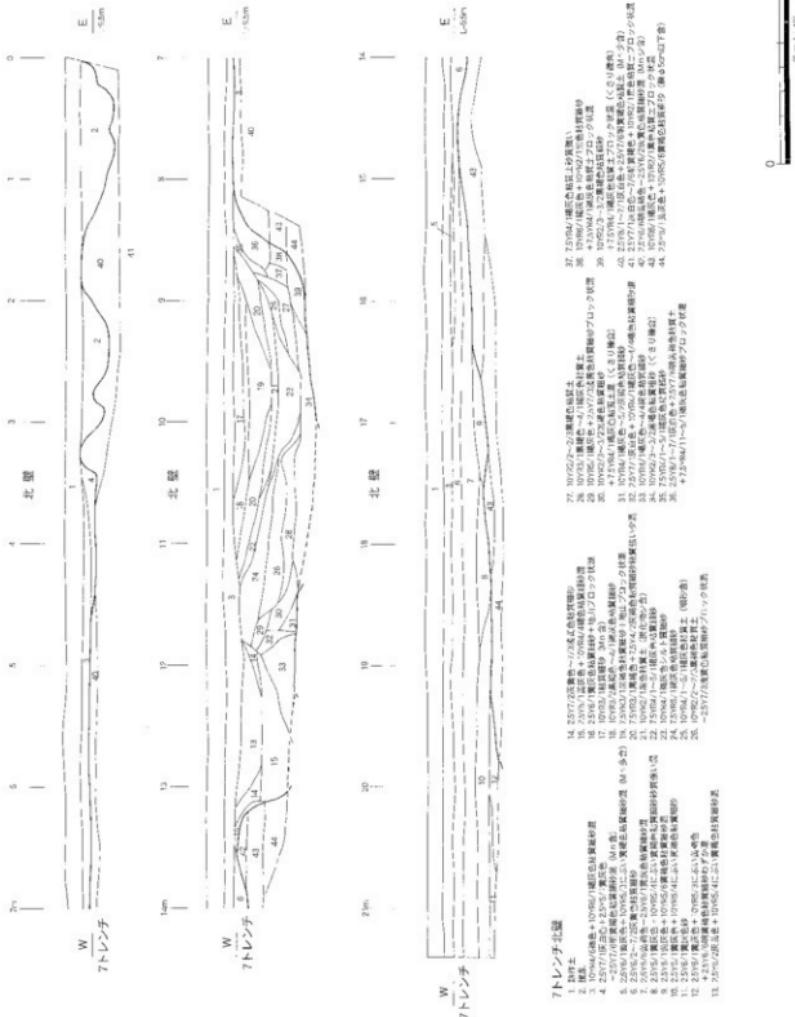
これに先行して溝が切り合っているが、詳細は不明である。更に、先行する溝が調査区を斜行している。これは、周辺の地形調査から谷地形もしくは旧河道の堆積の痕跡である可能性を秘めているが、新山橋本遺跡で見られる弥生時代後期～古墳時代初期にかけての溝である可能性もある。

住居址等の遺構は発見されていない。調査を通じて出土した遺物も非常に少ないとされる。

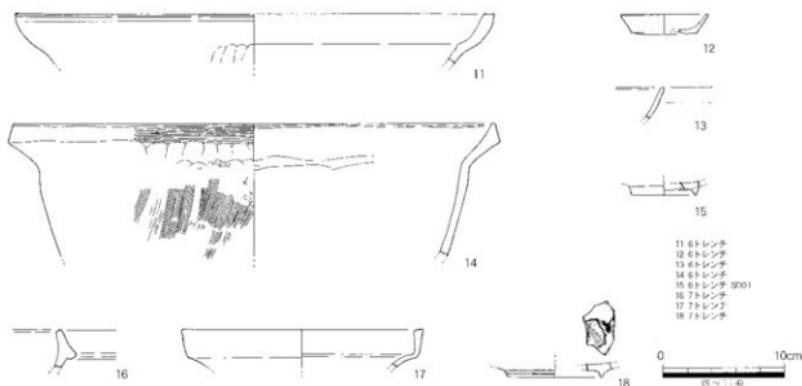
断面観察から、本来の遺構面は削平等によって完全に消失してしまっているものと考えられる



第51図 6トレンチ断面図



第52図 7トレンチ断面図



第53図 6・7トレント出土遺物実測図

トレント名	延長	主な時代	主な遺構	出土遺物等
1 トレント	1.1m × 25.6m	古代～中世	溝 1	サヌカイト、土師器片、土師質土器片、須恵器片
2 トレント	1.1m × 19.0m	古代～中世	溝 1	土師器片、土師質土器片、須恵器片、磁器片
3 トレント	1.1m × 12.8m	不明	土坑 1	弥生土器片、土師器片
4 トレント	1.1m × 17.2m	古代～中世	溝 2、土坑 1	サヌカイト、土師器片、土師質土器片、須恵器片
5 トレント	1.2m × 20.5m	古代～中世	溝 1	土師器片、土師質土器片、須恵器片、磁器
6 トレント	1.3m × 20.4m	弥生～中世	溝 4	弥生土器片、サヌカイト、土師器片、土師質土器片、須恵器片、瓦器片
7 トレント	1.4m × 22.0m	弥生～中世	溝 2	弥生土器片、土師器片、須恵器片、陶器片

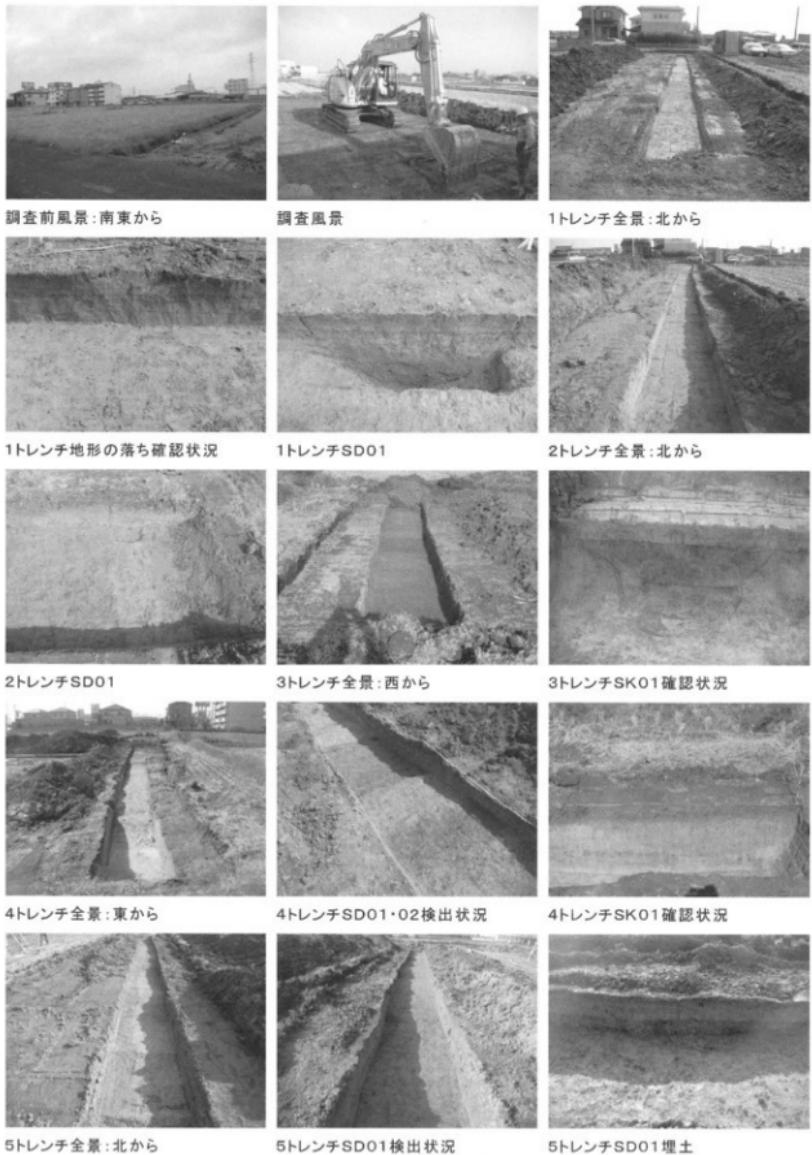
第9表 田村町字橋の坪地区試掘調査 トレント概要

4.まとめ

今回の調査で、計画区域内で遺構の分布が確認された。確認された遺構は、ほとんどが溝で遺物がほとんど遺物を含まないことから詳細は不明である。時代観は、他の遺跡から得られる情報等から弥生時代から中世に属するものと考えられる。

出土遺物も含めて希薄であることから、遺構の内容についても不明な点が多い。

これらのことから検討すると、遺構の分布は見られるもののひとつは条里区画内の溝でもうひとつは旧河道もしくは谷地形である可能性があり、他に住居址等の遺構が見つかっていないことからも計画区域全域について保護措置は不要であるとの結論に至った。



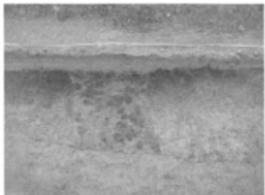
図版17 田村町字橋の坪地区試掘調査(1)



6トレンチ全景:南から



6トレンチSD群切り合い



6トレンチSD群切り合い



7トレンチ全景:南東から

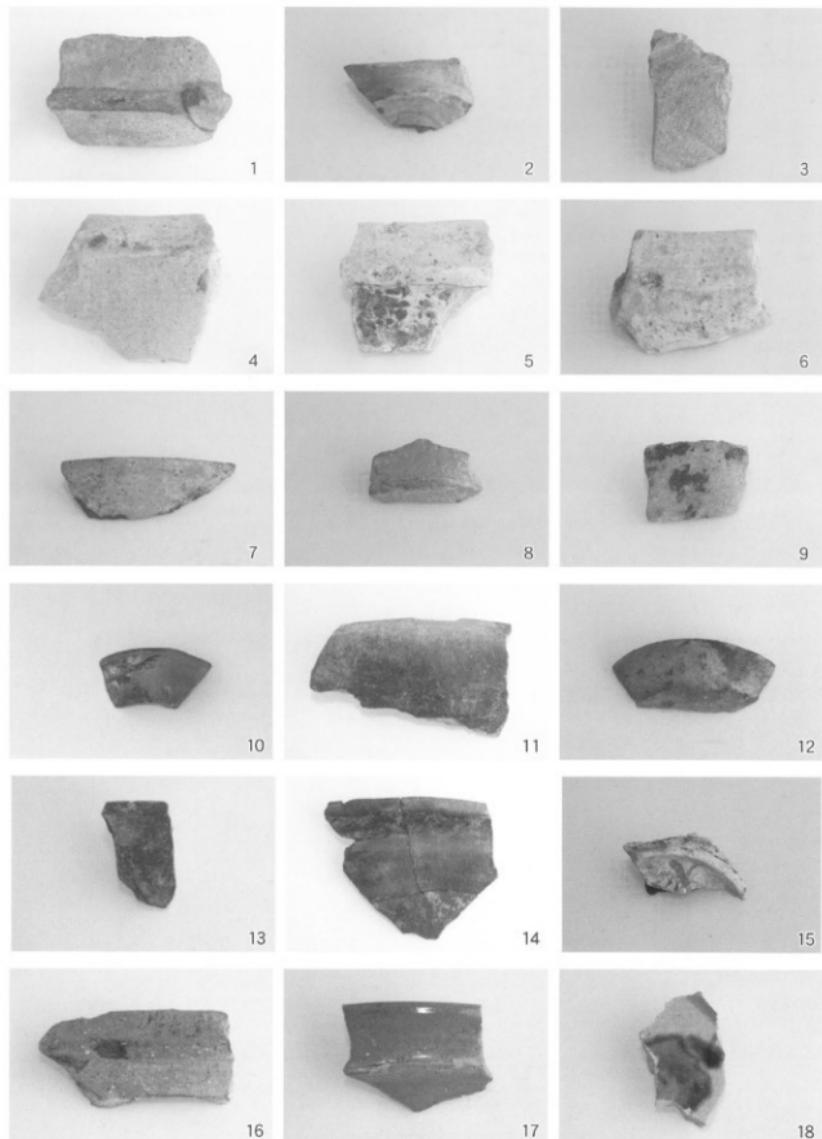


7トレンチSD01土層



7トレンチSD02土層

図版18 田村町字橋の坪地区試掘調査(2)



図版19 田村町字橋の坪地区試掘調査(3)

飯野町東二字中代地区

第XI章 飯野町東二字中代地区試掘調査

調査対象地 飯野町東二字中代甲 258-1、260-1、261-1、259-1、259-4
 調査期間 平成20年11月25日～11月27日
 調査面積 約76.0m²（調査対象地面積2213.56m²）

1. 立地と環境

計画区域は、丸龟平野中央より東寄りの飯野山西側部に位置する。周辺の遺跡分布状況は南300m地点に『西坂元内板遺跡（弥生・古墳・中世：集落跡）』が所在している。また、北北東500m付近の飯野山の麓には『飯野山西麓散布地（弥生～古代：散布地）』が広範囲に渡り広がっている。この中には、数基の古墳や箱式石棺も含まれている。古墳の所在が確認されていることから、飯野山南西部に古墳時代の集落遺跡が展開していると考えられるが、未だ発見されていない。

対象地の東側は、周辺の土地より一段高くなっている。西側の田と併せて東面が曲線を描いており、東の田からレベルも下がることから旧河道である事が考えられる。



第54図 調査地位置図

2. 調査に至る経緯と調査の経過

店舗建設事業に伴い、平成20年11月14日付け

で埋蔵文化財の有無に関する照会文書が提出された。それに伴い周辺の状況を考慮し推察すると、古墳集落の分布候補地のひとつにあげることができる。このことを基に検討した結果、試掘調査を実施することとした。11月19日に踏査を行った結果、耕作土中に土器の細片の散布を確認した。11月25日から3日間かけて調査を行った。結果、弥生時代の土器片を含む包含層が見られるが、明確な遺構が伴わず遺構密度も非常に薄いことから、県と協議し、計画区域全域について保護措置は不要と考えられる事を11月23日付けて事業者に回答した。

3. 調査の概要

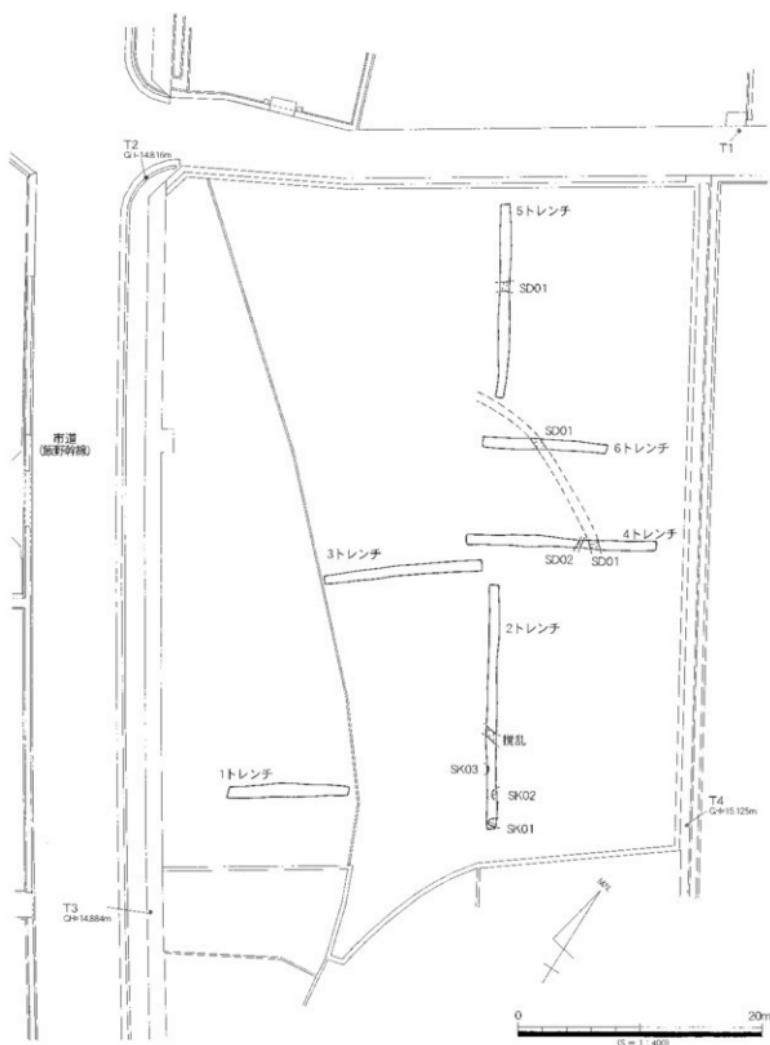
調査は、重機掘削によるトレンチ調査とした。以下、トレンチ毎の概要を報告する。

【1 トレンチ】

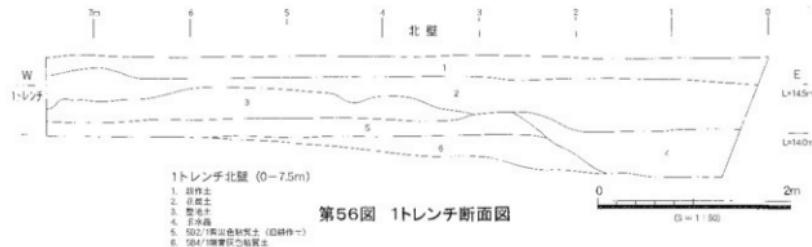
計画地西端の一段低い田に東西軸で設定した。聞き取り及び地形調査から旧河道域である可能性が非常に高いことがわかつっていたので、それを確認するためのトレンチとした。田の東端で、聞き取りで判明していた最近まで使用していた水路跡が確認され、水路の埋土から弥生土器片が出土した。水路の肩口のレベルに合うように旧水田の耕作土が認められる。旧耕作土の下面が現況から80cmほど下がっていることから、東からの連続する微高地は存在しないと考えられる。

【2 トレンチ】

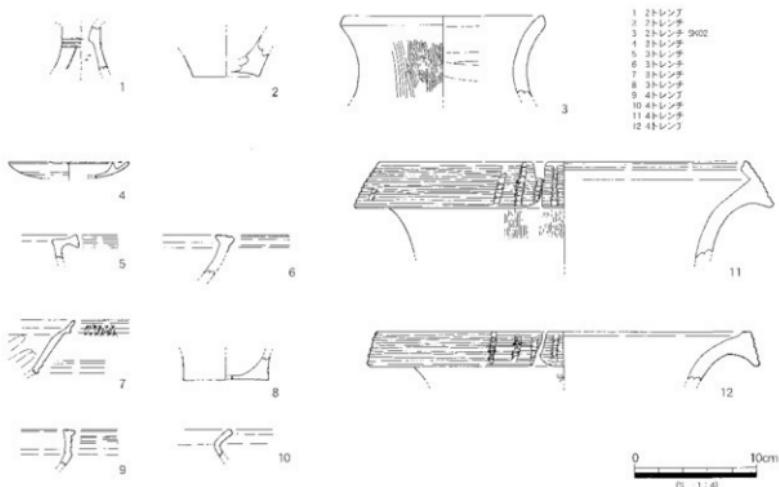
南端付近で3基の土坑を検出した。検出面は、耕作土下面より40cmほど下層で、その間は砂質の強い層が堆積する。床土直下の層は、整地土である可能性が高い。土坑の埋土は、灰黄色系で弥生土器や土師器を少量包含する。ベース層の上層には、弥生土器片を多く包含する（遺物1、2）が遺構は伴わない。遺物3はSKO2出土の弥生時代後期の壺である。



第55図 トレンチ配置図



第56図 1トレンチ断面図



第57図 出土遺物実測図

【3トレンチ】

東端から0～7m付近にかけては、耕作土下面より2.5cmほど下層で黒褐色の包含層が堆積し、遺物5～8が出土した。その上層でも弥生土器片は含まれるが、耕作土直下付近では土師器土鍋片や鉢片が出土する。遭構は認められない。7m地点から西は大きく掘削を受けているようで、溝状に下りトレンチ西端まで継続する。捲乱を受けているのか旧河道域の肩口であるのかの判断はできないが、2トレンチの遭構面と比べると検出レベルがかなり高いことから、捲乱である可能性が高い。ここから4の備前の灯明皿が出土している。

【4トレンチ】

中央で溝2条を検出する。遭構面は、2トレンチのものと対応するものと考えられる。遭構面の直上付近の層からは弥生土器の鉢9、甕10が出土した。形状から弥生時代中期に属するものと考えられる。溝からは遺物の出土が無く、詳細は不明である。9層からは貼付け突帯文の口縁を持つ弥生中期の壺11、12が出土した。

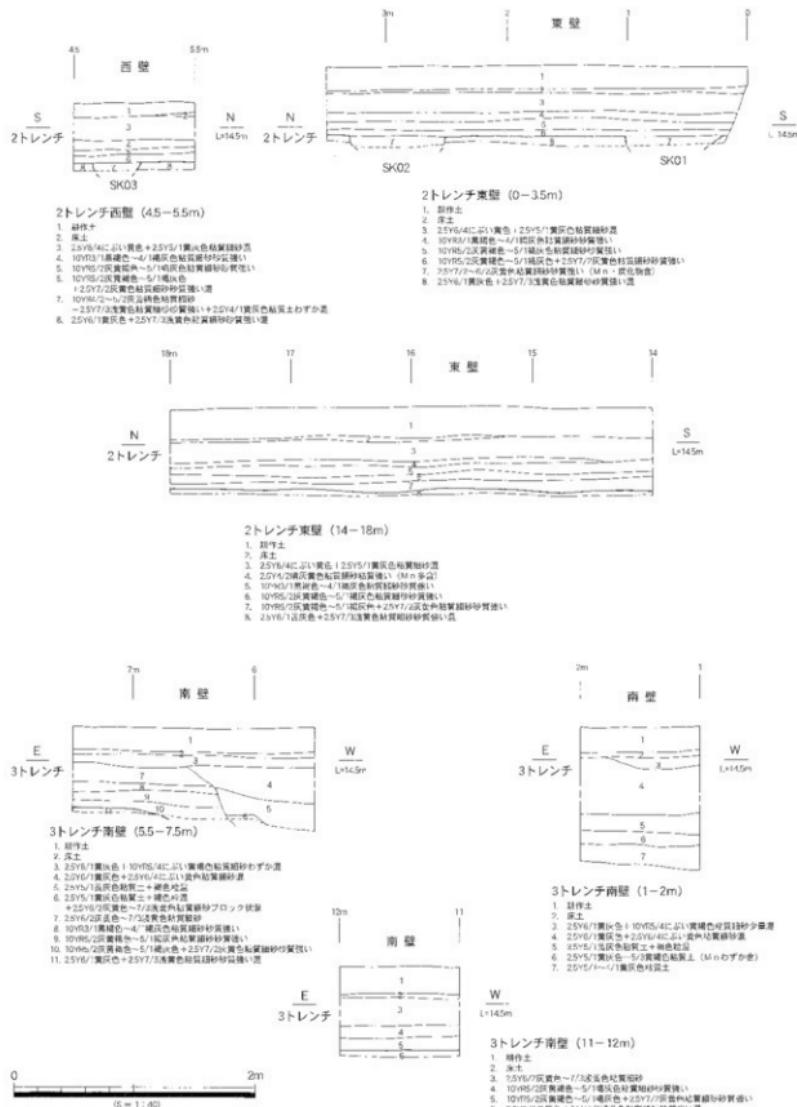
【5トレンチ】

東西軸の溝を検出した。検出面は、他のトレンチと対応すると思われる。埋土からの遺物は認められなかつたが、上面の層から弥生土器片が出土した。

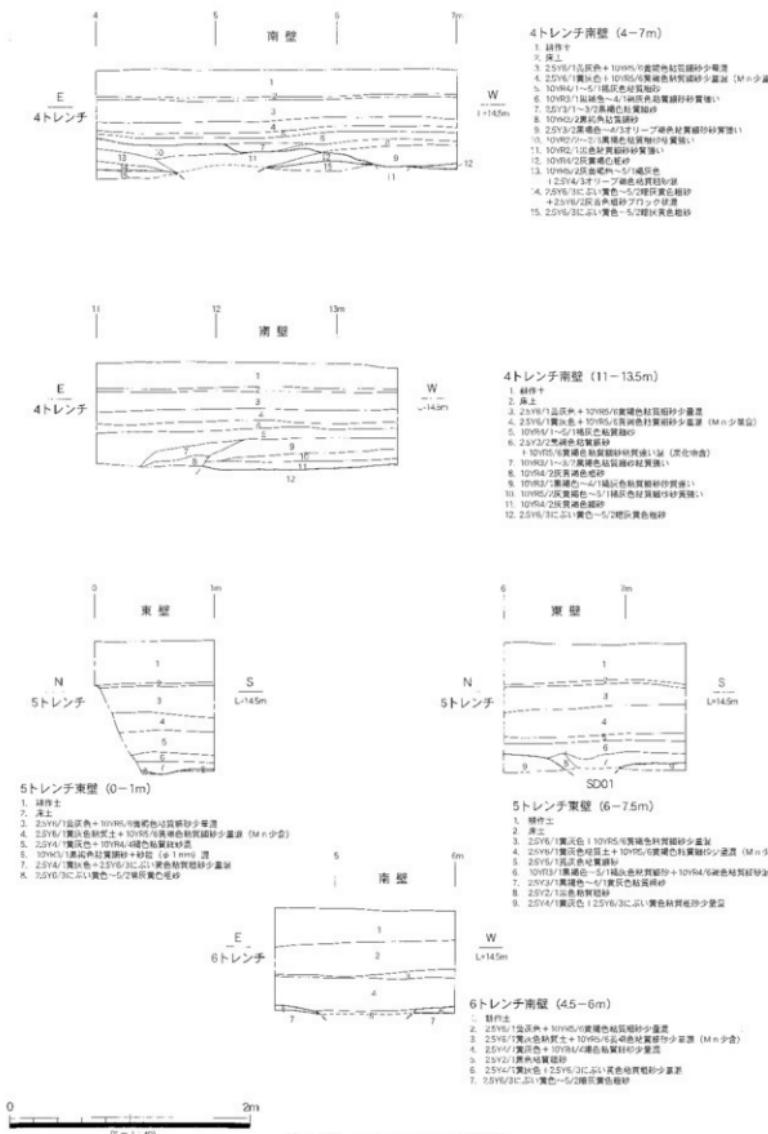
【6トレンチ】

4トレンチで検出した溝の方向を探るために4トレンチの北側に並行するよう、東西軸で設定した。トレ

ンチ中央で南東から北西に斜行する溝を検出した。検出面は、他のトレンチより僅かに高い。溝から遺物は検出されていない。



第58図 2・3トレンチ断面図



第59図 4~6トレンチ断面図

トレンチ名	延長	主な時代	主な遺構	出土遺物等
1 トレンチ	1.1m×9.9m	弥生	無し	弥生土器片
2 トレンチ	0.8m×20.0m	弥生～中世	土坑3	弥生土器片、サヌカイト片、土師器片、土師質土器片
3 トレンチ	0.9m×12.9m	弥生～中世	無し	弥生土器片、サヌカイト片、土師器片
4 トレンチ	0.9m×15.6m	弥生	溝2	弥生土器片
5 トレンチ	0.9m×15.8m	弥生	溝1	弥生土器片
6 トレンチ	0.9m×10.2m	弥生	溝1	弥生土器片

第10表 飯野町東二字中代地区試掘調査 トレンチ概要

以上調査区域内の東寄りの敷箇所で溝を検出することができた。南端付近では土坑群が検出されたが詳細は不明である。ほぼ全域において、遺物包含層が認められるが、検出される遺構の同様の埋土から弥生土器と土師器が出土することから、遺構としては中世に属するものと思われる。今回の調査で得られた資料が少ないことから詳細な内容を掴み取ることは不可能であった。

弥生土器の包含層には砂が多く混じっていることから、飯野山の表土が降雨等によって流れてきたものと思われる。飯野山山塊には、弥生時代中期の遺跡が展開していることから、この遺物が土砂と一緒に流れ込んだものと見た方がいいと思われる。

確認できた遺構の種別は、溝3条と土坑3基であり、全てにおいてその詳細を掴み取れる内容ではなかった。立地条件から考えると集落遺跡の一部であると思われる。

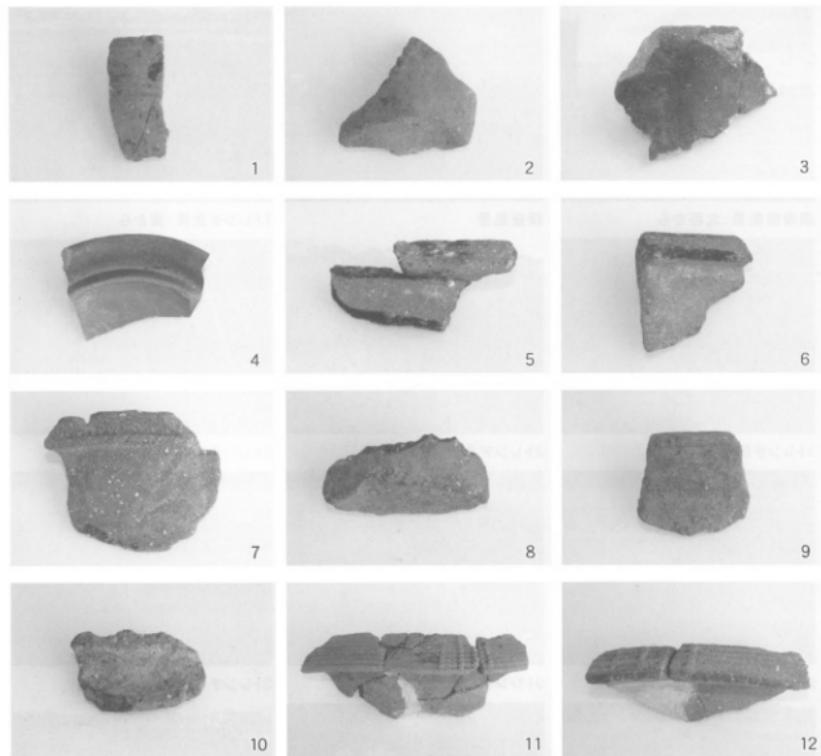
4. まとめ

今回の調査で、計画区域東半部で遺構を検出することができた。遺構面の上層には弥生時代の土器片を含む包含層が見られるが、明確な遺構が伴わない。同一面の遺構から土師器の出土も見られることから、後世の影響を受けているものである可能性も否定できない。

これらのことから検討した結果、計画区域の一部で遺構は検出されたがそれらの詳細をつかめる資料を得られるまでには至らず、遺構密度も非常に薄いことから、計画区域全域について保護措置は不要であるとの結論に至った。



図版20 飯野町東二字中代地区試掘調査(1)



図版21 飯野町東二字中代地区試掘調査(2)

綾歌町富熊字藏ノ内地区
【藏ノ内遺跡】

第XII章 綾歌町富熊字藏ノ内地区試掘調査

調査対象地 綾歌町富熊字藏ノ内 2500-1、2500-2、2500-3、2501、2502
 調査期間 平成20年12月16日～12月18日
 調査面積 約129m²（調査対象地面積4039m²）

1. 立地と環境

調査区域は、丸龜平野南部の東端付近に位置する。北には横山から西に派生する丘陵、南西には岡田台地がそれぞれ迫っており、平野としては若干絞り込まれている。周辺には、富士見坂団地のある丘陵部に『地神山古墳群（古墳：古墳）』が所在し、平野部では北側100m地点に『庄遺跡（弥生～中世：集落跡）』、南150m地点に『塔寺遺跡（不明：包含地）』が所在している。また、北の正八幡神社のある丘陵上には『宮前八幡神社古墳（古墳：古墳）』が、更に西に延びる尾根斜面部には『次見遺跡（弥生：集落跡）』が所在する。東方に聳える横山丘陵には、『横山経塚古墳群（古墳：古墳）』をはじめとする積石塚前方後円墳が多く築かれている。

これらのことから、この付近は弥生時代から古墳時代にかけて特に活発な地域であったことが読み取れる。

調査区域は、南の塔寺遺跡のある付近から緩やかに延びる微高地の先端部付近にあたる。



第60図 調査地位置図

2. 調査に至る経緯と調査の経過

平成20年12月1日付けで、事業者より分譲住宅開発に伴う埋蔵文化財の有無に関する照会が提出された。当該地は、立地としては非常に安定しており、北側の谷部を挟んだ北対岸部に庄遺跡が所在することからも同様の遺跡が所在する可能性は極めて高いと考えられる。このことを基に検討した結果、試掘調査を実施することとした。試掘調査は、重機掘削によるトレンチ調査とした。

調査の結果まとまって構造の分布が見られるエリアが認められたことから保護措置が必要であると考えられた。その他の範囲については、遺物包含層は見られるものの旧河道域であり遺構の分布が考えられないことから、今後の保護措置は不要であるとの結論に至った。この旨を平成21年1月19日付けで回答した。

3. 調査の概要

【1トレンチ】

耕作土下25cm程で須恵器壺片等を包含する層が見られるが、遺構は認められない。

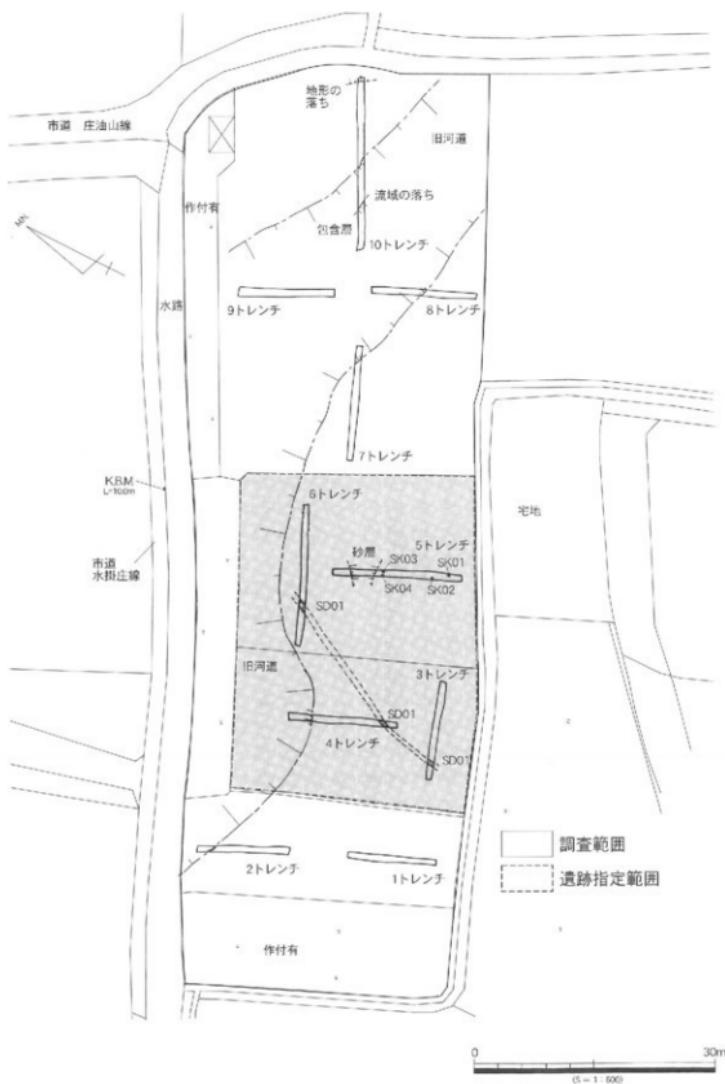
【2トレンチ】

トレンチ北端付近で擾乱を受ける箇所を確認する。包含層が認められ9層からは、遺物1が出土した。十瓶產の12C後半期の捏鉢である。遺構は検出されなかった。擾乱部と同じあたりでベース層が北に下る。北の田が一段低く谷地形の肩部分と考えられる。2、3は3層から出土した。陶器の鍋が出土している。

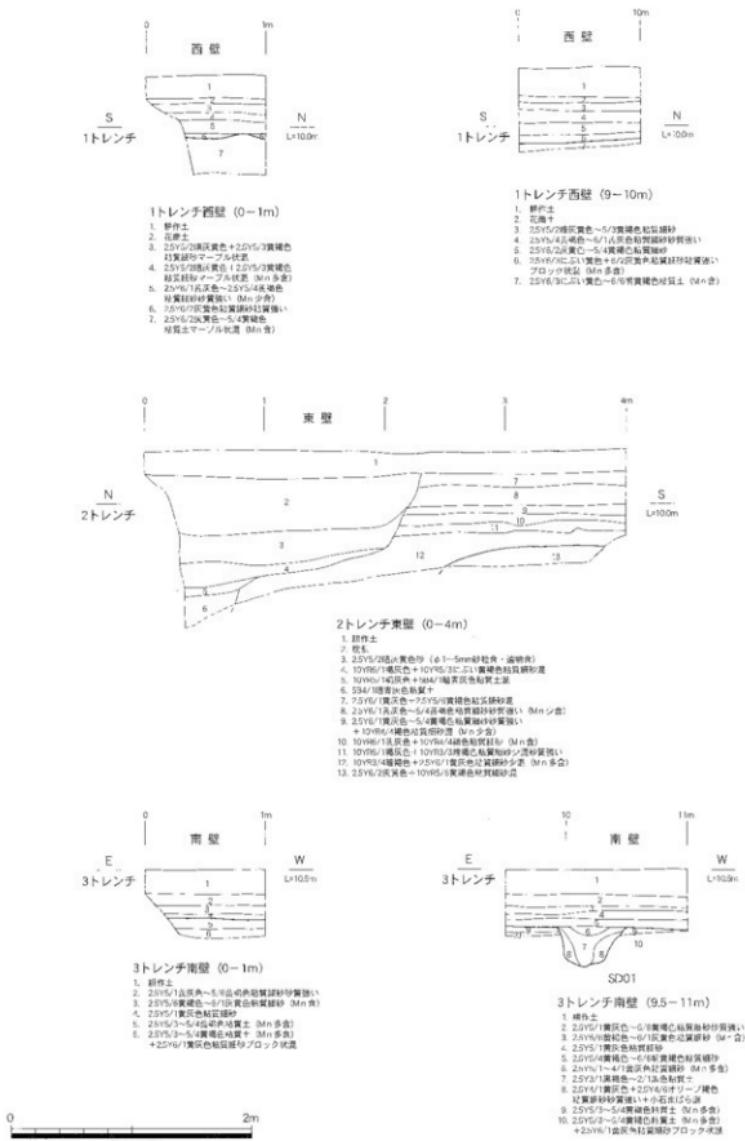
【3トレンチ】

西端付近でトレンチに対して斜行する溝を検出するが遺物の包含は認められない。包含層からは、5土師器の小皿、6内側を炭化処理した黒色土器碗、7、8底部などが出土する。弥生土器の壺底部4や、須恵器

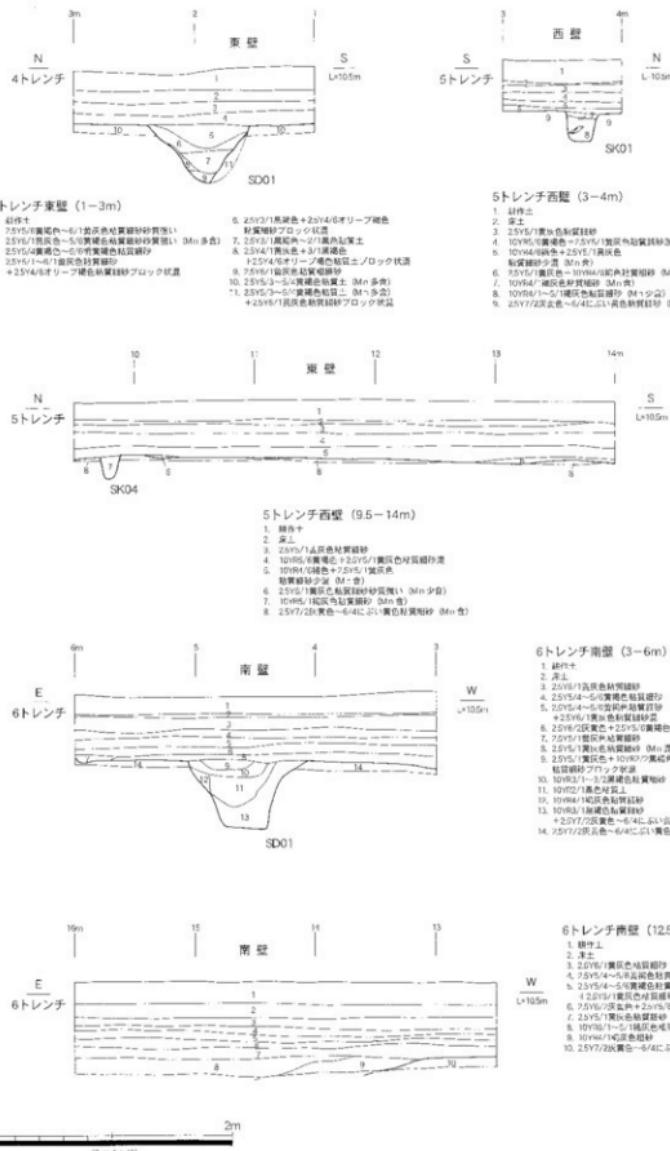
の口縁片、端部に炭化処理が見える。他に陶器の壺10なども見られる。出土量は比較的多い。



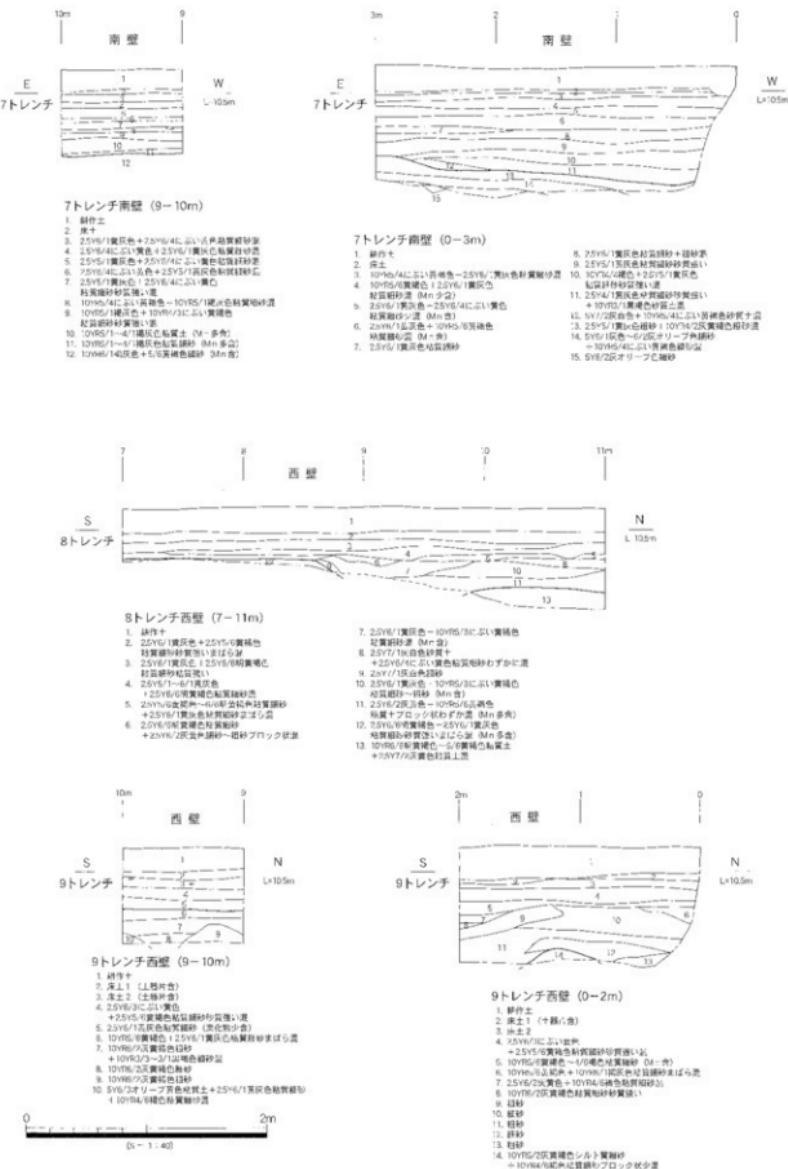
第61図 トレンチ配置図



第62図 1~3トレンチ断面図



第63図 4~6トレンチ断面図



第64図 7~9トレンチ断面図

【4 レンチ】

南端付近でレンチ軸に対して斜行する溝を検出したが、遺物の包含は認められない。3 レンチの溝と同一の溝と考えられる。包含層からは、少量の土器片が出土する。レンチ北部で北に下る落ちを検出する。2 レンチの谷地形肩部分と対応すると考えられる。

【5 レンチ】

包含層から遺物 1 1 ~ 1 3 の土師器の皿・小皿などが出土する。レンチ中央部付近から南端部にかけて土坑を検出した。SK 0 2 からは、1 4 小皿、1 5 壺が出土した。この壺は 1 3 ~ 1 4 C の所産と考えられる。

レンチ北部では、東西軸の砂層の堆積部が認められるが、遺構であるかどうかは不明である。

【6 レンチ】

西部でレンチに対して斜行する溝を検出した。3・4 レンチの溝と同一であると考えられる。包含層からは、遺物 1 6、1 7 の土師質の碗が、9 層からは 1 8 の黒色土器底部が出土した。1 8 は 1 2 C 代のものとを考えられる。

【7 レンチ】

東端付近で北東に下る落ち部分を検出した。2・4 レンチの谷地形肩部分に対応するものと考えられる。包含層 9 層は東にいくと 1 0 層に変わり、土師質の甕 1 9、小皿 2 0、底部 2 1 などが出土した。遺構は認められない。

【8 レンチ】

中央部で北東に下る落ち部分を検出。2・4・7 レンチの谷地形肩部分に対応するものと考えられる。包含層からは、土器片が多く出土した。遺物 2 2 は須恵器の碗、2 3 は土師質の底部である。

【9 レンチ】

4 層からは、2 4 須恵器の台付壺の底部、2 5 瓦器碗片が出土した。ほぼ全体に砂堆積が見られる。砂層中から鉄刀と思われる鉄製品が出土したが保存状態が悪く崩壊した。

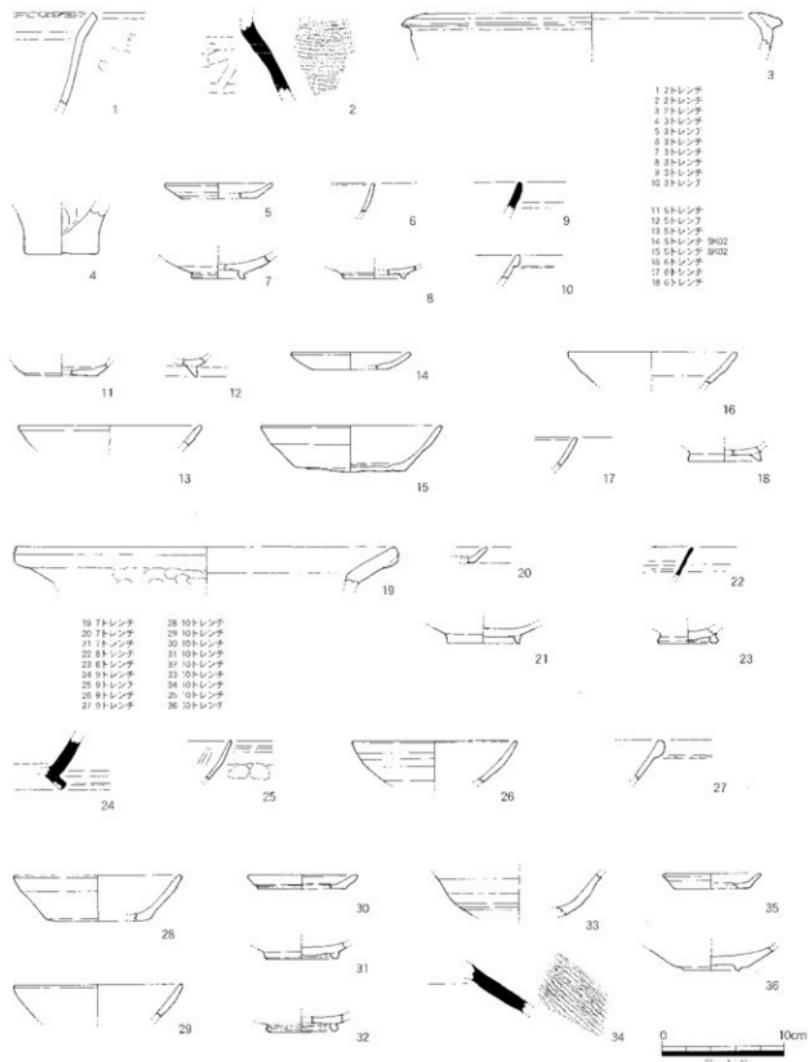
他に遺物 2 6、1 2 C 前半と考えられる黒色土器碗や 2 7 の白磁の口縁片が出土した。

【10 レンチ】

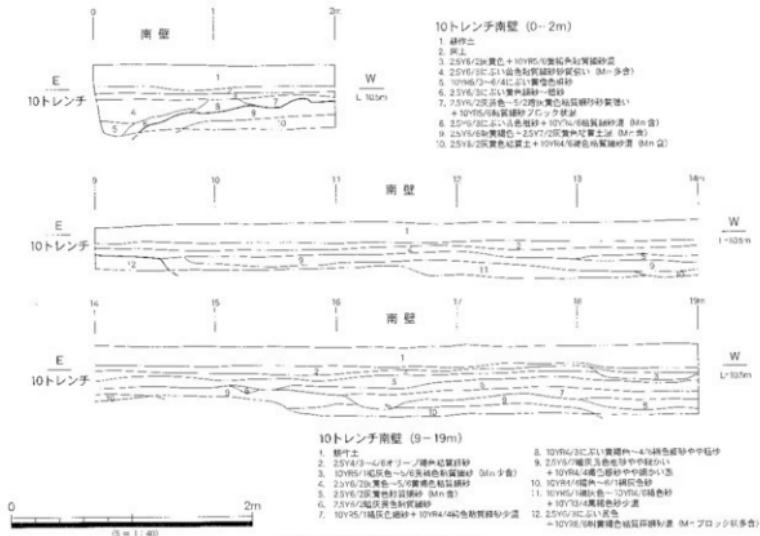
レンチ東端で東に落ちる地形を確認した。レンチ中央では、南西に落ちる地形が認められ、2・4・7・8 レンチで確認した谷地形の肩の対岸にあたるものと考えられる。包含層から遺物 2 8 ~ 3 4 の土器が出土した。2 8、2 9 は土師質の碗である。摩滅が著しく調整は不明であった。3 0、3 5 は土師質の小皿、3 1、3 2 は底部である。3 3 は瓦質の碗の胸部である。外側に屈曲して開いていく。3 4 は須恵器の胴部片、内外に自然釉が残る。3 6 は陶器の底部である。外側は無釉で、内側にはオリーブ灰色の釉薬がかかり、見込みには砂目が残る。

レンチ名	延長	主な時代	主な遺構	出土遺物等
1 レンチ	0.9m × 11.0m	不明	無し	土師質土器片、陶器片、須恵器片
2 レンチ	0.8m × 11.6m	不明	旧河道	土師器片、土師質土器片 サヌカイト片、陶器片
3 レンチ	1.0m × 12.1m	不明	溝 1	七師質土器片、須恵器片 土師器片、陶器片、弥生土器片
4 レンチ	0.9m × 13.4m	不明	溝 1、旧河道	土師質土器片、陶器片
5 レンチ	0.9m × 16.0m	13~14 世紀	土坑 4	土師質土器片、土師器片
6 レンチ	0.8m × 17.3m	12 世紀	溝 1	須恵器片、黒色土器片 土師器片、土師質土器片
7 レンチ	1.0m × 14.0m	不明	旧河道	土師器片、土師質土器片、サヌカイト片
8 レンチ	0.8m × 12.9m	不明	旧河道	須恵器片、瓦器片、黒色土器片 土師器片、土師質土器片、磁器片
9 レンチ	1.0m × 11.9m	不明	旧河道	土師質土器片、瓦器片、陶器片、鉄製品
10 レンチ	1.0m × 21.2m	不明	旧河道	土師質土器片、須恵器片、サヌカイト片 磁器片、黒色土器片、土師器片、瓦器片

第11表 綾歌町富熊字藏ノ内地区試掘調査 レンチ概要



第65図 出土遺物実測図



第66図 10トレンチ断面図

以上、計画区域内に10箇所の試掘トレンチを設定して調査を行った。

結果、調査区域内の中央部からやや西寄りにかけて密度は薄いが遺構の分布を確認することができた。確認できた遺構は、南西から北東に延びる溝1条と溝の東側に展開する土坑群である。土坑群については、一部遺物を包含し、1~3~14世紀に比定できるものの柱穴であるかどうかの確認はとれなかった。

調査区域の南東端から北西にかけては、現在の地形から想像できるが谷地形が延びていることが確認できた。旧河道として機能していたものと考えられる。地形の落ちは、計画区域の東端部でも確認できたことから計画区域南東端付近で分岐する旧河道が北方にも延びていたものと考えられる。

遺構の分布は、旧河道の南側で確認することができる。

遺構が認められない部分でも、包含層は認められるので、現地形から考えると、計画区域の南部にはもう少し密度の濃い遺跡が展開していると考えられる。

調査後、トレンチは埋め戻し原状に復した

4.まとめ

今回の調査で、計画区域内において一部で遺構の分布が見られることがわかった。遺物を包含する層はほぼ全域で認められるが、遺構を伴う区域は一部に限定される。

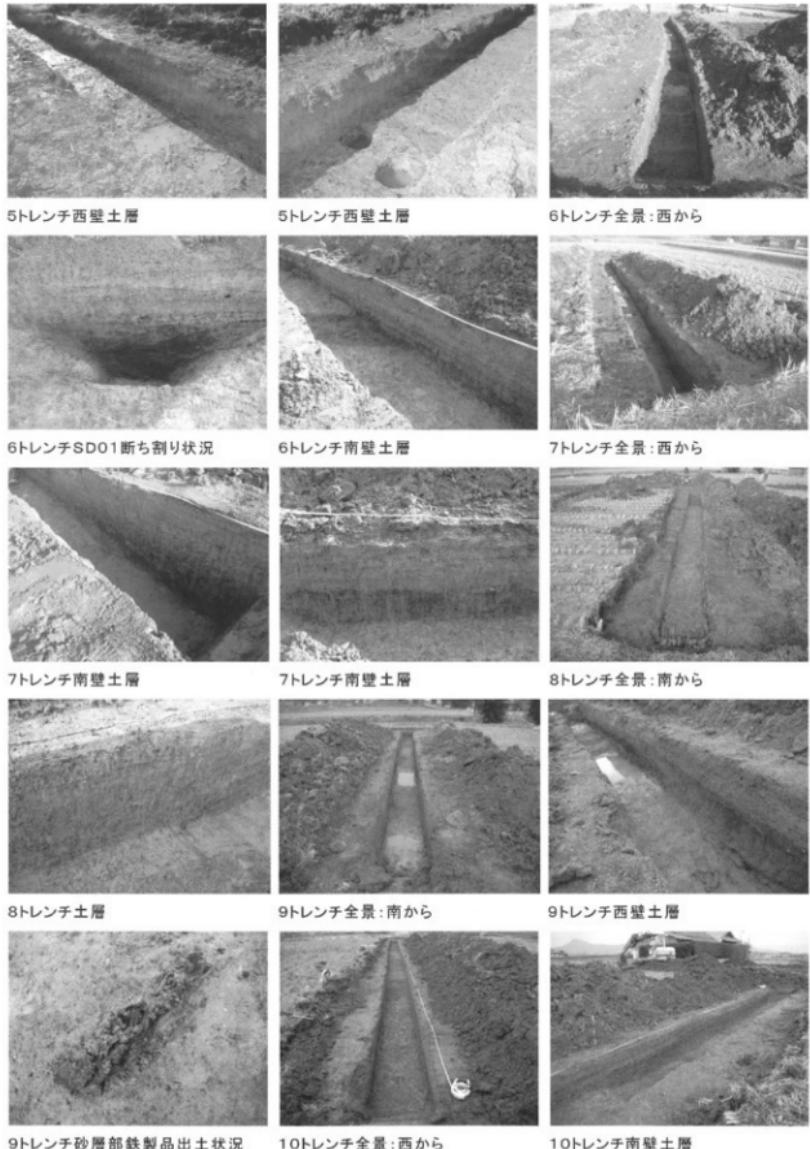
計画区域の南東端から北西方向にかけては、旧河道が延びており遺構の分布は見られない。計画区域の西部は、一部野菜の作付けにより未調査の部分があるが1・2トレンチの結果からは遺構の展開は考え難い。

これらのことから、別図に示した範囲についてはまとまって遺構の分布が見られることから保護措置が必要であるとの結論に至った。その他の範囲については、遺物包含層は見られるものの旧河道域であり遺構の分布が考えられないことから今後の保護措置は不要とした。

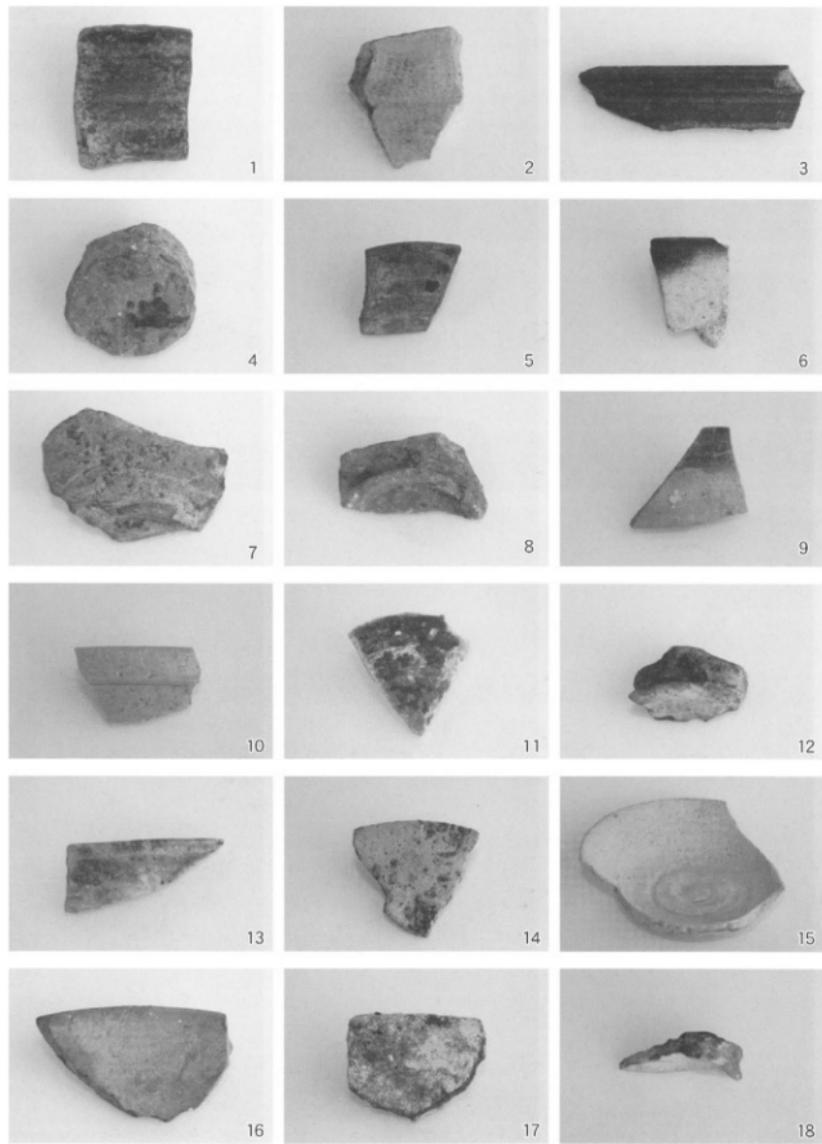
保護措置を必要とした範囲については、「蔵ノ内地遺跡」として新たに周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されることとなつた。



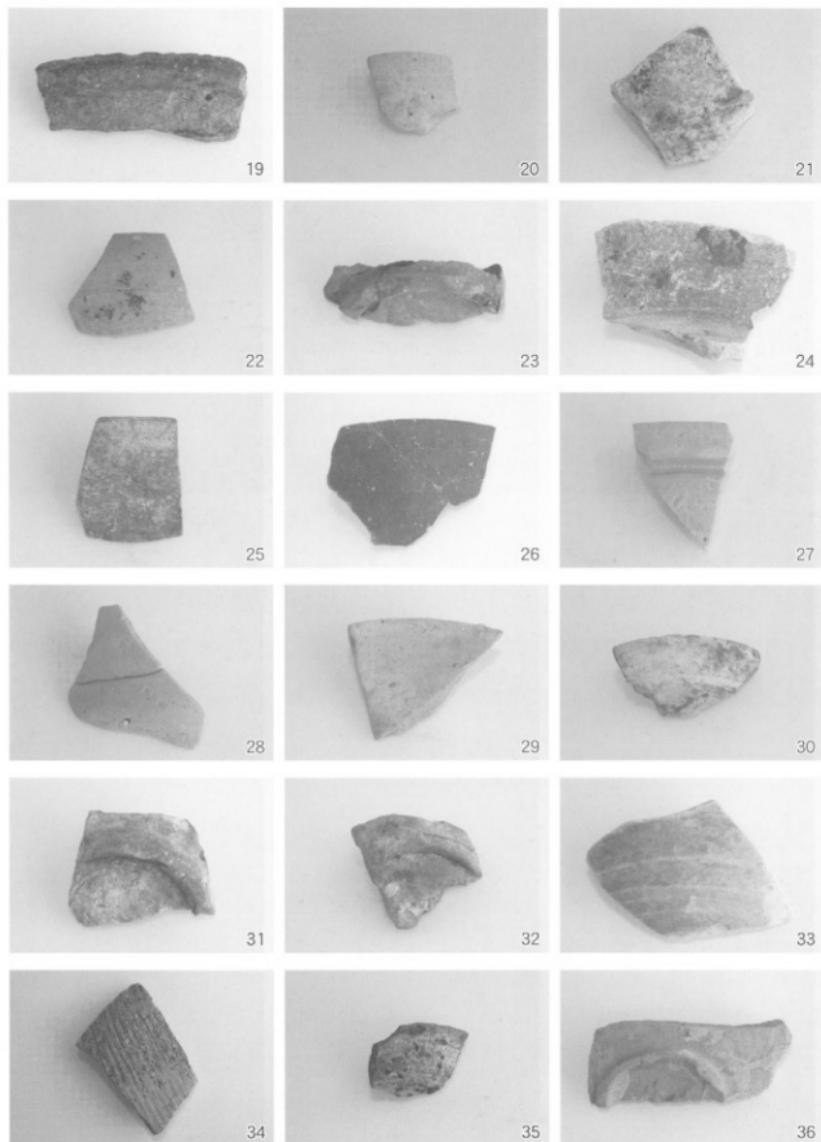
図版22 綾歌町富熊字蔵ノ内地区試掘調査(1)



図版23 綾歌町富熊字藏ノ内地区試掘調査(2)



図版24 綾歌町富熊字藏ノ内地区試掘調査(3)



図版25 綾歌町富熊字藏ノ内地区試掘調査(4)

綾歌町富熊字沖地区

【行末西遺跡】

第XIII章 綾歌町富熊字沖地区試掘調査

調査対象地 綾歌町富熊字沖 858-1
 調査期間 平成21年1月19日～1月21日
 調査面積 約105.5m² (調査対象地面積2825m²)

1. 立地と環境

調査区域は、丸亀平野南東部に位置する。対象地の南西部は岡田台地(洪積台地)となっている。東の羽床盆地から続く平野の絞り込まれた地域である。

周辺の遺跡分布状況をみると、対象地南東には『行末西遺跡(弥生・古墳：集落跡)』、『行末遺跡(弥生：集落跡)』が所在する。これらは遺構の密度も濃く、拠点集落として栄えていたものと考えられる。

遺跡の分布区域としては、中大東川の右岸地域と考えられている。

2. 調査に至る経緯と調査の経過

平成21年1月7日付けで、宅地分譲建設に伴い埋蔵文化財に関する有無の照会が提出された。

調査地は、行末西遺跡の隣地でもあることから遺跡の分布可能性が相当高いと考えられる。このことを基に検討した結果、試掘調査を実施することとした。

1月9日立入り申請がなされ、1月19日～21日で重機掘削による調査を実施した。

調査の結果、計画地全域において遺跡が発見された。これにより、保護措置が必要である旨の回答を2月5日付けで提出した。

3. 調査の概要

【1トレンチ】

トレンチ東端付近で溝状落ちSD01を検出した。下層部から大量の水が湧き出すことにより底部までの確認是不可能であった。溝か旧河道の判定はできなかった。SD01の西側で南北軸の溝SD02を検出し、トレンチの西半部では土坑群を検出するが詳細は不明。遺物1～4は包含層から出土した。弥生時代後期の土器と考えられる。1は弥生の甕、2、3は鉢である。内面にハケ目後叩きの調整がみられる。4は摩訶が著しいが、段を持つ高环口縁と思われる。5はSK01から出土した古代の須恵器質の平瓦である。凸面は格子叩き、凹面は布目の後ナデ消しているのがわかる。6はSK02より出土した口径約35.4cmを測る土師質の土鍋である。焰烙タイプのもので薄い器壁を有し、中世の所産と推定される。SD01からは7の弥生高脚部が出土した。

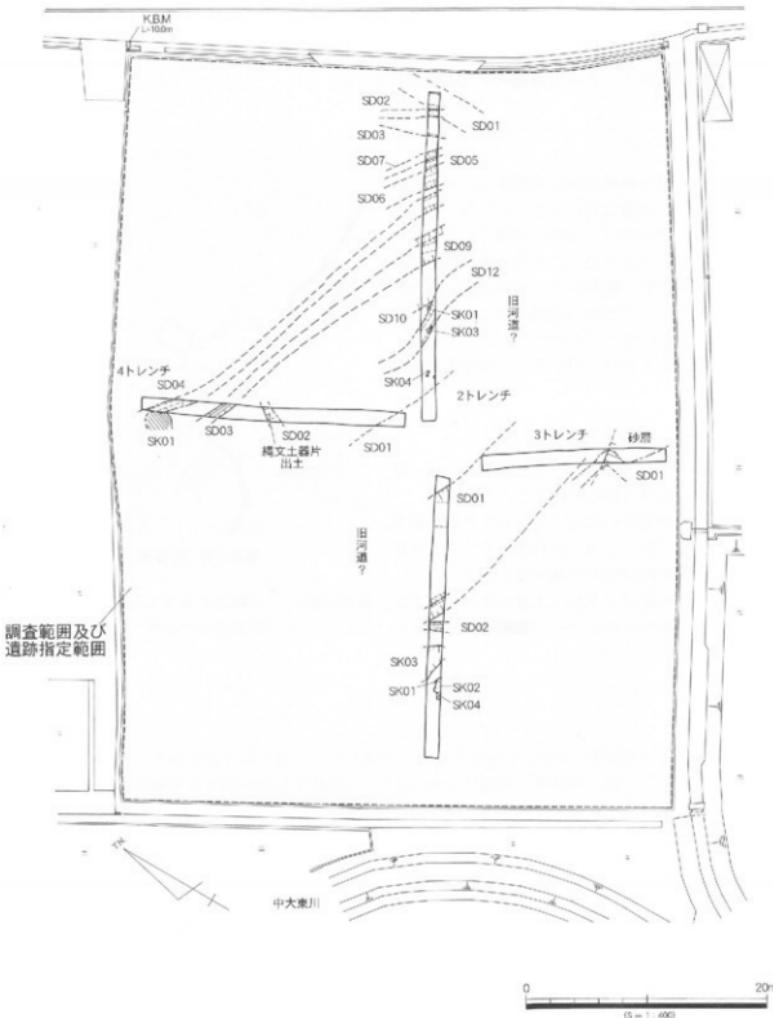
【2トレンチ】

耕作土直下で土坑群を検出した。埋土の違いから中世及び古墳～古代頃に分類できる。一部の土坑からは土師器片が出土した。全体を深く掘り下げるに、多くの溝が検出された。断面観察から9条以上になると考えられる。トレンチ西端部付近は大きく下がっており、旧河道である可能性がある。溝群のベース層から繩文土器片が出土した。遺物8は10層より出土した。弥生土器の底部である。包含層からは土師質の9平高台の底部と10碗が出土した。SK01からは11軟質の須恵器楕が出土した。SD05の下層から12弥生

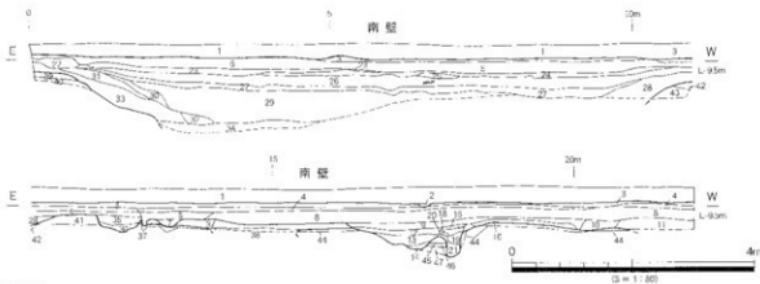


第67図 調査地位置図

市道 西行末木村線



第68図 トレンチ配置図

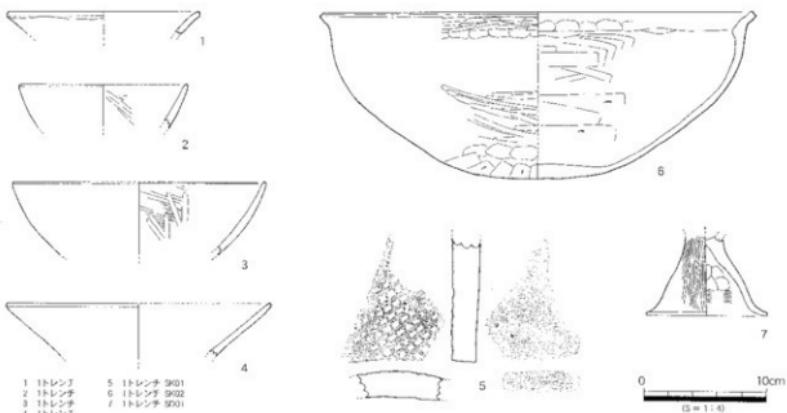


1トレンチ南壁

- 1 植生土
- 2 黒灰色～褐色に近い黄褐色粘土質砂
- 3 2SY5/2(くろいろ)更生～5(暗灰黄色粘土質砂)
- 4 10YR5/2(黒灰色粘土質砂)
- 5 2SY5/2(暗灰黄色+10YR5/2)に近い黄褐色砂質粘土 (M+含)
- 6 10YR5/2(暗灰黄色+10YR5/2)に近い黄褐色砂質粘土
- 7 2SY5/2(暗灰黄色+4/4)褐色粘土質砂
- 8 10YR4/2(暗黄褐色+4/4)褐色粘土質砂
- 9 10YR5/2(4/4)褐色粘土質砂 (近赤色含)
- 10 10YR5/2(4/4)褐色粘土質砂 (赤色含)
- 11 10YR5/2(4/4)褐色粘土質砂 (赤色含)
- 12 10YR4/2(暗灰色粘土質砂) 黄褐色
- 13 10YR4/2(暗灰色粘土質砂) 黄褐色
- 14 10YR5/2(暗灰黄色+10YR5/2) 黄褐色粘土質砂
- 15 10YR5/2(暗灰色粘土質砂) 黄褐色

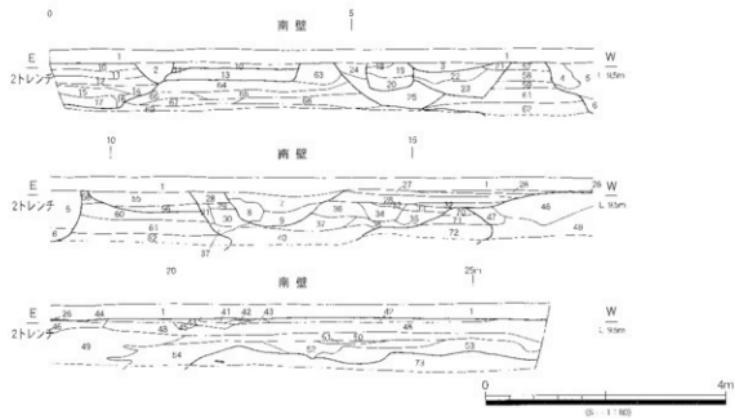
- 16 10YR5/2(暗灰黄色+5/1)暗灰黄色粘土質砂質混在層
- 17 10YR5/2(暗灰黄色粘土質砂) ブロック状
- 18 10YR5/2(暗灰黄色粘土質砂) 黄褐色
- 19 10YR5/2(暗灰黄色) 黄褐色粘土質砂
- 20 10YR4/2(暗灰色粘土質砂)
- 21 10YR5/2(暗灰黄色+10YR5/2) 黄褐色ブロック状に混入・斑状灰白色粘土質砂 (砂多く含)
- 22 10YR5/2(暗灰黄色+2SY5/2) 黄褐色
- 23 10YR5/2(暗灰黄色) 黄褐色粘土質砂 (砂多く含)
- 24 10YR5/2(暗灰黄色) 黄褐色粘土質砂 (砂多く含)
- 25 10YR5/2(暗灰黄色) 黄褐色粘土質砂
- 26 10YR5/2(暗灰黄色+4/4)に近い黄褐色粘土質砂 (φ1~5mm小石混)
- 27 10YR5/2(暗灰黄色) 黃褐色シルト
- 28 10YR5/2(暗灰黄色) 黄褐色シルト (砂多く含)
- 29 10YR5/2(暗灰黄色+4/4) 黄褐色粘土質シルト (生糞含)
- 30 10YR4/2(暗灰黄色) 黄褐色粘土質シルト (φ1~5mm小石混)
- 31 10YR5/2(暗灰黄色) 黄褐色粘土質 (粗砂混)
- 32 2SY5/2(暗灰黄色) 黄褐色
- 33 10YR5/2(暗灰黄色) 黄褐色粘土質シルト (φ1~5mm小石混)
- 34 10YR5/2(暗灰黄色) 黄褐色粘土質シルト (粗砂混)
- 35 10YR5/2(暗灰黄色) 黄褐色粘土質シルト (粗砂混)
- 36 10YR5/2(暗灰黄色) 黄褐色粘土質シルト (粗砂混)
- 37 10YR5/2(暗灰黄色) 黄褐色粘土質シルト (粗砂混)
- 38 10YR5/2(暗灰黄色) 黄褐色粘土質シルト (粗砂混)
- 39 2SY5/2(暗灰黄色) (6/4)に近い黄褐色質
- 40 10YR5/2(暗灰黄色) 黄褐色粘土質シルト (粗砂混)
- 41 10YR5/2(暗灰黄色) 黄褐色粘土質シルト (粗砂混)
- 42 10YR5/2(暗灰黄色+2SY5/2) 黄褐色粘土質砂 (粗砂混)
- 43 10YR5/2(暗灰黄色) 黄褐色粘土質砂
- 44 10YR5/2(暗灰黄色) 黄褐色粘土質砂
- 45 7.5m87/1(暗灰黄色+4/4) 黄褐色シルト 黄褐色
- 46 7.5m87/1(暗灰黄色) 黄褐色
- 47 7.5m87/1(暗灰黄色) 黄褐色

第69図 1トレンチ断面図



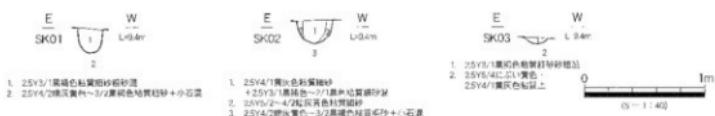
第70図 1トレンチ出土遺物実測図

土器壺の底部が出土した。底部底に板目痕が残る。1 3はSD 1 2から出土した土師質の底部である。1 4は粘土岩製の石斧、刃部は使用痕が見える。柄の部分に砥面を持つことから砥石からの転用である可能性が考えられる。

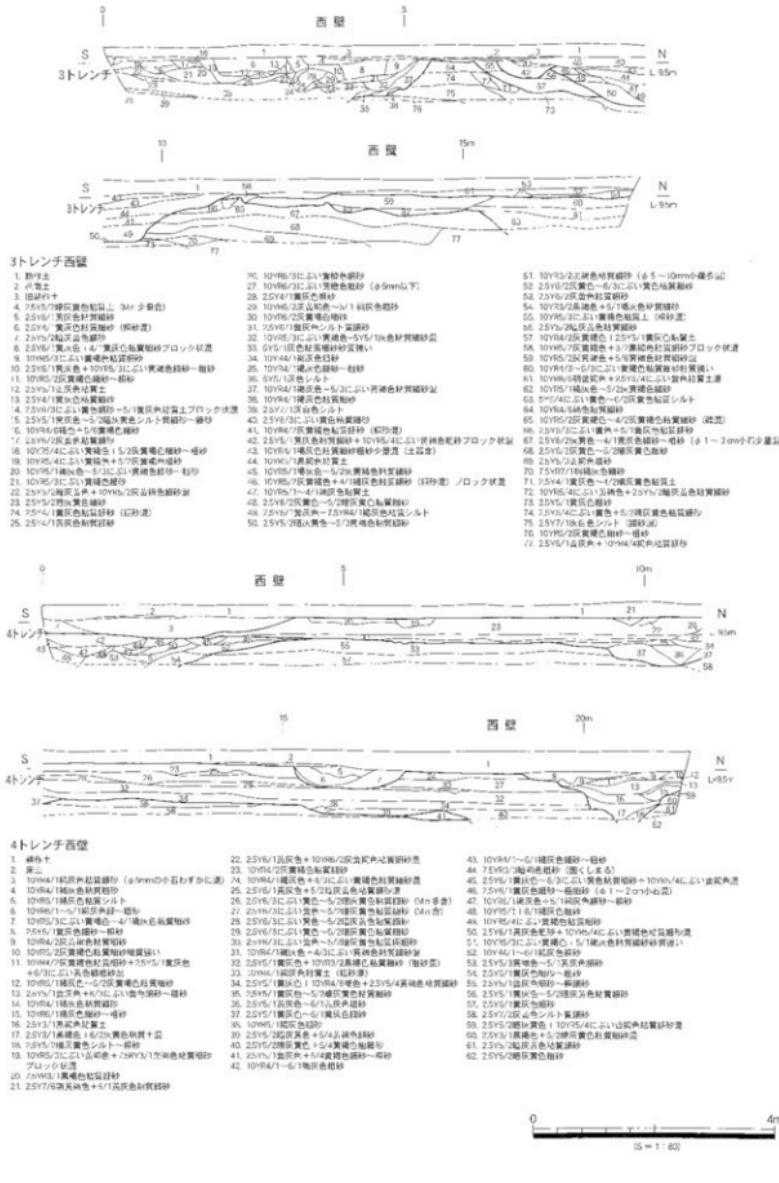


2トレンチ南壁

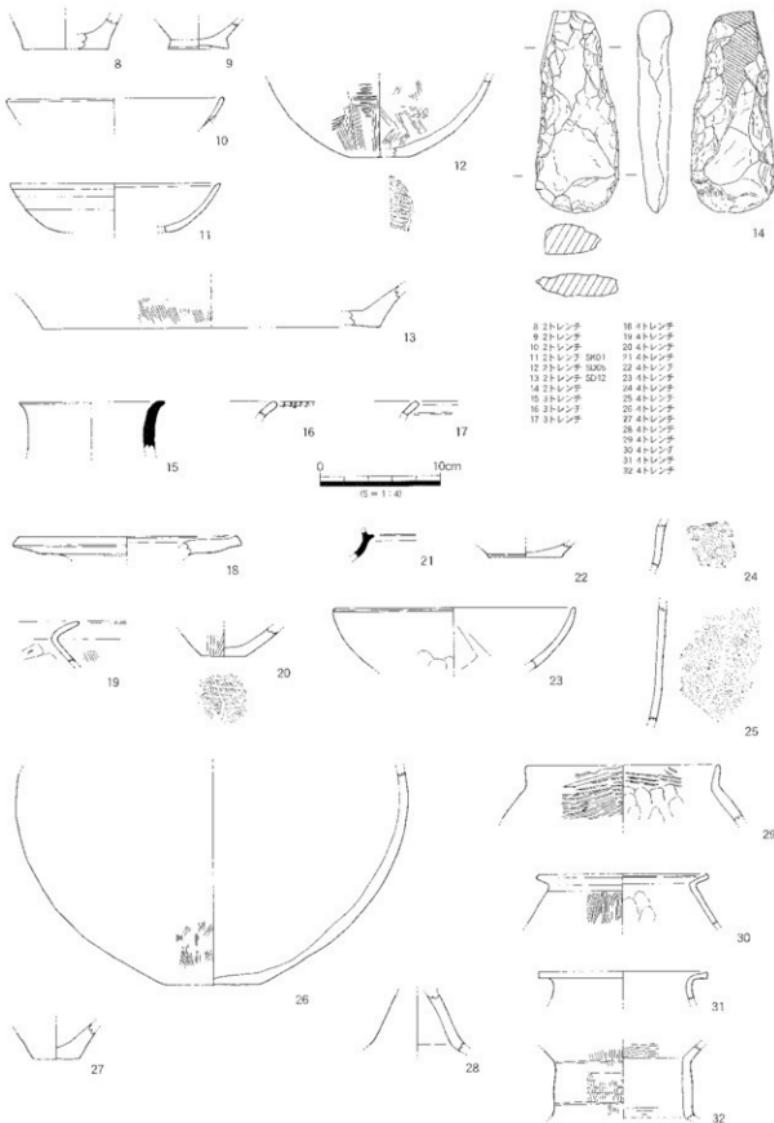
1. 砂土
2. 10YR5/3(赤)基盤色～7/1黒色付黄褐色
3. 10YR5/3(赤)基盤色～7/1黒色付黄褐色
4. 10YR4/4(赤)基盤色～7/1黒色付黄褐色
5. 25Y6/7(黒)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶～茶褐色
6. 10YR4/4(赤)基盤色～25Y7/1(黒)～10YR5/7(赤)黒色付茶～茶褐色
7. 10YR5/4(赤)基盤色～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶～茶褐色
8. 25Y6/7(黒)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶～茶褐色
9. 10YR5/1(赤)基盤色～25Y7/1(黒)黒色付茶
10. 10YR5/4(赤)基盤色～25Y6/7(黒)黒色付茶
11. 25Y6/7(黒)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
12. 25Y6/7(黒)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
13. 10YR5/2(黒)～5/2(黒)黄褐色～茶褐色～沙褐色
14. 25Y6/7(黒)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
15. 10YR4/2(黒)黒色付茶
16. 10YR5/2(黒)黒色付茶
17. 10YR5/4(赤)基盤色～25Y6/7(黒)基盤色シルト～黒色
18. 10YR4/2(黒)黒色付茶
19. 10YR5/2(黒)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
20. 25Y6/7(黒)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
21. 10YR5/2(黒)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
22. 10YR5/3(赤)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
23. 10YR5/3(赤)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
+SYN1(赤)黒色付茶
24. 10YR5/1(黒)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
25. 7/8Y4/1(黒)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
26. 25Y5/2(赤)黄褐色～茶褐色～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
27. 10YR5/2(黒)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
28. 25Y5/2(赤)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
29. 25Y5/2(赤)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
30. 25Y5/2(赤)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
31. 25Y6/7(黒)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
32. 25Y6/7(黒)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
33. 25Y5/2(赤)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
34. 25Y5/2(赤)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
35. 25Y5/2(赤)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
36. 25Y5/2(赤)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
37. 25Y5/2(赤)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
38. 25Y5/2(赤)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
39. 25Y5/2(赤)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
40. 25Y5/2(赤)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
41. 10YR5/2(黒)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
42. 10YR5/2(黒)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
43. 10YR5/2(黒)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
44. 10YR5/2(黒)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
45. 25Y5/2(赤)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
46. 25Y5/2(赤)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
47. 25Y5/2(赤)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
48. 25Y5/2(赤)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
49. 25Y7/1(赤)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
50. 25Y6/7(黒)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
51. 25Y5/2(赤)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
52. 25Y5/2(赤)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
53. 25Y5/2(赤)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
54. 10YR5/2(黒)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
55. 10YR5/2(黒)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
56. 25Y5/2(赤)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
57. 10YR5/2(黒)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
58. 25Y5/2(赤)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
59. 25Y7/1(赤)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
60. 10YR5/2(黒)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
61. 10YR5/2(黒)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
62. 10YR5/4(赤)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
63. 10YR5/2(赤)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
64. 10YR5/2(赤)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
65. 10YR5/2(黒)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
66. 25Y6/7(黒)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
67. 25Y7/1(赤)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
68. 25Y5/2(赤)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
69. 25Y5/2(赤)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
70. 25Y6/7(黒)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
71. 25Y5/2(赤)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶
72. 25Y5/2(赤)～7/1(黒)～10YR5/3(赤)黒色付茶



第71図 2トレンチ SK01～03断面図



第72図 3・4トレンチ断面図



第73図 2~4トレンチ出土遺物実測図

【3トレンチ】

南半部で溝を検出するが、蛇行しているようである。トレンチ中央部から北端までは旧河道と見られる。遺物15は耕作土直下から出土した須恵器の壺口縁である。16、17は包含層出土の弥生土器窓の口縁片である。16の口縁端部には刻み目が施される。

【4トレンチ】

北端付近で2条、中央部で1条、南端部で1条の溝を検出した。埋土からは弥生時代後期の土器片が出土する。遺物18～23は包含層出土の土器である。18～20は弥生土器の壺、甕、底部である。甕は頭部から緩やかに屈曲する。21は須恵器の壺身、受け部はほぼ水平に胴部はやや内湾する。22は土師質の底部である。摩滅が著しいがヘラ切りされていることがわかる。23は31層から出土した弥生土器の鉢である。胴部は内湾し、端部に主る。ベース層上層では弥生時代前期、下層部では縄文時代晚期の深鉢31、32が出土する。内外面の調整は条痕が施されている。縄文土器の出土地点のひとつは土坑状の落ちが認められたことから、付近に遺構が展開する可能性が高い。

トレンチ外の北端西側に土器溜りを検出した。上層と下層に堆積し26～28は上層の土器である。

26、27は弥生土器の底部である。23は底径7.6cmを測り、卵型の体部を持つ。摩滅のため詳細は不明であるが外面にハケ目が残る。28は高杯の脚部である。端部は残っておらず内面は稜線を持って据に広がっていく。

29～31は甕である。29は口縁部の外面まで叩き痕が残る。30はハケ目、ナデ調整が見られ、口縁端部は擒み上げている。雲母を多く含む特徴的な胎土である。31は緩やかに外反し口縁端部内面をナデ調整する。32は器台か壺の頭部と思われる。

トレンチ名	延長	主な時代	主な遺構	出土遺物等
1トレンチ	1.3m×23.1m	弥生	土坑、溝	弥生土器片、土師器片、土師質土器片 サヌカイト、瓦片
2トレンチ	1.2m×26.9m	縄文晚期 ～中世	土坑、溝	縄文土器片、石斧、弥生土器片 土師器片、土師質土器片、陶器片
3トレンチ	1.1m×15.3m	弥生	溝	弥生土器片、土師質土器片、須恵器片
4トレンチ	1.2m×22.0m	縄文晚期 ～弥生後期	溝、土坑	縄文土器片、弥生土器片 土師質土器片、土師器片、須恵器片

第12表 綾歌町富熊字沖地区試掘調査 トレンチ概要

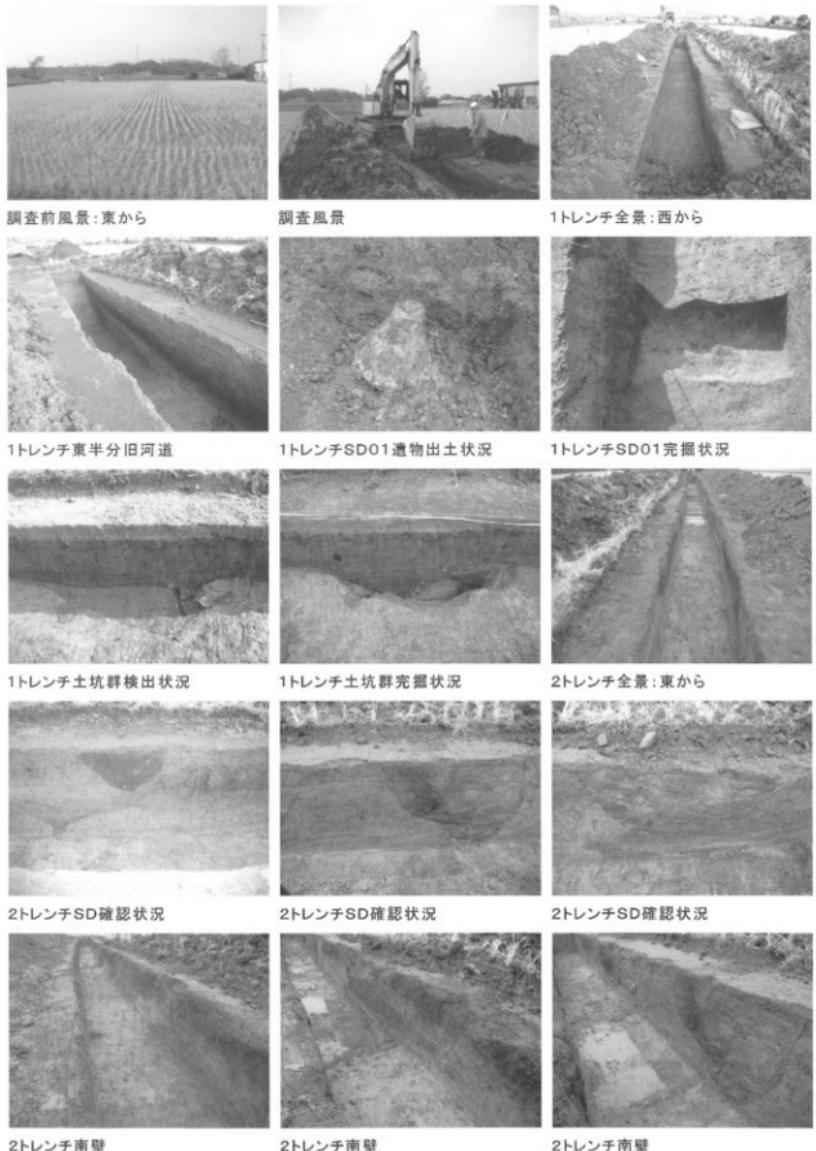
調査の結果、全城で遺構を確認することができた。確認できた遺跡の時代区分は、縄文時代晚期から中世に属するものと考えられる。確認できた遺構の種別は、大半が溝であり、部分的に土坑が確認された。

遺跡の種別としては、住居址等の建物は確認されていないが、周辺の遺跡分布状況等から検討すると集落跡であると考えられる。遺構は、計画区域内に留まらず、周辺にも広く展開していることが予想される

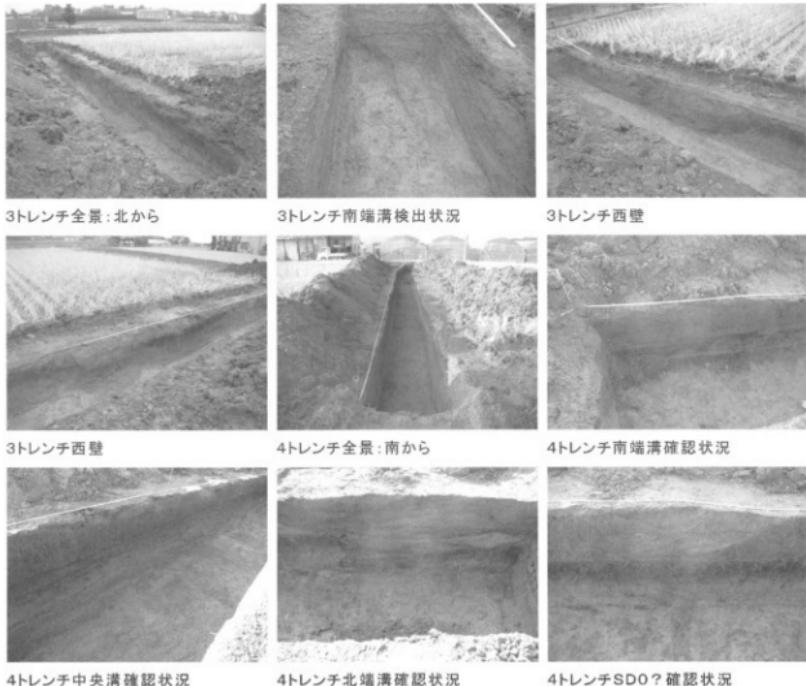
4.まとめ

今回の調査で、計画区域内全体で遺構の分布を確認することができた。遺物も多く出土しており、縄文時代晚期から中世にかけての複合遺跡であることが確認された。特に弥生時代後期に関しては非常に密度が濃く、弥生時代前期に少し上手の台地上で行末遺跡を中心とした集落が展開していたものが、後期になり行末西遺跡や今回の対象地付近の少し低いエリアに集落拠点が変化したことを表す。これらのことから、計画区域全城について保護措置が必要であると考えられる。

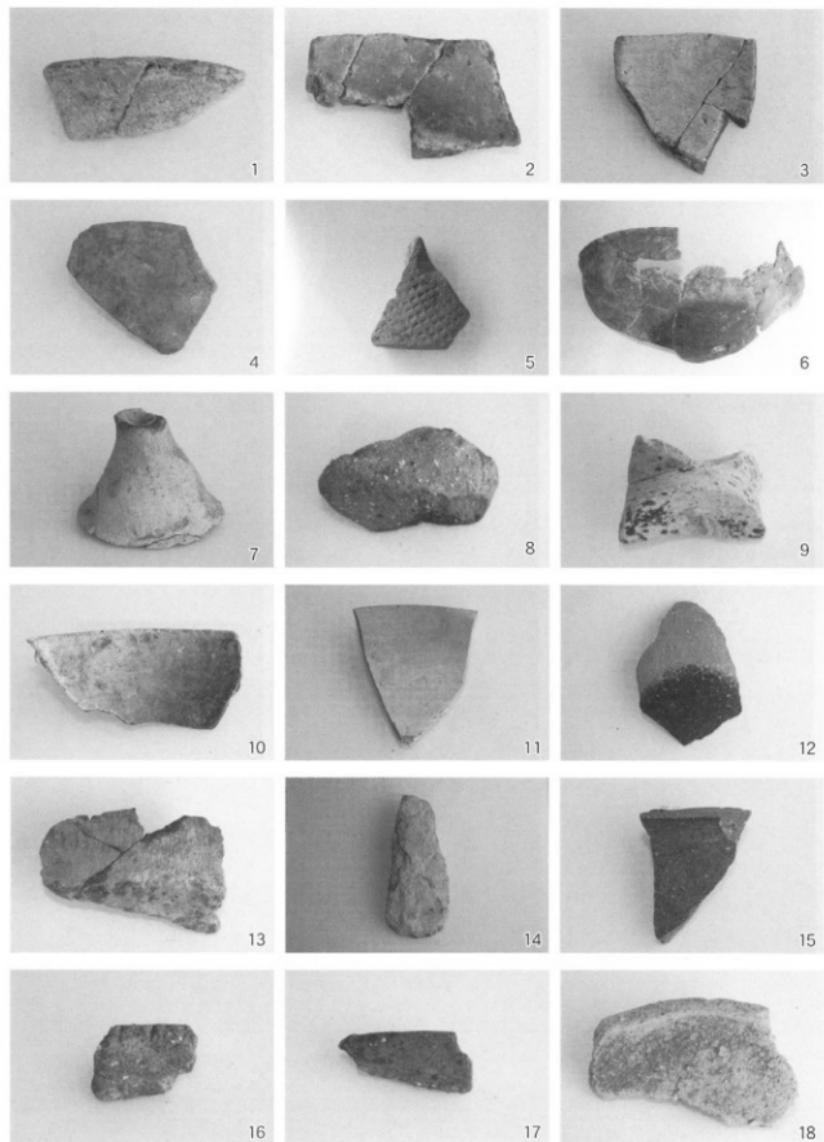
今回の調査区域は、『行末西遺跡』の一部として追加登録されることとなった。



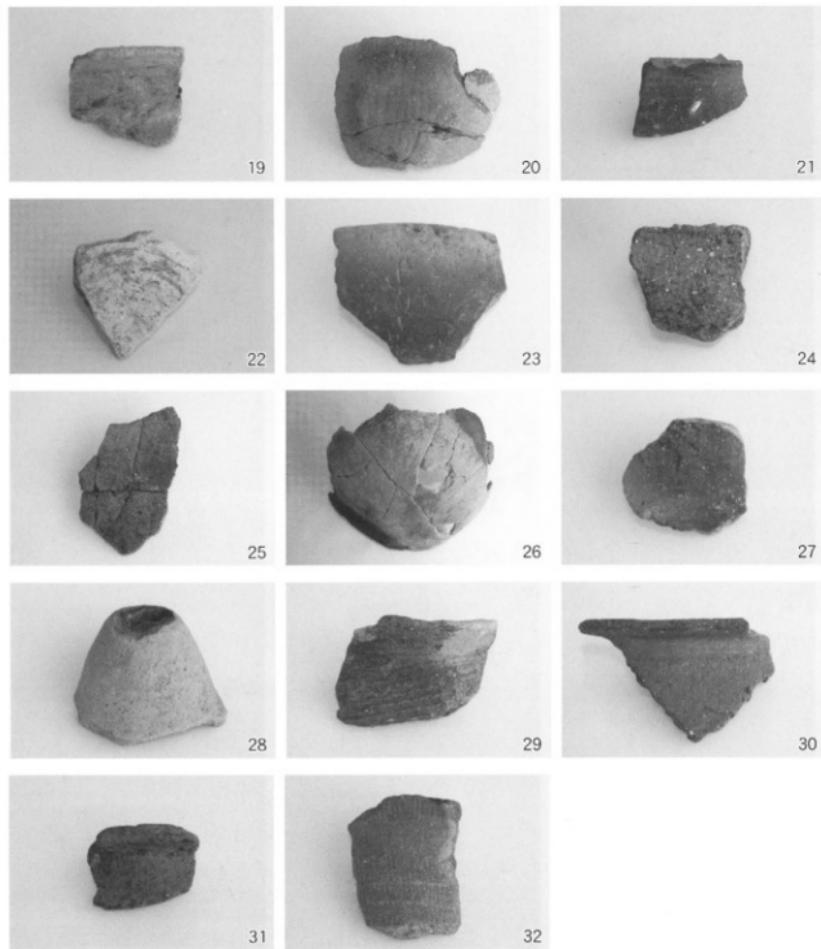
図版26 綾歌町富熊字沖地区試掘調査(1)



図版27 綾歌町富熊字沖地区試掘調査(2)



図版28 綾歌町富熊字沖地区試掘調査(3)



図版29 綾歌町富熊字沖地区試掘調査(4)